

ONNO

慶應義塾大学商学部
小野晃典研究会
OB・OG会 会誌

SEMI

NEWS



2015
Vol. IX

目次

巻頭言	1
小野 晃典先生	
OB・OG 会長の挨拶 ——No Pain, No Gain——	2
第1期ゼミ長 白木 俊介	
OB・OG 通信	5
第1期 OB 井川 倫士 「全ての答えは現場にある ——仮説と検証で乗り切る——」	5
第1期 OB 酒井 誠太郎 「上原ひろみの話と会社のカネで語学留学した話と結婚した話」	9
第1期 OB 柳川 政人 「大和・日本・JAPAN」	13
第2期 OG 森口 悦子 「近況報告 2016」	16
第2期 OB 田中 大介 「何のために働くのか」	19
第3期 OG 酒巻 恵子 「近況報告」	21
第3期 OB 横山 嵩 「『浴衣』」	23
第4期 OB 大隅 隆広 「現在の仕事と近況報告」	26
第5期 OB 田中 照太 「大学卒業後のご報告」	27
第6期 OB 小早川 景光 「今年の抱負」	29
第9期大学院生 白石 秀壽 「孤独のランチ：三田編」	31
第8期 OB 石田 陽一朗 「別次元へいきます」	33
第8期 OB 岩崎 裕士 「やりたいことやったもん勝ち」	34
第8期 OB 黒沢 祐介 「空想上の生物:大人」	35
第8期 OB 荻野 真央 「越境と克己」	37
第9期 OG 水田 弥英 「知ってたもん勝ち、やってたもん勝ち」	39
第9期 OB 菅原 暉 「高校生ラップ選手権」	40
第9期 OB 竹内 亮介 「チャンス」	42
第10期 OB 石井 隆太 「何が響くかわからない、誰が見てるかわからない」	43
第10期 OB 中村 世名 「年刊・石井隆太ニュース (2016年2月号)」	44
第10期 OG 野澤 鷹友子 「27時間かけて広島に行き、もみじまんじゅうを2万円買った話」	46
第10期 OB 仙田 晃史 「思い出の椿屋」	49
第10期 OB 渡邊 高平 「新たなる挑戦」	51
第11期 OG 蓮岡 聡美 「諦めと絶望」	53
第11期 OB 伊礼 大夏志 「ぶたかし」	55
第11期 OB 久米 敬太郎 「前へ！」	58

第11期OB	内藤 節	「指針」	59
第11期OB	佐藤 和也	「謝罪力」	61
第11期OB	佐藤 優輝	「私もルー大柴さんになりたくて」	63
第11期OB	住田 英紀	「近況報告：妖精と呼ばれなくなってから」	65
第11期OB	立松 宗磨	「考えを変えねば」	67
第11期OG	土屋 晴香	「Let's Learn English!」	69
結婚特集			71
第3期OB	高木 研太郎	「結婚のご報告」	71
第5期OB	細川 晋吾	「結婚のご報告」	73
第7期OB	岸本 啓太郎	「それからどした」	75
第8期OB	中尾 優美	「福岡での新生活」	76
第9期OB	秋山 賢輔	「秋山、結婚したってよ」	78
第9期OB	勿本 慎弥	「婚姻届受理証明書」	80
第9期OB	松本 実希子	「近況&結婚報告」	82
第12期生 卒業エッセイ			84
第12期	荒井 礼	「“小野ゼミ生”になるために」	84
第12期	芦澤 友也	「失敗なくして成長なし！」	85
第12期	羽佐田 智也	「2年間を振り返って／後輩たちへ」	86
第12期	林 英里香	「変わらない癖」	87
第12期	平嶋 健也	「主体性」	88
第12期	伊藤 大貴	「感謝」	89
第12期	梶田 伸吾	「泣き虫ゼミ長」	90
第12期	上谷 崇人	「自分を肯定すること」	91
第12期	岸部 海人	「泣くこと」	92
第12期	北島 大輝	「無力な私からの次回予告!？」	93
第12期	松山 峻典	「ジェットコースターの楽しみ方」	94
第12期	中原 裕人	「春」	95
第12期	中野 真衣	「仲間」	96
第12期	小野寺 隆志	「小野ゼミという虎の穴」	97
第12期	佐野 諒平	「『変心』と『成長』」	98
大学院生 卒業エッセイ			99
第9期大学院生	菊盛 真衣	「このたびは」	99
第9期大学院生	白石 秀壽	「我が学者人生のモデル」	101

新規ゼミ生（第13期生）のご紹介	102
大学院生のご紹介	107
2015年度ゼミ活動紹介	111
2015年度活動紹介	111
第13期 共同研究プロジェクト紹介	117
第12期 卒業論文テーマ紹介	119
AMA出場報告	122
CAT-G 優勝報告	123
インカレディベート報告	124
KUBIC 準優勝報告	126
読売マーケティングコンペ 最優秀賞受賞報告	129
KSMS 国際学会報告	131
ICAMA 受賞報告	133
第12期英語論文海外学会報告	136
全国大学生マーケティング・コンペティション 準優勝報告	138
商学会賞受賞報告	140
OB・OG名簿／現役生名簿	142
OB・OG総会賞品提供者一覧	155

巻頭言

小野 晃典先生

私には、厳しくも学恩深い恩師がいる。小野ゼミ創設と入れ替わるかのように定年を迎えられ、研究・教育の最前線から退役されて久しいが、それだけに、年に一度、新年のご挨拶に伺って身近に接する機会は貴重だ。退役とは無礼な話で、1年間の私の研究・教育に言及されるお姿はまさに現役だ。震え上がるほど恐ろしく、耳の痛い話にしばし立ち直れなくなるほど落ち込む時もある。その一方で、手放しで褒められることもあって、そんな時は嬉しい。その一言一句が、強烈な印象を残して、鮮明に記憶される。

だが、威厳ある昔ながらの大教授は、ときに“損”をする。小人たちは、叱られたことを逆恨みし、あるいは、権威主義者だと誤解して、去っていく。そうでなくても、叱られるのが不快なので距離を置く。そうすると、教えに耳を傾けて身を正し、自己成長を遂げる機会を逸してしまうわけで、私自身はそれではいけないと思うが、大多数の学生はそうではない。そのせいか、大教授は、学生たちに囲まれながらも、その中心でいつも何処となく孤独にみえた。そして、そのことが、いつも頭の片隅で気になっていた。

実際、いざ自分が教鞭を振るう立場になった当初、学生との距離が遠い大教授キャラでは自分が寂しい思いをするだろうと本能的に感じたのか、私は恩師に比して近しく学生と交わった。そして歳を幾分か重ねると、ますます学生に対して寛容になった(自覚はないが、古いOB・OG諸君に言わせるとそうらしい)。さらに、2年前から毎週1コマ、悲しいとか、不安だとか、ヤル気がでないといったネガティブな心情の学生たちのケアをする心理カウンセラーとして勤務するようになった。そうすると、小さき彼らの心の傷に共感しつつ相談に乗ってやらないといけないので、いよいよ恩師とは懸け離れたキャラになってきた。

それでも、道を誤った学生を見つけた時、私は叱らないといけない。実は疲れていても、魂を込めて叱ってやらないといけない。何かを成し遂げた学生を見つけた時、私は喜ばないといけない。実は落ち込んでいても、一緒になって心から喜んでやらないといけない。辛くなった学生を見つけた時、私は泣かないといけない。実は幸せでも、寄り添い共感して泣いてやらないといけない。くじけずに頑張っている学生を見つけた時は、私も頑張らないといけない。実はくじけそうでも、一緒に頑張ってやらないといけない。

ゼミ創設15年目は、自分の心情とシンクロしない言動を強いられることの多い年だった。本来の自分のものではない言動を発する身体から、本来の自分たる魂が遊離し、戻ってくるのに時間がかかる体験を、幾度となく味わった。そして、それこそが、私がかつて恩師の姿にみた孤独の正体だということを悟った。

最近、新年のご挨拶に際し、恩師が、喪中であってもお風邪を召していても、それを隠してお会いくださっているということを知った。福澤の言葉を借りれば、「瘦我慢」ということか。あるいは、「武士道」、「騎士道」、「ノブレス・オブリージュ」。私も、恩師と同じ美学を貫く生き方をしたい。

OB・OG会長の挨拶

—No Pain, No Gain—

第1期ゼミ長 白木 俊介

いつも、長文のエッセイを執筆していましたが、今回は簡潔なエッセイにしたいと思います。その理由を正直に話すならば…。それは、大きなチャレンジへと舵を切ったら、まったく、自分に余裕がなくなり、スケジュールもままならず、いっぱいいっぱいになっているからです(汗)。正直、自分でも、これ程、環境に適応するのが大変だとは思わなかった。その状況を近況報告として書かせていただきます。

◆チャレンジ1：シンガポール国立大学(NUS) MBA への入学

2015年8月からNUSのPart-time MBAコースに入学しました。Part-time MBAは6:00pm-9:00pmに授業が行われるMBAプログラムで、働きながら通学することができます。週2回の授業に出席した場合、約3年間かけて卒業となります。現在はSemester2が始まったばかり。シンガポール人、中国人、インド人、アジア各国からの優等生と一緒に、英語で議論しながら、必死に授業やグループワーク、プレゼンテーションをこなしている状況です。



著者が通われているシンガポール大学のビジネススクール

“Get out of your comfort zone” (居心地の良い場所から出る！)

「自分の殻を破れ！」と入学当初の集中講義で言われます。この言葉の意味は「自分にとって、どこが、居心地がよくて、そして、どこを知らず知らずのうちに逃げてしまっているのか」を、もう一度、省みて、チャレンジをするということ。常に、この授業ではチームやラーニングパートナーと自己評価と他者評価を行います。アジアの中で、再度、自分を捉えなおしてみると、本当に今までの自分がちっぽけに見えることもあります。インド人や中国人のアグレッシブさに比べると、日本人は本当におとなしく見られがち。その中で「日本人のユニークネスは何か？ 自分のキャラクターを最大限に発揮できることは何か？」と、自問自答しながら、グループワークやプレゼンテーションに取り組んでいます。

◆チャレンジ2：シンガポールのエージェンシーへの転職

MBAの入学と同時に、シンガポールにあるブランドエージェンシーに転職しました。経営者は日本人ですが、社員のほとんどは、シンガポール人。英語と日本語を使いながらの仕事環境です。以前の職と同じ広告業界なので、やっていけると思っていたのですが、国が変わると、仕事の進め方は大きく違うことを痛感します。また、仕事上の英語での議論のレベルが、MBAのクラスと求められるレベルが違うことも感じます。会議などの大人数での議論において英語で話をまとめていくことはとても難しく、今は上司に助けを借りながら仕事を進めています。早く自分で仕事を管理できるように必死に取り組んでいます。



NUS MBAの入学当初のTeam Challenge

◆チャレンジ3：家族を残して、単身での生活

私のシンガポールでの生活が落ち着くまで、妻と娘（2歳）は東京で暮らし、私はシンガポールで単身での生活。妻も東京で働いているので、妻の母に子育てを助けてもらいながら、東京での生活を頑張ってもらっています。私は週末にSkypeで娘と画面越しに「タッチ」と言って、手を合わせてコミュニケーションを取るのが精一杯。迷惑をかけている分、妻や娘がシンガポールに来た時には、家族で過ごす時間を少しでも増やしてあげたいと思います。

駆け足で、近況を報告させていただいたため、非常に拙い文章となってしまいましたが、少しでも、最近の生活が垣間見えれば幸いです。転職とMBAを同時にスタートする人は、同級生でも稀で、さらに、家族と離れて生活を始めるというトリプルチャレンジをしているのは、多分、私だけだと思います。本当に前代未聞のチャレンジをしてしまった（汗）。



年末、著者が一時帰国した際の写真—ご家族でクリスマスパーティー

今までの環境から抜けて新しいチャレンジをすることは、本当に勇気がいること。そして、新しいチャレンジは、思った以上に大変で、苦しいことを実感しています。特に家族がいると、自分だけの問題ではないですからね。でも、ふと、過去の自分を振り返ってみると、何か、大きく変化をしていることに気づかされる（何が変化しているのか、まだ理解できていませんが）。今は辛いからといって、混雑した日本の通勤電車で「このままで、いいのかなあ。」と悩んでいた過去の自分に戻りたいとは思わない。このチャレンジは、苦しいながらも、正解だったんだと、実感しています。

◆No Pain, No gain（苦勞なくして、得られるものはない。）

読んでいただいた方は、私がシンガポールでトンネルの中をさまよっている様が理解できたのではないのでしょうか。多分、今は、変化に伴うサナギの状態、自分の中で、混乱と闘いながら、すこしずつ、自分のやり方を、体得していく段階。そのために、苦勞や痛みを伴っているのも事実ですが、トンネルの向こう側に、光が見えてくることを信じて、頑張っていきたいと思います。きっと、来年のエッセイでは、もう少し、バージョンアップした私が描かれていると思います。是非、皆さん、期待しててください！

追伸：シンガポールに遊びに来たら、是非、励ましに来てください！ 余裕無いですが…（笑）。

OB・OG 通信

全ての答えは現場にある

——仮説と検証で乗り切る——

第1期 OB 井川 倫士

こんにちは。毎度おなじみ1期の問題児、井川です。また一年の始まりにゼミの寄稿文を書いています。今年も締切りに間に合いませんでした。申し訳ないです…。さて今回は、近況報告、最近心掛けていること、野望、そして自分への戒めとメッセージを送りたいと思います。

◆近況報告と前回寄稿文の検証

2015年6月28日、茨城県銚田市議会議員選挙にて当選させて頂き、私は本市最年少議員となりました。小野ゼミの方達から多額の寄付を頂き、選挙戦を戦えた結果です。本当にありがとうございました。この噂ばかりでリアルな状況が語られない世界の「選挙」と「政治活動」について報告をさせてください。

地元銚田市は、農業産出額で市町村別トップ5の自治体です。けれども議員報酬は月額28万円。話題の政務活動費ありません。市町村議員の報酬はその自治体の人口比です。このため副業をしないと生活できません。でも夢を叶えました。

私の後援会活動、並びに選挙資金は合計約200万円でした。つまり人口50,000人の田舎の自治体であれば、この程度の金額で当選が可能だということです。この検証結果は、前回の寄稿文でも掲載した仮説と一致しました。だからこそ、皆さんの寄付が大きかったのです。

仮に「議員になって〇〇をしたい」と思っている人がいれば、周りにいる選挙に詳しい人の話を聞いてみてください。大体間違っています（笑）その人たちは故意にあなたを騙そうと思ひ、誤った答えを教えている訳ではないかもしれませんが。これも前回「なぜ人生の先輩からのアドバイスが役に立たない間違った答えであるのか」という命題への仮説から考えてみます。それは以下の3点。

仮説1：時代が違うので今の時代にマッチしないから

仮説2：噂話が独り歩きしていて、実際にその人が体験、経験したことではないから

仮説3：そもそも噂話が、ある一定の力のある人にとって都合の良いように操作されているから

私の選挙に対する検証結果は、これらの仮説の複合型でした。選挙に詳しい人たちは、あらゆる選挙をごちゃ混ぜにしてあなたにアドバイスするでしょう（つまり、国会議員選挙・都道府県知事選挙・都道府県議会選挙・市町村議会選挙・市町村長選挙。そしてこれらの補欠選挙）。選挙区の有権者数・当選者数が

異なる選挙を同じ1つの選挙という枠で捉えているため、アドバイスのほとんどが役に立たないのです。

別の想定として若い候補者が当選しやすい社会情勢に於いて、新人議員の当選は応援する古参議員の落選を招く場合が挙げられます。しがらみの無いやる気や発信力のある議員の出現は現状のステークホルダーたちの創り上げた世界を乱す結果に繋がるため、あなたの志を砕こうとするかも知れません。

以上のような理由から、周囲の選挙に詳しい人たちはあなたに間違えた情報を与えることが想定されます。ではどうすれば良いのか。実際に現場を経験した現役の議員に話を聴くことをお勧めします。

やはり現場に聴くことが大事なのです。加えて自分の住んでいる自治体や出身自治体の1次データや1次情報を調べてみてください。意外な結果が出てきますよ。

◆現場を知る人から、話を聴いて自分で体験する

自分が体験できるのは直接経験と間接経験しかありません（これを教えてくれたのは、同期の井上貴晴君です。イヤラシイ二十歳だ）。1日24時間と限られた時間の中では、直接経験を増やすことに限界があります。だから私は敢えて、20代には良質な間接経験を増やすことをお勧めします。このころは直接経験できる機会が多く、意識しないと間接経験を増やすことが出来ないからです。多感な時期だからこそ、間接経験から得られるモノも多いと感じます。書籍や新聞、映画等のメディアに触れる機会を増やし、興味を持った間接経験を有り余る時間を使い、直接体験できる現場に飛び込んで欲しいのです。

自分の選択は、A、B、C…という自身の知る選択肢からしかできません。まずは選択肢を増やして欲しいです。更に20代で多くの間接経験に触れることで、より質の高い情報を見抜き目利き力が養われていくことになります。その結果、以降の人生を充実させることが可能となると考えます。「80:20の法則」(パレートの法則)の応用方法について、実感を伴った学びを得て欲しいです。

一方、1日を仕事と家族との時間で過ごすことが増える30代以降は、直接経験を増やすことに注力しています。なぜなら移り変わる時代の中で、今の時代に自分の感覚がマッチしなくなるからです。世間で語られる噂話や常識が事実と異なる状況を、議員になってから本当にたくさん経験しています。人の話を鵜呑みにせず、現場を知る人から話を聴くこと、又は自分で体験することを心掛けたいです。

◆私が実際に議員になって何をしたいのか

私は今回の選挙で3つのチラシを作成しました。最初から訴えたスローガンは、「パパママ視点でのまちづくり」です。自分に対するSWOT分析を行い、50歳以下の議員がゼロで、女性議員が1名の現状を強く意識したメッセージにしました。特にママさん達からの評価が高かったようです。

第1弾チラシは、地元銚田市の課題解決に対してこれまで多くの人たちから意見を聴き、自分の体験から得た仮説を「1ダースの約束」として示しました。その後の第2弾チラシでは、後援会活動を通してインタビューした現場の声（市民を含めた約1,000人分の意見）から、「1ダースの約束」を3つのプロジェクトにまとめ直しました。最後の第3弾は、ライバルである他候補者の政策を研究して、自分の政策を差

別化し精査した後に、選挙広報として配布しました。

次の3つがその政策ですが、これといった特徴を感じ無いかもかもしれません。しかしこれほどシンプルに「市民の声」を政策に描いた人物はライバルには居なかったということでしょう。(詳しくは web で)

- A) 市民のお金が正しく使われているかを分かるようにする
 - 「議員は何をやってんだ？興味も期待もしてねえよ」とは言わせない—
- B) 銚田に戻って来たい、住みたい若者の受け皿を整備する
 - 「若いのが減って、子供もいないし…年寄りばかりになっちゃうべ！」とは言わせない—
- C) 働きたい人が働ける場所や機会を増やす
 - 「銚田には働く場所がねえ。食品加工工場でもあれば…」とは言わせない—

◆自分への戒めとメッセージ

近年起こってきている文明のパラダイムシフト(斬新なアイデアにより時代が大きく動くこと)は、日本政府の政策方針転換からも見て取れます。これは2000年ごろから叫ばれてきた地方分権の流れから地方創生時代、「まち・ひと・しごと総合戦略」としてまとめられようとしています。

新しい時代には仮説を立て検証する能力を持ち、主体的に人生のハンドルを握ることが重要となってくるでしょう。つまり仮説検証や主体的な学びを实践する小野ゼミ生にとって活躍の好機と言えます。

こういう価値観の転換が起こる時代には、人生の先輩たちのアドバイスが通用しなくなります。しかし時代を超越した真理はいくつもあります。その1つが、「変化の最先端は現場にある」というもの。現場から得た情報を元に、小野ゼミで培ったフレームワークを用いた情報整理を行うことで、MECEに分析した結果から仮説を導き出し、その仮説を検証し続けてください。

しかし新しい仮説を多くの人に納得してもらうためには、「温故知新」という論語の言葉にもある通り、「ひと・もの・かね・ノウハウ」それぞれの歴史を知る必要があります。特に「ひと」は一個人の人生史へ敬意を払うべきでしょう。そこが“まさに現場”。『7つの習慣』にある通り、人は理解してから理解されるからです。現場にある数字や定性的な情報から、これまでの経緯を把握し未来を予測します。養ってきた真理を見抜く“自利き力”により、少しだけ先回りすることで時代を乗り切っていきましょう！お互いに“ふあいと”！



著者の政治家 HP



著者，当選後の初登庁



著者の御息女，侑理ちゃんのお七五三の時の写真

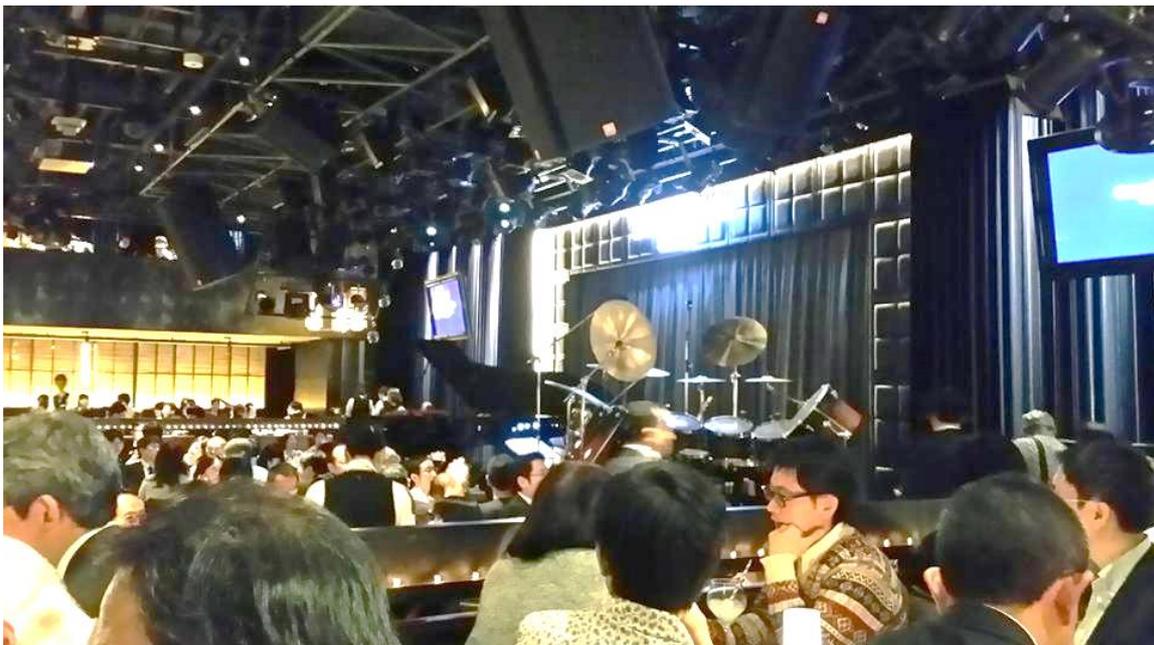
上原ひろみの話と会社のカネで語学留学した話と結婚した話

第1期 OB 酒井 誠太郎

「今年一番の出来事って言ったら、やっぱり街で上原ひろみに会ったことね」と嫁。その言葉を聞いて僕は大笑いした。

事情がわからなきゃ普通の一言だけれども事情を知ればあなたはきっと大笑いを通り越して呆れるかもしれない。だって今年の8/8に僕ら入籍したんだもの。そして呆れることに自分もひそかに「今年一番の出来事は、結婚もまあ大きいけど、それよりか上原ひろみに東京で偶然会って一緒に写真撮らせてもらったことだなあ」と同じことを思っていた。あ、上原ひろみってのは世界的に有名なジャズピアニストです、念のため。あ、一緒に撮った写真は「フェイスブックとかには載せないでね（はーと）」と言われたので載せられません。自慢したいけど残念！

で、「今年一番の出来事」と言えば上原ひろみなんだけど、2015年は色々ありすぎてなんだか頭が全く整理ができない。2015年というか、この1ヶ月なんだか大変でした。先月末にからつい先週日曜までの2週間、会社のご意向でカナダに語学留学に行っていて、そして帰ってきた翌々日のおとつい火曜、ブルーノートに上原ひろみのライブに行って、お次は明日金曜札幌（嫁の故郷）に。結婚式が明後日土曜にあるんです。んで戻ってきたら来週木曜今度は上原ひろみとオーケストラのクリスマスコンサート。ここまでで私は何回「上原ひろみ」と書いたのだというくらい上原ひろみ尽くしですね。



上原ひろみ開演前の BlueNote 東京

と、なんだかとりとめもなくスマホで書き始めたのですが、このままとりとめもなく書き続けましょう。
家のパソコン、嫁が札幌に持ってっちゃったんですよ¹。

そうそう。カナダ留学。

留学時点での僕の英語力は TOEIC のスコアにして 855 点。仕事で全く英語を使うこともなく、そもそも英語好きじゃないわりには地道に地道に勉強を続けてきたことに我ながら誉めてあげたいくらい。そんな自分を神様は見てくださったのですね。留学というプレゼントをいただきました。実際にチャンスをくれたのは神様ではなく上司ですがね。てか、この先英語使う仕事あるのかしら？

今回僕が行ったのはカナダのニューブランズウィック大学の英語学習プログラム。「英語以外の言葉は使うなよ、絶対にだ」と宣誓書を書かせられ、宿泊先も英語しかわからない老夫婦という、カナダで英語だけの生活をするようになったのだが。

いやあ。タフでしたわあ。

僕と会社の同僚の日本人 2 人以外の生徒はコロンビア人、フランス語を母国語とするカナダ人、あとサウジアラビア人もいたな。僕ら日本人以外は「キミたち英語の勉強必要ないじゃん」ってくらいに英語話



カナダ語学留学先にて（著者後列右から 3 番目）

¹ Word に書き起こしたところ、Word 先生にことごとく赤波線青波線いただいているのですが、このときのテンションを尊重し、そのまま提出させていただきます（2016/1/1 追記）。

せる。先生たちは僕ら日本人だけに話すときはゆっくり話してくれるんだけど、他の生徒がいるときは手加減なしにネイティブスピード。んもう「何言ってんだかわかんねー(笑)」という日々。ある授業ではアメリカの sitcom²見せられて「どう？今この女性言ったこと聞き取れた？」と先生。英語ドラマ聞き取れたら英語の勉強いらなから！と心の中で激しく突っ込んだけど一緒に授業受けていたサウジアラビア人は sitcom のセリフ聞いてゲラゲラ笑ってるし！

プライベートで遊ぶ時間もほとんどなく、土日も他の生徒さんとアクティビティ。留学先のフレデリクトンという街は人口 4 万人の小さな都市でそもそもプライベートで遊ぶと言ったらビリヤードくらいしかない街でした。

まあ、そんな日々の中諦めることなくめげることなくとにかく英語で話してきました。せっかくのチャンスなのでとにかく典型的日本人みたくシャイになってもなんも上達しないだろうなと思ってバカになったつもりで間違えまくってもとにかく話してきました。そうそう今日このあと会社で TOEIC 受けるのです。楽しみです³。

あ、その大学で単独で英語を勉強しに来ている日本人学生がいました（早稲田って言ってたな）。大学を休学して勉強しにきてるそうで、留学前は大学受験レベルの英語だったらしいけど会った時点では僕よりもはるかに話せてました。なんでも前は別のカナダのもうちょっと都会の大学で英語の勉強してたのだけれども、周りは日本人ばかりで授業以外ずっと日本語で、これじゃ何しにカナダに来たかわからない！と飛び出しフレデリクトンの街に来たそう。フレデリクトンは逆に周りは日本人全くいないし、それどころか宿泊先の寮は大学向けの施設なので周りはネイティブばかりだそうで、しかもかなり訛ってるうえにスラングだらけだそうで「何言ってんだかわかんねー(笑)」な世界なんだそうです。そんなタフな生活している学生もいるんですよ。それに比べれば小野ゼミなんて全然エグくないですよ、きっと（エグさの方向が違うか）。

以前から説教臭く英語勉強しなよ、とくどくど書いていますが、ほんま、キャリアアップしたいけど何したらいいかわなんないって人とはとにかく英語勉強しましょう。ぶっちゃけ留学しなくてもお金がなくても日本で安価に英語勉強できますからね。レアジョブとかまあこれまで 13 年間仕事で英語使う機会なかった僕が英語の必要性説いても全く納得感ないでしょうが。

はい、留学と英語のお話おしまい。

次、結婚の話を中心に。

僕が札幌で働いていた頃に付き合い始めてもう 10 年も経ち、嫁がついに大台に乗っかるので、まあ切りもいいし、と嫁の誕生日の 7/30 にブ



式直前、控室にて

² フレンズとかフルハウスみたいなシチュエーションコメディのこと。

³ 795 点とみごとに 60 点下がりました。んがくく (2016/1/1 追記)。

ロポーズ。末広がりめでめでたいからと8/8に入籍するに至りました。

もう10年近く同棲しているので結婚したからといって何かが変わったという感覚は全くないのだけれども、新たな発見としてまさか嫁が「結婚」とか「結婚式」とか「結婚指輪」とかに興味あるとは露知らず、彼女も1人の女性なのだたと再認しました（余談ですが結婚式は家族だけでこじんまりやるつもりなんだけど、結局僕の故郷の金沢や今の住まいの東京でもイベントやることになりそうで、こんなだったら式と披露宴と2次会を1日にまとめてセットでやっつきゃ良かったと今さら後悔してます）。これまで結婚したいと言わなかったのはなんでも自分から結婚したいと言い出せば一生何かにつけて「お前が結婚したいって言ったから」と僕に言われると思って言わなかったそう。悪いことをしました。

が、件の上原ひろみ>結婚のくだりですよ。10年も付き合っているとそんなもの。僕らにとっては結婚よりかは上原ひろみに会ったことの方がよほど大事なのです。

けどこれってこれまででなんとかんだ10年続いた秘訣かもしれません。僕らは2人とも北海道日本ハムファイターズファンだし、落語が好きで特に立川談志が好きだし、歌舞伎も好きで特に音羽屋轟貞だし、舞台見るのも好きで特に野田秀樹が好き。2人とも山に登るのも好きで、大衆居酒屋で安酒を呑むのが好きで、猫が好きで、タモリが好きで、宮沢りえが好きで、そして何より2人とも上原ひろみが好き。つまりは価値観が似てるということですかね。実はほとんどが付き合い始めてから好きになったものなんだけれども。

何の参考になるかわかりませんがパートナー選びには趣味嗜好、その他諸々が合うことが一番大事なんじゃないかな、と思います。そしてそれって最初から共通してなくても2人で時間過ごす中で共有していくことが大事なんじゃないかな、と思います。

もちろん未だに共有できないこともいっぱいありますよ。僕は三島由紀夫の小説がわりかし好きなんだけれども彼女は読んだことがないはず（金閣寺の市川崑の映画版や同じく宮本亜門の舞台版なら「最高だ」という意見で一致してますが。小説は映画や舞台と違って一緒に読めないものね）。逆に僕は彼女の好きな美輪明宏のことを嫌いじゃないけど好きというほどでもない（黒蜥蜴や毛皮のマリーは好きだけどそりゃ三島や寺山が好きただよね）。僕は長澤まさみがわりかし好きなんだけれども彼女は大嫌いなままだし、彼女の好きな岡村靖幸は僕にはサッパリ。あ、そういえば2人ともラーメン二郎好きだ。



2015年のラーメン二郎@三田本店
もちろん奥様と行かれたそうです

ともかく、わかりあえないことはそれはそれとして、一緒にいて楽しく過ごすためには2人が2人して楽しいと思えることを見つくと良いのではないかと。

ということで、なんかとりとめもない文章になって恐縮ですが。僕は今のところ楽しく毎日を過ごしています。以上！

大和・日本・JAPAN

第1期 OB 柳川 政人

昨年の OB・OG 会誌にて予告の通り、2015 年 4 月の辞令で 4 年間駐在したシンガポールから東京本社に帰任しました。大学入学（1999 年）以降、大学卒業（2003 年）、転職（2007 年）、転勤（2011 年）とサッカーワールドカップの翌年に私にとっての変化が訪れてきましたが、自称「ワールドカップ翌年の男」のジンクスは 2015 年も継続されました。この法則に則ると次の変化の年は 2019 年に訪れることになります。2020 年の東京オリンピックを私は何処で迎えることになるのか今からちょっと気になっております。

さて、今回は大袈裟ですが、我が国「日本」を振り返ってみたいと思います。私は 1992 年から 6 年半をアメリカ・ニュージャージー州で過ごし、2011 年からの 4 年間をシンガポールで過ごしました。長期海外生活から日本に帰国するのは人生で 2 回目になりますが、2015 年 4 月にシンガポールから帰国した際、真っ先に感じたのは、日本のご飯は安くて、美味しい！ということです。スーパー、コンビニ、居酒屋、ファミレス何処に行っても、値段とそのクオリティに感銘を受けました。4 年日本を不在にしている間にクオリティは上がり、値段も消費税率が 8%に引き上げられたにもかかわらず、僅かの値上げに留める企業努力は素晴らしいと感じました。素晴らしいと感じるのは良いですが、ほいほい買ってしまうのは良くないですね。

そんな美味しい「JAPAN」を求めて今日、銀座、築地、浅草、スカイツリーなどの観光地は中国人を始めとする多くの外国人が訪れ、街を賑わせています。10 年前には想像出来なかった光景は、私の働く丸の内にも垣間見え、1 度も外国人に遭遇せずに 1 日を過ごすことが非常に困難なほどです。

中国・アジア諸国在住者向け観光ビザの発行緩和により外国人観光客は増えましたが、受け入れる日本側は果たして外国人を受け入れる体制が整っているのか疑問に感じるものがしばしばあります。外国人が来訪を想定し、日本語、英語に加えて、中国語、韓国語が表記されていますが、その場で対応する方は当然の様に日本語での対応です。当然ながら、伝えたいことは伝わらず、その後ろには長蛇の列が出来てしまいます。列が出来ると割り込みする人が出てきて、これらの観光客に対して悪い印象を持つ日本人も出てくるでしょう。飲食チェーン店やコンビニの店員に中国人がコスト面から採用されているのだから、中国人が多く訪れる所に、中国人向け特設カウンターなどを設けて、中国人スタッフを配置すればより便利になるのではと思ったことは 1 度や 2 度ではありません。

流行語大賞にも選ばれた「爆買い」で、日本が潤うのは大変喜ばしいことではありますが、ホテルや空港での「おもてなし」は当然ですが、我々の日常に近いところでのおもてなしが出来なければ、観光客来訪は一時的ブームで終わってしまう恐れがあります。

仕事柄、外国人と会う機会が多々ありますが、数多くの方々から「日本は素敵な国だから是非行ってみたい」、「前回とは違う都市にまた行ってみたい」などと耳にし、日本人であることを大変誇らしく思えます。実体験や口コミで日本に対して良い印象を持った人達は日本へ来訪し、リピーターとして改めて日本

を訪れることでしょう。しかし、後味の悪い経験をしてしまった場合、恐らく再来日は見込めないと思います。

多くの観光客を輸送する為に観光バスが投入されていますが、バスの待機場所は数年前までと変わっておらず、バスを全て収容出来ず道に溢れ、路駐状態で道路を塞いでしまうシーンに遭遇したことも何度もあります。この浅草で見かけた光景は伝統ある街から日本人を遠ざけてしまう恐れもあります。上野・アメ横のとあるお土産屋の前を歩いていると、日本語の呼び掛けに加えて、中国語や英語が聞こえてきました。振り返ると店員のおじさんが日本語で呼び掛ける横でおばさんが流暢な中国語と英語で接客されていました。しかし、隣の鮮魚店ではオジサン店員達が「中国人は見るだけで、買って行かない」とぼやく声も聞こえてきました。外国人観光客をもてなすことも重要ですが、当然ながら我々日本人ももてなさなければなりません。非常に難しいさじ加減ではありますが、バランスを考えた上で変わっていかないと「日本」は真の意味で「JAPAN」になれないと感じた下町の光景でした。

変わることも大事ですが、今日の「JAPAN」が海外からの観光客を呼び込むことが出来るのは、「日本」の歴史が理由の1つであることも忘れてはなりません。歴史上「大和」と呼ばれた国は「日本」と呼び名を変え、英語では「JAPAN」と呼ばれています。昔を知る人々は「JAPAN」の変貌に違和感を覚える人も居るでしょう。しかし、時代の変化に対応しなければ、置き去りになってしまいます。産業は「日本」から「JAPAN」への変化に対応し、「JAPAN」は世界屈指の先進国に成長しました。今、我々は「JAPAN」の立ち位置を維持する時代を迎えているのでは無いでしょうか。

2020年に2度目の東京オリンピックが開催されます。素晴らしい「JAPAN」を披露することは将来の「JAPAN」にとって、大きな意味を持つことでしょう。その為に変わるべきこと、歴史・伝統を維持すべきこと、様々な意味を持つイベントが控えていると思っています。この歴史的イベントに関わることを私は大変興味を持っています。



イタリアから LNG プロジェクト向けモジュールを輸送する YAMATO

最後になりましたが、本題にある「大和」は、実は小生の現部署の商売道具です。「YAMATO」と言う船は甲板がフラットになっている特殊船です。この船は世界各国のLNGプロジェクト向けの輸送に従事しております。この「YAMATO」の仕事を簡単に説明すると、「洋上の駐車場にデッキジャングルジムを載せて運ぶ」お仕事です。時代の流れで残念ながら「YAMATO」はパナマ籍となっております。



YAMATOの乗組員と（後列左から2番目の白つなぎが著者）



最近の著者は、ご子息と一緒に仮面ライダーにハマっていらっしゃるそうです！

近況報告 2016

第2期 OG 森口 悦子
(旧姓：藤村)

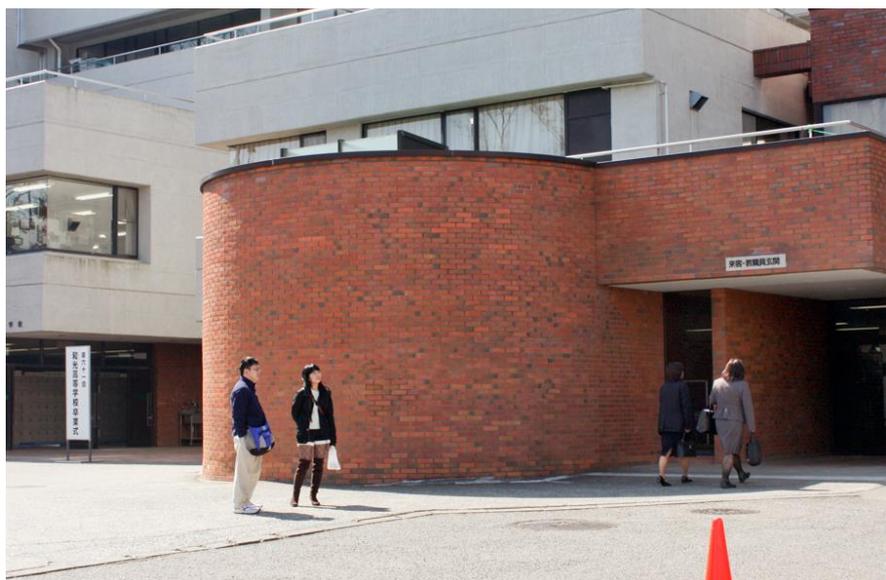
ご無沙汰しています。第2期 OG の藤村です。第2期 OB・OG があんまりエッセイを書かないということで、仕方がない、書きます、と引き受けたくせに、締め切り直前にウイルス性胃腸炎にかかりまして、はたしてこのエッセイが無事に OB・OG 会誌に載るのかどうか…神のみぞ知るところでしょうか。

さて、久しぶりの OB・OG 会誌エッセイですので、近況報告と最近のおススメごとを徒然綴ってこうと思っています。中身のないエッセイですみません。先に謝っておきます。

◆高校教師デビュー

いい響きだと思いませんか「高校教師」。日々の忙しさにかまけて、すっかり忘れていたのですが、私の夢って教師は教師でも、高校教師だったんです、そういえば。ずっと中学で教えていて、それはそれで楽しかったので忘れていたのですが、縁ありまして、中学から高校に異動になりました。ま、今まで勤めていた学園の高校なので、職員室は5m先に移っただけです。基本的な教育方針とかは変わらないのですが、高校生はいいですね。日本語が通じます。大人です。でも、携帯依存症です。授業で「わかる人ー？」など聞いても、しーん、なんてことはしょっちゅうです。でも、めげない。

高校の授業のいいところは、進学校でないので、自由な授業ができることです。アクティブラーニングってご存知でしょうか。次世代の教育キーワードですね。そんなことを意識しながら、教師が一方向的に教える授業ではなく、ICT を使って授業したり、生徒があんまり携帯依存なので、逆に携帯で、英語で SNS のグループ作って授業したり、楽しくやら

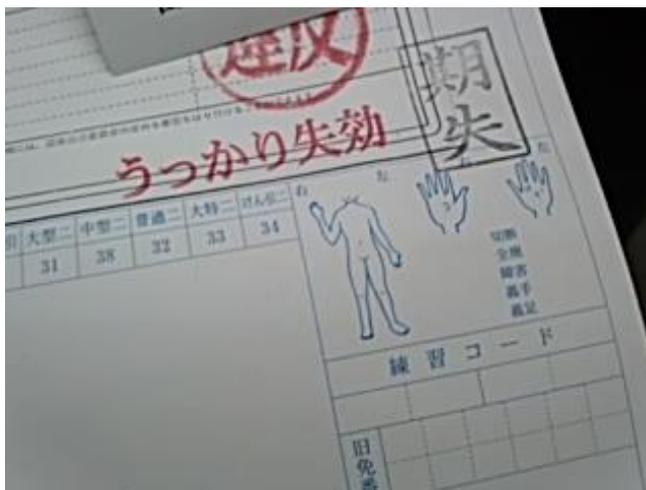


著者のご勤務先，和光学園（同窓会ページより）

せていただいております。

◆免許更新／うっかり失効

そんな教員生活ですが、やってきました初めての教員免許更新の時期。一昨年と去年と講習は無事に受けて、2015年のうちに更新の手続きを、と思い、区役所に必要書類を取りに行ったところ…「期限切れますよ」とのこと。え？なにが？？となりましたが、身分証明書として提出した運転免許証がまさかの期限切れ！！え！！頭真っ白！なんで？更新ハガキ来てないんですけど！！と人のせいにしたがるワタクシですが、まずは警察署に連絡し、相談し、今後の手続き方法を確認して、翌営業日に仕事を早退させていただいて、とパニックでした。免許センター、自宅から遠いし、やたらめったら時間はかかるし、ゴールド免許が水色になるし…とへこむことばかりでしたが、事故なく、期限切れを半年以内に発見できたのが不幸中の幸いと自分を慰めるのでした。そんなまぬけな奴、なかなかいないだろ、と思いきや、免許センターには同じ仲間が列をなしておりました。



「うっかり失効」免許（写真はイメージです）

た。皆様も、誕生日には運転免許の期限のチェックをお忘れなく！あ、教員免許は無事に期限内に更新完了したので、こちらは無免許運転ではございません。

◆おばか男子との付き合い方

生徒のことでありません。うちの子どものことです。男の子は単品でもおばかですが、複数で群れると手が付けられないおばか大魔神になります。うちの子は5歳と2歳の男の子2人ですが、下の子がしゃべりだしたら、なんというか、毎日が呆れの連続です。おばかにつける薬、どっかに売ってないでしょうか。水たまりがあつたら、普通、避けますよね？何故突進する？？長いものを手にしたら、なぜ振り回す？？ちっとも面白くないそのものずばりな下ネタで、何故そんなに盛り上がる？高いところがあつたら何故のぼる？なぜ何も無いところで左右にはねる？普通の道路で突然ブリッジする？？理解不能な生物を今後どうやって育てていけばいいのか、悩みは尽きません。でも、そのおばかなところが、たまらなく可愛かったりもするので（次頁写真参照）。



やんちゃなご子息を見つめる旦那様と著者

◆曲げわっぱに恋して

去年の4月から長男が幼稚園に通い始めました。それまで保育園だったので、お弁当など縁のない生活だったのですが、幼稚園は毎日おべんとう。幸い、キャラ弁・彩り系弁当ではなく、お米6割でおかずは夜ご飯の残りで、という方針なのでありがたいのですが、それでも、ワーキングママにとって弁当は負担大の大の大です。もう、あんまりにもテンションが下がるので、なんとかテンションを上げようとひたすら弁当箱の研究を半年ほどしていました。そして、気づいたのが曲げわっぱの素晴らしさ。あんまりにもわっぱを追求しすぎて、最近写真でもどこの会社なのか、有名どころはわかるようになりました。なので、皆様にも曲げわっぱの素晴らしさを伝えたい！曲げわっぱのいいところは、まず、美しさ。伝統工芸の素晴らしさがわかるようになってきたのは、私も成長したということでしょうか。ちなみに親の私のわっぱ弁当箱は大館工芸さんの作った「軌」です（写真参照）。楕円の細さ、繊細さ、そして斜めのラインのカット。軽さ。すべてが芸術作品。美しさに加えて、木の香りの素晴らしさ。そして、お米を抜群の状態で保管してくれるので、お弁当なのにお米がおいしい。さらには腐りにくい。もっとすごいのは、適当に詰めた弁当でも美味しそうに見える！そして丈夫なので、意外に手入れが楽。いいこと尽くしの曲げわっぱです。もし気になる人がいたら、業界No.1「栗久」「大館工芸」のホームページをご覧くださいませ。|



著者ご愛用中の大館工芸「曲げわっぱ」

何のために働くのか

第2期OB 田中 大介

2010年1月に「FAナビ」という会社を立ち上げて6年が経とうとしています。最初の頃は「飯を食うのもやっと」という感じでしたが、最近はややく落ち着いてきました。これで色々楽になるのかな？ と思っていたら、そうは簡単にいかないようです。

「飯を食える状態にする」という暗黙の目標が達成されつつあるからなのか、最近是一緒に働く人たちの様々な思いが表に出てきています。「あまりルールなどに縛られたくない」とか、「もっとお金が欲しい」とか、「こうしたいという希望はないが、今の仕事は飽きてきた」とか。そうした思いを否定したいわけではありません。単純に「何のために働くのか」を考えさせられているだけです。

最近では、改めて「どんな未来を作るために働いているのか」（つまり、ビジョン）を示すことの重要性を感じるようになりました。そういえば、食うのに必死で考えてなかったなど…。しかし、いざ考えてみると結構難しいテーマです。もう何ヶ月も経ちますが、明確に定義できないものです。一方で、世の中には面白い会社・組織があります。

「世界中の感染症を根絶する」

Microsoft を創業したビル・ゲイツが作った財団のメッセージ

「持続可能な輸送手段と持続可能なエネルギー生成に取り組む」

テスラモーターズ、ソーラーシティを創業したイーロンマスクのメッセージ

こういう社会を変えうるテーマにチャレンジするのは大変な一方で面白そうですね。きっと共に働く人は使命感にあふれているのでは？ 充実しているのでは？ と思います。逆に単なる社長のエゴのために存在する組織には悲しい結末が待っている可能性が高い気がします。

起業して5年を振り返ると、社員が3~5名の頃の方が働き方も自由でしたし、お金の使い方も自由でした。社員が10倍近くなり会社が大きくなってくると私だけではなく、働く社員皆にとって、自由度は減りますし、頭を悩ませる難しい課題も増えてきます。一方で、それをも乗り越えて頑張ろうと思うとしたら、それは「誰かのために役に立ちたい」ということのためのように思います。

そのためにも、まずは自分のためでも上司や社長のためでもなくて、『社会のために働いている』という実感を持てるような会社になければと思います。来年、エッセイを書くチャンスがあれば、皆さんにピ

ジョンを披露したいですね。

年賀状を送れなかった方もいるのでご挨拶ということで家族写真を。今年が皆さんにとって充実した 1 年になりますように。



左から、奥様の美鈴様、御息の創大くん（長男 4 歳）と新大くん（次男 1 歳）、そして著者

近況報告

第3期 OG 酒巻 恵子

(旧姓：小林)

皆様、ご無沙汰しております。第3期の酒巻です。久しぶりの寄稿なので、一体何から書けばいいのやらと、パソコンを前に早数十分…。このままだと白紙で終わってしまいそうなので、自分の近況報告について書かせていただこうと思います。つたない文章ですが、お許しくささいませ。

まず、プライベート面ですが、子供が生まれ、2児の母となりました。なんと二人とも男の子。将来、自分の体力がついていくか、騒ぎ過ぎて家が壊されないか心配ですが、今はもうかわいくてかわいくて毎日ベタベタ、嫌がられてもお構いなし、超親バカっぷりを発揮しています。現在、長男は4歳、次男は2歳になり、人とも少しずつ手が離れてきて寂しい限りですが、「お母さんの隣でいつまで一緒に寝る？」の問いに、「いつまでも一緒！」の答えを信じ（本当にそうだと困りますが）、母親業に邁進しています。

よく、子供が産まれると色々制限されると言われますが、確かにその通り。仕事で残れないのは当たり前前、飲み会の数は激減どころか年に数えるほど、休日の外出や旅行も制限され、日々の保育園送迎に家事にと、結婚後も自由人だった私としては、あまりのギャップに本当にやっつけていけるのか心配でした。しかし、いざやってみると、周りの助けがあつてこそですが、さっさと仕事を終えて帰るようになり、夫婦2人では行かないようなところへ遊びに出かけたり、ママ友たちとの交流が広がったりと、新たに得られたことも結構多いです。特に、随分長いことズボラ生活だった私が、毎日料理・洗濯（・掃除）をする、早寝早起きをするという人間の基本的な部分を取り戻せたのは子供たちのおかげです。と言いながら、余裕がないときは、鬼のように家族を怒りまくっているので、自分が必要とされる生活は残り数年しかないということを目に銘じ、眉間の皺を少しずつ減らしていこうと思います。



ご長男（4歳）とご次男（2歳）

次に、仕事面についてです。これまでは大きな異動もなく、首都圏での営業を6年間続けていましたが、出産と夫の転勤の関係で、現在は京都でスタッフ系の仕事をしています。自分のキャリアについては、2度の産休・育休に加え、京都に来てからは部署異動も何度かあったりして、一体自分が何を目指してやっているのか、そもそも自分は社会人何年目に該当するのかすら分からなくなっており、また、仕事に求めることも当初からは変わってきているため、なんだか暗雲立ち込めている感じです。これから就職、あるいは就職活動を始めるゼミ生の皆様を前に、他のOB・OGの方々

が第一線でご活躍されている中、なんとも気の抜ける話となってしまう申し訳ありませんが、こんな OG もいるのだなと軽く受け流していただければ幸いです。

昨年の4月に2度目の育休から復帰し、それと同時に新設部署のメンバーとなったのですが、これまで担当していた業務とは関係無、周囲とのスキルの差は歴然、新設部署なので業務手順が確立していない上に業務分担は曖昧で、やろうと思えばどこまででも取りにいける、といった状態でした。この年になってゼロからのスタートは精神的に負担でしたが、短時間勤務に甘え、初めての業務だからという理由に甘え、この1年間は守りの姿勢が続いてしまって、たいして成長がなかったように思います。何をすることも自分で判断できず、常に確認しながら業務を進めるというのは、入社以来だったかもしれません。それでも私は中堅社員な訳で、来年度からは短時間勤務も終わるし、それなりの結果を出さなければという焦りもあって、悶々とした1年となりました。なんだか暗〜い話になりましたが、なにくそ根性が自分のいいところ。まだ専業主婦になる予定もなく、今さら営業に戻るつもりもないので、来年度は結果にこだわって、着実に前向きに仕事をしたいなと思っています。母になってからはどうも妥協続きで、守りの姿勢を会社に見破られたのか、今回の異動は、しっかりやり抜けということなのかもしれません。

話は変わり、こんな私でもゼミで学んでいる頃や会社に入社した頃は、当たり前話ではありますが、やる気にみなぎり、ガツガツ燃えていたように記憶しています。私はこうしたい、負けたくない、置いていかれたくない、で必死。今や一転、のほほんとよくもまあここまで変わったもので、できるものなら仕事を休んで子供たちとのんびり遊んでいたいなと思うほど。陸上に例えると、50メートル走を何本も走



著者、ご息子とともに

り続けるのはマイペースな私には無理だったので、年相応に市民ランナー程度に休憩しながら頑張りたいと思う今日この頃です。

長々と書きましたが、近況を一言にまとめると、普通によくあるサラリーマン家庭といったところでしょうか。結婚し、子供ができて、転勤し、家を買って、教育やローン、親のこと、仕事のことや悩み、何だかめっちゃくちゃ所帯染みでいて、学生の頃はそんな生活つまらない、そんな生活が自分にも本当にやってくるのかと思っていたような気がします。確かに特筆すべき事柄はないですが、なかなかこういう生活もいいものですよ。「幸せも中くらいなりサラリーマン」生活、これからも満喫したいと思います。

「浴衣」

第3期OB 横山 崇

今年もこのエッセイの依頼が来る季節になりましたね。いつもこのエッセイを書くにあたって自分の1年を振り返るのが毎年の恒例になってきました。

今年度、自分としてはなかなかの逆境が続いた1年であったのかなと感じています。仕事に関しては、2年前に立ち上げた事業は順調に伸びてはいるものの、日々これでもかと課題が噴出するため、もぐらたたきのような状況で瞬時の判断で切り抜けているような刺激的な毎日を過ごしています。

本業以外で特に印象的だったのは、自社の採用活動での出来事でしょうか。以前から、当社の採用パンフレットの仕事紹介コーナーには取り上げていただいていたのですが、最終面接直前の学生

だけを対象とした、より深い当社の業務内容説明なども担当しておりました。今年度もその説明会の説明役をお引き受けする事になっていたのですが、その日が特別な日に当たってしまいました。

自分の会社は渋谷を拠点にしており、街を盛り上げるために色々な仕掛けを施しているのですが、その中で年1回「渋谷夏祭り」というイベントがあり、その日は「浴衣で出勤しよう」という働きかけを渋谷にオフィスを構える各企業を巻き込んで実施しています。客先に出ていく必要のあるような人を除き、多くの社員が浴衣を着て出勤するという普通の企業では考えられない状況が生まれる日なのです。そう、そ



浴衣で説明会に挑もうとする著者

の日がまさにその説明会の日に直撃したのです。恐る恐る人事担当者に「まさか浴衣は着なくていいですよね？」と確認すると、「浴衣をお願いします」という返答が。「学生の前で本当に浴衣でいいんですか？あとで人事部長とかに怒られたりしませんよね？」と何回も確認したのですが、大丈夫ですので、の一点張りで話にならず、仕方がないので諦めて浴衣で臨みました。

実際浴衣着てみてどうだったか？ まあ自分をご存知の皆様だったら何となく想像つきますよね。まさに引退したハワイ出身の力士さんですか？ って感じですよ。もう完全に。開場時間前に一度トイレに行く時があって会場を出たのですが、外で待っている学生たちが自分を見てどういう反応をしたと思いますか？ 皆一様に手元の紙（恐らく会場案内）を見るんですよ。多分、別会場の前で待ってしまっているのではと勘違いしているのです。そりゃあそうですよね。まさか浴衣の人が出てくるなんて明らかに相撲協会のイベントか何かかと思いますよね。目の前の光景に自分が間違った会場の前に来ているのではとっと思ってしまったわけです。まあ、そんなインパクトしかない状況で始まった説明会だったので、果たして話の内容が皆に伝わったのかは定かではありませんが、自分にとってはかなり踏み込んだイベント経験であったことは間違いなく、いい思い出となりました。



説明中の著者

もう1つは、全塾ゼミナールが主催する、業界講演会に出させていただいたことでしょうか。昨年度も会社としては出ていたようですが、今年も鉄道業界という事で出させていただき、先の浴衣の活躍が認められて（？）お声をかけていただきました。こちらはパネラーの1人であったのであまり話はしませんでした。忙しいのにゼミ生も何人か来てくれて、うれしい限りでありました。他の日程に呼ばれている各業界の企業の案内も見ましたが、自分が話を聞きたいくらいに色々面白そうな企業が名を連ねており、全塾ゼミナールもいい企画をするものだな。と素直に思ってしまいました。

あとは、今年度意識していたのは、ゼミの飲み会になるべく顔を出すことでしょうか。OB会担当がマメ

にご案内してくれているので、時間が作れたときには少しでも顔を出せるように（まあ、飲みたいだけですけど）しておりました。ただ、行ったはいいけど、本ゼミの教室で何やらトラブル（詳細はここでは言及しませんが…）があって、飲み会の会場にゼミ生が誰も来てない、というようなこともありました。小野ゼミらしいな

あと逆に懐かしい気持ちでした。

OB・OGの皆さんも、忙しいとは思いますが、たまに学生・先生と話してみるのもいい気分転換になるものですので行ってみたいかがでしょうか。



2015年7月に行われた小野ゼミの納会にて



同納会の集合写真（著者は前列左端）

プライベートでは、昨年夏にゼミ同期である森本太郎とハワイに旅行に行きました。卒業して10年以上たちましたが、こうやって家族並みに気を使わなくていいゼミ同期と一緒に旅行に行けるってのはいいなあと改めて思いましたし、海辺でゆっくり過ごせていいリフレッシュになりました。

その他、相変わらずアメフトの現役選手、ジャズバンド、幼稚園の水泳のコーチなど色々をやっておりますが、今年にはさらに同じく幼稚園のフラッグフットボールのコーチのお手伝いもさせていただく事になりそうで、色々楽しみながら日々過ごしております。

ま、そんな感じではありますが、今年もよろしくお願いします。

現在の仕事と近況報告

第4期 OB 大隅 隆広

小野ゼミの皆様、ご無沙汰しております。第4期の大隅です。2006年3月に大学を卒業してから、早いもので9年近くの時間が経ちました。大学卒業後、ジェイアール東日本企画という広告代理店で7年間の営業を経て、株式会社エス・エム・エスに入社し、現在はインターネットメディアの事業責任者という形でPL責任を負う立場になりました。

広告代理店、つまりエージェンシーという立場で仕事に携わる中で、クライアント側で事業を見てみたい、どうせ見るなら自身で全責任を負いたいという思いから、現在の会社に転職しました。良い人材を獲得したいのでこの場を借りて宣伝させていただきますが、当社は2003年に創業した医療・介護・ヘルスケアの情報インフラに特化した企業で、創業8年の2011年に東証一部上場、創業以来、増収増益を続け、現在では海外12か国に進出、グループ全体で1,000名を越えるグループに成長しています。ご存知のない方がほとんどだと思いますが、2003年時点でこの優良分野に目をつけて事業を多角化し、圧倒的No.1事業を多数抱えております。人材も豊富で、主に戦略コンサルタントやマーケターとして一線で活躍してきたプレーヤーが続々と参加し、社内は「大人ベンチャー」のような成長環境になっています。物事を論理的に考えるため理不尽も少なく、成果にコミットすることが強く求められるため、ステップアップの転職を考えていらっしゃる方、事業経験を積みたい方にはもってこいの環境です。

事業は独立採算制になっており私は今2つのPL責任を担う立場になりました。中長期でどのような事業戦略を描くか、各施策をどうするか、誰をアサインするか、売上を上げるか、費用を使うか、人を採用するか、どれ1つとして手を抜くことのできない意思決定を迫られ続けます。余談ですが小野ゼミを卒業した今でもコトラーやポーターのフレームワークを共通用語として使い、仮説と立証を行っています。本当に、やっていて良かったなと思う反面、もっとしっかりやっておけば良かったと反省しています。



ボスと打ち合わせ中の著者（左側）関係がとてもフラット

きっと小野ゼミにも起業家精神を持った方、事業に興味のある方がたくさんいらっしゃるのではないかなと思います。そんな方々と是非一緒に働きたいと思いますので、気になったらご一報ください。私は私で、今の事業をきっちり伸ばしていき、またここで皆様に新たなご報告できるように頑張っています。

大学卒業後のご報告

第5期 OB 田中 照太

第5期の田中照太と申します。大学を卒業してもうすぐ丸7年経ちますが、今回が初めての寄稿となります。ですので、この7年のことをぎゅっと凝縮してご紹介できればと思います。よろしくお願いします。

◆新卒でアクセンチュアに

大学卒業後、新卒でアクセンチュアに入りました。理由は全く誇れるものではなく…。当時は本当に世間知らずだったので、一生身を置く業界・会社をなかなか決められず、なのでまずは色々な会社と付き合いがありそうなところに行って勉強しようというのが理由でした。幸い、アクセンチュアでの4年半ではとても濃い時間を過ごさせて頂きました。そのうちの1年はタイのアユタヤに、半年は上海に駐在しました。特にこの海外時代は充実していて、勉強を目的にコンサル業界に入ったものの、ここで今後ずっとやるのも良いかと思った時期もありました。しかし、ある時から、自分の意思と責任でビジネスをドライブしていきたいと思うようになりました。意思決定権と責任はあくまでクライアントにありますので。そこに物足りなさを感じ、事業会社への転職を決意しました。

◆マクドナルドへの転職

事業会社への転職といっても、残念ながら一生身を置く業界・会社がコンサル時代に見つかっていたわけではありませんでした…(笑)。でも、ただただ、事業会社に行きたかった。そこで、あまり難しく考えることはやめて、趣味に近いことを仕事でできそうなところに行くことにしました。すなわち、エンターテインメントとスポーツです。私は今、マクドナルドのマーケティング本部で子供向けのマーケティングをしています。マクドナルドがエンターテインメント？ スポーツ？ とお思いでしょうか。私の部には、ビジョンとして子供の心身健やかな成長に寄与するというものがあって、心の方はエンターテインメント（主力はハッピーセット）。身の方はもちろんフードと、あとはW杯・オリンピックのスポンサー活動を始めたキッズスポーツ支援です。ですので、幸せなことに、私は今エンターテインメントとスポーツの両方に携わらせて頂いています。

◆仕事の紹介

ハッピーセットは、年間に約20のおもちゃを出します。なので、おもちゃの権利元と商談して契約を結び、おもちゃの企画をし、おもちゃを作り、CMやPOPを作り、Pricingをし、マーケット投入する、というプロセスを年に20回繰り返します。権利元は、いわゆるおもちゃ会社のバンダイやタカラトミーのみならず、仮面ライダーなら東映、トムとジェリーならワーナーブラザーズ、スヌーピーなら20世紀フォックス、ポケモンならポケモン社、マリオなら任天堂、と本当に色々な人と仕事をします。自分の企画が毎日

全国の店舗から送られる数字（売り上げ）に表れるので、売ればガッツポーズ、売れなければ猛省。売れても売れなくても、必要に応じ調査にかけて原因を突き止め、次の企画に活かします。この辺りのプロセスは、小野ゼミでの経験も間違いなく生きています。

定常的な業務のハッピーセットに対し、スポーツの方は W 杯やオリンピックに連動した季節商売です。これはまだプレスリリース前なので詳しいことは書けませんが、私は今 8 月のリオデジャネイロオリンピックに向けたある仕事をリードさせて頂いて、8 月にはリオに行ってきます。次の OB 会誌では、今回のリオの振り返りと、次の 2020 年東京に向けた意気込みをお届けできるよう、この 1 年も頑張っていきたいと思います。

以上、卒業から今に至るまでのご報告でした。仕事に特化した記事になったので、これから就活をする方に何か少しでもインプリケーションを与えられたら嬉しいです。



昨年、ご結婚なされた著者

今年の抱負

第6期OB 小早川 景光

2015年は環境面でいくつかの変化がありました。勤務地が地方から東京に変わり、仕事内容も営業から本社業務に変わりました。新婚生活も本格的にスタートし、妻が妊娠しました。2月出産で性別は女の子です。また、仕事で韓国と中欧のチェコに行く機会もあり、公私共に充実した1年であると同時に、様々な変化に適応するために、仕事と家庭の両立に奮闘した年でもありました。

さて、話は変わりますが、先日たまたま実家の本棚にあった福澤諭吉先生の「学問のすゝめ」を読む機会があり、文中に出てくる表現にハッとさせられましたので、僭越ながら、私の印象に特に残った「学問のすゝめ」に出てくる文章を2文だけ紹介したいと思います。

『男子が成長して、ある者は職人になり、ある者は商売をし、ある者は役人になって、ようやく家族や周りの人の世話にならなくてすむようになり、〔中略〕長期的な人生プランを細々と気にかけて、とにもかくにも一軒の家を守るものがあれば、「独立の生活をしている」と自分でも得意になって、また世の中の人も「不羈独立の人物だ」などといって並以上の働きをした立派な人間のように言う。けれども、実際はこれは大きな間違いではないのか。』¹

『われわれの仕事というのは、今日この世の中にいて、われわれの生きた証を残して、これを長く後世の子孫に伝えることにある。』²

上記2つの文章は現代語訳であり、明治と平成で時代も異なるので解釈の違いがあるかもしれませんが、1人のサラリーマンとして小さくまとまっていた私に喝を入れてくれた気がします。「学問のすゝめ」は一度読めば、福澤諭吉先生の言葉に勇気づけられ、元気づけられること間違いありません。まだお読みでない方は是非ご一読されることをお勧めします。

そんな高尚な福澤諭吉先生とは違い、私は新年早々から生牡蠣にあたり、ノロウイルスに感染して寝込んでしまうというドジを踏んでいます。そんな仕事も家庭もまだまだ中途半端な未熟者の私ですので、まずはワークライフバランスを確立し、軌道に乗ったところで、仕事面でも何かしら生きた証を残せる1年としていきたいと思います。そして、健康第一です。

¹ 『現代語訳 学問のすゝめ』より一部抜粋。

² 『現代語訳 学問のすゝめ』より一部抜粋。

以上、端的ではありますが、新年度の抱負を兼ねた近況報告でした。

P.S. 出産予定日と OB・OG 会の日にちが重なってしまい、今回の OB・OG 会に参加することが出来ません。

卒業から欠かすことなく参加していただけに残念ですが、来年は良い報告と共に参加したいと思います。



チェコのプラハで会社同僚と（著者は左から2番目）



韓国メットライフにて表彰式（著者は前列右端）

孤独のランチ：三田編

第9期大学院生 白石 秀壽

人間は、食べた物と、付き合った人と、読んだ本からできている——中央大学時代の指導教授である久保知一先生の言葉である。2年間、三田（ゼミ）で学究生活を送れば、後ろの2つについてはきっと充実したものとなる。しかし、残念なことに、どんなゼミに入ろうとも三田での豊かな食生活は保証されえない。そこで、今回は三田のオススメランチを紹介しよう。ゼミ生にとっては、コトラー&ケラーに次ぐバイブルとなることは間違いないだろう。

蕎麦なら「がんぎ」がオススメである。立ち食い蕎麦と侮ることなかれ。小諸そばや富士そばとひとくくりにはいけない。この店では、普通はつなぎに小麦粉を使うところを、布海苔という海藻を使っている（へぎそばというらしい）。ツルツルののどごしの蕎麦に揚げたての天ぷらは、高いコストパフォーマンスを誇る。

パスタなら「じゃがいもの花」と「PASTAVOLA」がオススメである。前者は乾麺で、後者は生パスタ。じゃがいもの花は、おばちゃんのツンデレ接客(?)がたまらない。それはまさに価値共創と言っても過言ではない(テキトー)。PASTAVOLAは、12時前後に行くとOLが行列を作っている。したがって、時間にゆとりのある学生ならば、少し時間をズラすことが支配戦略となる。

坦々麺なら「香家(こうや)」だろう。とくにオススメは鬼・坦々麺である。鼻にツンとくる花椒の香りと後引く辛さがたまらない。とんねるずの石橋貴明も絶賛したとか。

量で攻めるなら「カフェ・グレース」がオススメである。とにかく量が多い(とくにピラフやオムライスなどのご飯もの)。今の時代には珍しく愛煙家にやさしい店でもある。あと食後のコーヒーがとてもおいしい(たぶん豆がいいのだと思う)。

お好み焼きなら大学の東門を出て直ぐの「弁兵衛」がオススメである。本格的な広島風のお好み焼きで、ちゃんとお店の人が作ってくれる(個人的にはそれだけで満足)。

イタリアンなら「La Gioconda」。店名のLa Giocondaはイタリア語でモナリザを意味するとか。

少しリッチにいくなら「山田屋」のフグ雑炊がオススメである。ランチにしては強気の価格設定だが、



つるのやにてシャンパングラスを手にする著者
座敷の左奥は、著者の定位置

納得のクオリティである。

チャーハンと唐揚げなら「天下一品」がオススメだとか。第9期OBで大学院生のT君は、天一ではラーメンを頼まずに、チャーハンと唐揚げしか注文しないそうだ。私は天一でその2品を食べたことはないし、おそらく今後も食べないだろうが、彼曰く「うまい!!」らしい…。

もちろんここで紹介した以外にも、おいしいランチを提供している店はたくさんある。現役生諸君には、是非この食レポを参考にして、三田での学生生活を充実させて欲しい。



春に行われた日本商業学会全国大会で香川を訪問した際の著者（後列中央）



夏合宿の運動会で大活躍し、スターバックスの金券を手に入れご満悦な著者

別次元へいきます

第8期 OB 石田 陽一朗

まずご報告から。

「関東へ戻りました。」

イオンリテール（株）へ入社し、新入社員としての配属から1年半過ごした岐阜。もう1年半は愛知県
の田原。

どんな3年でしたかと言われれば、

「とんでもないカタチでフラれ、反動か分からないが社会人劇団の門を叩き、半年後に主役をやりました。」
こんな感じ。

では、昨年、つまり2015年、社会人4年目はどうだったかと言われれば、

「社長秘書をクビになり、人事部の採用グループに異動。現在に至ります。」
こんな感じ。

昨年2015年の春に、千葉県幕張の本社に異動になった。辞令には、ただ「社長室勤務を命じます。」と
だけ記されている。あまり詳しくは話せませんが、結論、僕は与えられた仕事ができなかったということ
でした。

人生で最も響いた挫折。親以外の人前で本格的に泣く経験は初めてだったと思います。愛知県田原にい
た時代の友人含め多くの人から、励まされ、また、貶されました。人には本当に恵まれている。長所とい
ってはナンですが、周りの人によって僕は強運であり続けています。

では、2016年は。

まず住まいを変えます。1月20日に社宅を退去し、自己賃貸で1LDKの40平米に。

それから？

…これ以上は書きません。

今年こそ、自分に変革をもたらしたいと思うのですが、2016年が始まり2週間程度、調子はそんなに悪
くありません。

いつまでも、やる気はあって色々手を出したり、人に宣言したりするくせに、行動が伴わない自分。

タイトルは今年に向けての意思なのです。諸々の目標は、Evernoteに1月中に完成させ、テーマのある1
年にする所存です。

来年は自分なりの仕事論を、許される限界3ページぎっしり書けると良いのですが（笑）。

最後になりますが、皆さま、本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

やりたいことやったもん勝ち

第8期OB 岩崎 裕士

2015年度は、とにかく自分のやりたいことを心そのままにやり抜いた年でした。(基本的にはプライベートの話ですが) どこかに行きたいと思ったら友達を誘って旅行したり、英語の勉強を始めたり、誘われた飲み会には必ず参加したり、自炊を始めたり。当然、多少お金はかかりましたが、おかげでこの1年を心の底から楽しむことができました。こういう心持ちで過ごして気づいたことがあります。それは、自分を制限しているのは自分自身だったということです。これまでは、時間がない、お金がない、と自分でやらない理由を作っていました。

ああ、自分はこれまでどれだけの機会を無駄にしていたのだろう、と。多少のお金と時間はかかりますが、意外と自分のやりたいことは簡単にできるのだということに気づきました。昔から自己暗示が強く、“～しなければならない”、“～であらねばならない”という考えにとらわれることが多かった私にとって、ある意味で自分の殻を打ち破ることができた1年となりました。



会社の同僚とガーラ湯沢にて（著者は左側）

ちなみに自炊を始めたのは、節約のためもありますが、一番は自分の健康を考えてのことです。近しい人が病気にかかったのをきっかけに、自分の体についても本気で考えなければならないと思い、これまでお世話になっていた松屋さん、すき家さん、セブンさんとは泣く泣くお別れし、完全自炊に切り替えました。

自分のためだけというのが面倒なので、1週間分まとめて作ってしまうのですが、本当に安上がりで、そんなにまずくもないので、今のところ半年くらい続いています。会社の先輩からは、「岩崎、最近肌つやよくない？」と言われるので、おそらく自炊するとお肌の状態も改善されます。ただ、一番大事なのは、自分が我慢をしていないということだと思います。今は、健康であることが幸せにつながると考えていて、今の食生活は自分の意思で決定したもので、非常に満足しています。

来年度は、より健康に、より幸せな生活ができるよう心掛けていきたいと考えています。

空想上の生物:大人

第8期OB 黒沢 祐介

時が経つのは早いもので、当方ついに齢27歳となりました。当たり前ですが、時が経てば歳をとります。世間一般では、歳をとれば「大人」とかいうものになると信じられています。「大人」というやつが一体何歳からなのかはよく分かりませんが(成人した云々という意味ではなく)、齢27にもなれば僕もいよいよ、社会的には「大人」というやつになったのでしょう。

社会からは大人として見られている、大人であることを期待されていると認識はしています。しかし一方で、自分では自身が大人になったとは思っていません。「僕は大人になれてないなあ、昔思ってた27歳なんて、もっと大人だったのに」と、なんだかよく分からないギャップを感じているのが本音です。

こんなことをぼんやりと風呂の中で考えながら、疑問に思ったことがひとつあります。自分はまだ大人にはなりきれていない、と結論を持つてはいるものの、「大人」って一体なんなのか、どんな状態を指しているのかはよくわからないなあ。定義がわからないと、世の中で良いものとされている気がする「大人」にいつまでたってもなれませんし。

思い立ったが吉日で、早速ググってみました。辞書的な意味で言えば、「大人とは、考え方や態度が一人前であること。青少年が老成していること。」らしいです。(この後に一人前、老成ってなんだよとまだググりましたが、その後に記載されている単語をまた検索する、というエンドレスにググり続ける羽目になりましたので省略します。)さすがのグーグル先生もどうやらズバリでは答えてくれないようですので、ちょっとアプローチを変えて形容詞系の「大人しい」で検索してみました。「大人しいとは、性質がおだやかで、人にさからったり騒いだりしない。」とのこと。こちらは納得できる部分があります。なるほど確かに自分の意見を押し殺して他人に迎合することを、皮肉らしく「大人」と呼んだりするものだからな、と。

ただこれだけだとまだ足りない気がします。社畜の僕は、自分の意見を殺して上司のいう通りにすることがまあまあありますが、自分のことを「大人だなあ」と思った試しがありません(面倒くせえからそれでいいかと思うことならあります)が。



自撮り棒で会社の先輩と裏ピースでセルフイを撮る著者(左)



12月の第2回オープンゼミで講演をしてくださった著者

ここでまた、さらにアプローチを変えてみました。対義語の「子供っぽい」ではないことが「大人」と考えてみます。「子供っぽいとは、自己中心的である様。」とのこと。

検索した言葉の意味？を全部混ぜこぜにしてみると、「自己中心的ではなく、人に逆らったり騒いだりしない」のが「大人」。これでズバリ合っているとは思っていませんが、意義素はズレてない気がします。もしもこれが「大人」だというのなら、なんだかそんなになりたくないなあと思っています。

他人の主張を尊重して他人の主張のせいで自分を否定されたくない。傷つくなら自分のせいで自分のために傷つきたいし、それを糧に成長したい、と。「大人」になんかなってしまったら、他人から間違いを指摘されたとしても「これは自分の主張ではないから」といくらでも自己正当化ができそうな気がします。他人の主張を認めたことも含めてそれが自分の主張なんだよ、それが人財育成なんだよ、とか言われそうな気もしますが、とそんな聖人にはまだまだなれそうにありません。黒沢としてはいつまでも子供っぽく、自己中心的に、いつまでもガキっぽくワガママを言いたいと思っています。



中学の同級生との忘年会にて

(※ この中に、著者の元カノが、2人いらっしゃるそうです)

(※ 著者の隣にいる女性が、著者のことを全力で避けていらっしゃいます)

越境と克己

第8期OB 荻野 真央

皆様、大変ご無沙汰しております。年の瀬あたりにそろそろ本年度のエッセイを書かねばと重い腰を上げるのですが(遅刻癖が出てきました…外務の皆様方、大変ご迷惑をおかけしております)、毎度思うのは、「気が付けばまた1年が経ってしまっていた!」と「さて、何を書けばよいものか…」ということです。

早いもので私が卒業してから4年が経とうとしています。大学に在学した期間と丁度同期間です。朱熹曰く「少年易老學難成」、李益曰く「光陰如箭」とはまさにその通りなのですが、アインシュタインの相対性理論を援用するならば、小野ゼミで過ごした2年間は兎角「重い」(=濃密な)生活を、光の如く「速く(=忙しく)」過ごしたからでこそ、かつて学び舎で過ごした時間と現在過ごしているその体感速度にギャップを感じているのかもしれませんが。ギャップを感じないように現在をより「重く」「速く」過ごさねばと自戒する毎日です。

とはいえ、荻野とてこの4年間に何もしてないわけではありません。近況報告も兼ねまして、ここ最近の出来事をこの場をお借りして記させていただきます。

仕事におきましては、弊社菓子事業のマーケティング部門に所属して早3年目に突入しておりますが、御陰様でITやインフラ面での社内環境整備、事業ポートフォリオの制作、ブランドのSTP策定のための業務フロー整備など、徐々に大きな仕事に携わる機会が増えて参りました。「小野ゼミで得た知見をどうやって活かしてやろうか」と人知れず謀っている次第です。



トルコ・カッパドキアにて、著者の影が伸びる

遊びにおきましては、昨年のGWに単身トルコへと1人旅に行行って参りました。カッパドキアで奇岩群の絶景を眺めたり、イスタンブールで絨毯屋の客引きに5時間も軟禁&商談させられたり、絨毯屋のゼネラルマネジャーと意気投合して二人でレッドブルウオッカを吐くまで呑んだり、色々とありましたが最高でした。旅はいいものですね、次

はモロッコかペルーあたりに行きたいです。誰か一緒に行きましょ。

恋愛におきましては、先日彼女にフラれまして、またも振り出しに戻ってしまいました。同期の樋口さんや9期の秋山君がご結婚なされたと聞いて、すっかりアラサーになってしまった荻野は大層焦っております。そういえば色恋沙汰といえば、在学中に小野先生に恋愛相談をさせていただいた折、深夜にガッツリ長文のメールにてご指南を頂戴致しましたことが思い出されます。小野先生、またご指導を請いに伺わせていただきます！！

そんなこんなもありまして、本年度は自分にとって「越境」と「克己」の年にしていければと思っております。新たな思考法や価値観、まだ見ぬ場所、まだ見ぬ未来のお嫁さんに巡り合うためにも、自分が無意識下で築き上げたステレオタイプや行動癖、既存の視野・視座・視角を内破し、ついでにたるみ切ったこのビール腹に見事なシックスパックができるよう筋トレとかもしたいと思います。

最後になりましたが、小野晃典先生、OB・OGの皆様方、12・13期の現役生の皆様方には昨年度も大変お世話になりました。改めて小野ゼミという時空間が、私の母胎であり、先述のように切磋琢磨すべき好敵手であることを感じております。本年度も皆様の御力をお借りしつつ、より実り多き年にしていければと思っております。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。



イスタンブールの絨毯屋で著者が撮った一枚（この後5時間も軟禁&商談の末に5万円の絨毯を買う羽目に…）

知ってたもん勝ち， やってたもん勝ち

第9期 OG 水田 弥英

東京を離れ広島での生活をはじめて早3年が経ちました。広島東洋カープ女子歴も2年目に突入した2015年、足しげくマツダスタジアムに通いカープを応援しましたが、カープは優勝どころかクライマックスシリーズにも手が届きませんでした。そして、2016年は主戦力のマエケンこと前田健太投手がいない状態でのスタートです。カープの行く末は早々に怪しいですが、引き続き精力的に応援をしていきます。なお、広島にて野球観戦をしたい方、絶賛募集中です。青空の下、生ビール片手に



カープファンの著者と野球観戦する、ジャイアンツファンの同期戸羽さん

野球を応援しましょう！

さて、入社3年目ともなると仕事もそれなりに忙しくなり、東京に足を運ぶ機会も減りました。その結果、小野ゼミ生と会う機会も減ってしまいました。それを少し寂しく感じていた年の瀬、第8期大塚優太君と“広島”にて再会しました。

実は、私と大塚君は、勤務地は違いますが、同じ会社に勤めており、去る12月に行われた研修で2年ぶりに再会しました。その研修のプログラムの1つにディベートがありました。小野ゼミを卒業して以来、ディベートをする機会など皆無でしたので、約3年ぶりにディベートを行いました。つい張り切ってしまう、小野ゼミ時代のパフォーマンスや小技を披露した結果、小野ゼミで言うところのベストディベーター賞を受賞しました（なお、受賞の理由は「声が大きくてハキハキしていたから」）。また、大塚君も眼光するどく相手チームに質問したり、反論したりしていて、講評では会社の偉い方から褒められていました。「昔取った杵柄」、「三つ子の魂百まで」とはよく言ったもので、真面目に学んだ事は、どれだけ時間が経っても、自分の中にきちんと残り続けることを痛感しました。

大学を、小野ゼミを卒業して3年、環境は目まぐるしく変わり、体重は増え続ける今日この頃ですが、小野ゼミで学んだ事をきちんと忘れず活かして、引き続き厳しい日々を乗り越えていきます。

高校生ラップ選手権

第9期 OB 菅原 暉

会社に入り、初任地の秋田県に配属されてから2年と3ヶ月が経ちました。しかし、私の実家は秋田県男鹿市（なまはげの発祥の地）で、私は18歳まで秋田県に住んでいたため、秋田歴は20年以上になります。社会人になってからの秋田生活では、学生時代には行くことがなかった川反（秋田県最大の繁華街）にもお酒を飲みに行くようになりました。以前は、秋田は遊ぶところも少なく、つまらないところだと思っていたのですが、最近になってからは、料理やお酒の美味しいお店もたくさん見つかり、いいところもあるのだと地元に対する見方が少し変わってきました。また、この2年3ヶ月の間に車も変わりました。最初に買った1500CCのアクセラセダンの走りが物足りなく、2200CCディーゼルトーボのアテンザセダンに乗り換えました。見た目はほとんど変わりませんが、加速感やトルクには満足しており、完全にマツダスカイアクティブのファンになりました。夏の男鹿半島、角館の桜、大曲の花火、田沢湖など、車でどこでもご案内をさせていただきますので、ぜひ秋田県にいらっしゃってください（笑）。



著者の駆るアテンザ

話は変わりますが、私はヒップホップ、中でも日本語ラップと呼ばれるジャンルの音楽が大好きです。スタイルやノリもさることながら、特にリリック（歌詞）において韻を踏むということに関心があります。一般的にラップで韻踏みというと、オヤジギャグ的なものを想像される方が多いかもしれませんが、実際には、非常に頭を使った構成がなされているものもあり、語頭、語中、語尾で巧みに韻が踏まれたりもします。東大、慶應、早稲田卒といった高学歴ラッパーもおり、非常に文学性の高い曲もあります。

最近ヒップホップがメディアへ露出し、もともと関心がない方々に知ってもらえる機会も多くなりました。ラッパーのバラエティ番組出演やアイドルとのコラボ等、様々なものがありますが、静かなブームとなっているのが Youtube でも見ることができる高校生ラップ選手権だと思います。その名の通り、高校生がラップでバトルをするというものです。フリースタイル（即興）でラップをし、審査員によって勝敗が決まります。評価項目としては、韻（どの程度韻が踏めているか）、フロー（歌い方、言い回し）、アンサー（相手のラップの内容に対してどの程度の返答ができているか）等々が総合的に判断されます。バトルですので相手にぶつける内容はきついものになります。いわゆるディスり合いです。現在、第8回まで開催されておりますが、回を重ねるごとに規模も大きくなり、ディスり合いのレベルも高まっております。そんな中で第6回大会の決勝戦のみが異質の戦いとなっております。長野出身 MC ニガリと沖縄出身 rude-α の試合でしたが、ラップへの情熱、相手への想いを伝え合う、非常に爽やかで高校生らしい戦いとなりました。このような戦いは高校生ラップ選手権では現在までこの1回限りです。バトルの場においても相手をしっかりとリスペクトし、聴衆の感動を呼ぶことができたという点では価値のある一戦でした。この姿勢は仕事にも通じるものではないでしょうか。私は製薬会社で MR をしており、時には他社や他剤をディスることもありますが、できるだけリスペクトを忘れずにフェアな戦いをしていきたいなと日頃から感じております。ちなみに、現在の日本で最強のバトル MC は R 指定さんだと思います。ぜひ検索して聞いてみてください。



サークル時代の友人と田町の肉バルにて（著者は右端）

チャンス

第9期OB 竹内 亮介

私は2015年4月より、大学院の博士課程に進学いたしました。相変わらず、日々の研究活動に楽しく取り組ませていただいておりますが、それと並行して、阪神タイガースの応援にも勤んでおります。阪神ファンになったのは1999年（小学3年生の頃）で、ちょうど、1980年代後半から続く暗黒時代の真っ只中。当時の阪神タイガースは、「最下位が年間指定席」、あるいは「PL学園より弱い」と揶揄される程でした。

ところが2003年、信じられない出来事が起こりました。長らく続いた暗黒時代が嘘のように、阪神タイガースは、シーズン序盤から破竹の勢いで勝ち続け、18年ぶりのリーグ優勝を果たしたのです。この奇跡を語るうえで欠かせない人物といえば、アニキの愛称で知られる金本知憲選手でしょう。2003年に広島カープから加入した金本選手は、その打棒と背中でチームを牽引し、負け癖の付いたチームを闘う集団へと変貌させたのです。その後も2012年の現役引退まで、誰もが認めるチームの柱であり続けました。

そんな金本氏が、2015年のシーズン終了後、阪神タイガースの監督に就任しました。「すべてを変えないと勝てないことが分かった」など、すでに印象的なコメントを残している金本監督ですが、個人的には、シーズンオフに関する以下のコメントにも注目しています。

「オフこそ競争...僕以上に（練習を）やっているやつは絶対にはいないと思えるほどやっていたのでね。オフはチャンス。そういう気持ちでシーズン中よりオフの方がたくさん練習していた感じだから。」¹

高校～大学時代に全国的に無名であった金本選手は、血の滲むような練習を重ねることによって、球史に名を残す強打者へと登り詰めただけに、上記の言葉の説得力は格別です。この言葉を聞いた若手選手が奮起し、2016年シーズンでは大きな飛躍を遂げてくれることを、一ファンとして期待せずにはられません。

そして何より、奮起が必要なのは私も同様かもしれません。というのも、1月末から大学院生は、2か月以上にわたる長いオフ（春休み）に突入するためです。金本監督の選手時代を見習い、シーズン中（授業期間中）における勉強の質と量を上回ることができるよう、オフというチャンスを活用していく所存です。



鋭い眼光で若虎を見つめる金本監督

¹ SANSPO.COM, 2015年11月14日 (<http://www.sanspo.com/baseball/news/20151114/tig15111405010016-n1.html>)

何が響くかわからない、誰が見てるかわからない

第10期OB 石井 隆太

同期生に遅れること1年、昨年3月に大学を卒業し、4月から大学院に進学しました。進学後は、学位論文の執筆に向けて研究を進めつつ、平日は演習形式の授業の準備に追われ、休日は学会参加・発表、時には企業インタビューに出かけたり、自主勉強会を開いたり、何だかんだで毎日充実した日々を送っています。ただ、どれもこれも初めての経験でしたので、何から始めればよいのか、どんな具合で取り組めばよいのか分からないことが沢山ありました。自分がなかなか前に進めない中、大学院の先輩方が先へ先へと自身の研究を進めていく姿を見て焦りを感じて、でも、焦れば焦るほど自分のペースがつかめず、腰を据えて研究しなきゃと言いつつ聞かせて…、そんな悪戦苦闘の1年だったように思います。けれど、そんな生活を望んで進学を決めた私にとっては、この上なく楽しい1年でした。

そんな大学院生活での新たな経験の1つに、定期的な学会参加が挙げられます。昨年は、日本商業学会という学会に、修士会員として入会し、ほぼ毎月開かれる部会に足を運びました。最先端の研究内容を聞いて知識を吸収する、学会中に情報交換を行うなど、学会の楽しみ方には色々ありますが、学会後の懇親会にて先生方と交流するというのも、楽しみ方の1つです。特に、私のような新米にとっては、自分が読んだことのある本や論文の著者に出会えるという機会でもありますので、これが大きな楽しみです。そんな懇親会にて、とある先生が、「僕が大学院生の頃は、時間がなくて、が禁句だった」とおっしゃっていました。仕事をしているわけでもない大学院生が、研究の遅れや資料の不備を、時間のせいにするのはダメだということです。そりゃそうだ、ぐらいの話にも思えますが、どうしてだか、妙に心に残りました。

時に、他人の話が妙に心に残ることがあります。それは、話し手の強調ポイントだったり、そうじゃなかったりします。心に残るのは、少なくともある程度は、聞き手が関心のある内容だったのだということだと思います。ですから、今思えば、その話を聞いた当時の自分は、自分の不出来を時間のせいにしていたのかもしれない…。一方、その先生からすれば、当時の私が何に関心をもっていて、何が心に残ったかなんてことは、知る由もありませんし、ましてや、こうしてOB会誌の中で取り上げられているなんて、想像さえしていないことでしょう。

何が言いたいのかと申しますと、自分の行動を、いつ誰がどこで見ているのか、何が響いているのかどうかは、予想し切れないということです。仕事でも、ゼミでも、研究でも、そこでの行動が、どこで誰にどう評価されているのかはわかりません。多くの方はそうではないけれど、もしかしたら、自分の行動をどこかで誰かが見ている、彼らに何か良い刺激を与えているのかもしれない。そうした人がいるかもしれないという可能性を信じて、来年も、時間を有効に使って、真面目にコツコツ頑張りたいと思います。

年刊・石井隆太ニュース（2016年2月号）

第10期OB 中村 世名

2年間の修士課程をほぼ修了し、4月からは博士課程に進学予定の中村世名です。本年度も、私は、自宅と学校を往復し、研究に励んだりちょっと休憩したりを繰り返す、大学3年生の頃から変わらない楽しい日々を送ってきました。私の今年度の活動に関するご報告は、以上で終了してしまいましたので、本エッセイの残りのスペースでは、読者の皆さんのご希望にお応えして、学部時代の相棒で、気の置けない親友で、なぜか大学院では後輩の石井隆太くん（以下、普段の呼び方である「隆太」）の今年度の重大ニュースを、照れ屋な隆太に代わってお伝えしたいと思います。

◆隆太、自炊が趣味になる！

我々大学院生は、世間の一般的な文系大学院生に向けられているイメージとは異なり、実は、バイトに割く時間がないほど忙しい日々を送っています。そのため、親から十分な支援をもらえない大学院生は、生活を切り詰めながら学業に励んでいます。我々が隆太もそんな学生の1人です。大学院に進学した隆太は、食費を削るために自炊を頻繁に行うようになりました。すると、隆太はみるみる自炊にハマっていききました。今では、週末に大量に自炊し、冷凍保存し、それを少しずつ食べることによって1日あたりの食費を低く抑えることが、彼の生きがいになっているとのこと。余談ですが、親から十分な支援をもらえる私は、毎日外で好きなモノを好きなだけ食べております。

◆隆太、アメリカの大地に降り立つ！

アメリカやヨーロッパの国々への旅行は、アジアの国々への旅行よりも費用が高いため、大学生の間には経験することが出来なかったという人も多いのではないかと思います。我々が隆太もその1人でした。しかし、去る2015年11月、隆太は、学会旅行に参加するため、アメリカのテキサス州



アメリカ初上陸にはしゃぐ隆太さん（右から3番目）と冷静な著者（右端）のサンアントニオに初上陸しました。出発前の隆太は、学会旅行にもかかわらず、旅のしおりに作ってし

まうほど興奮していたとのこと。余談ですが、私も、同じ学会に参加し2度目のアメリカを満喫しました。また、先月は別の学会の同伴でベネツィアにも行ってきました（隆太は不参加）。

◆隆太、青のニットを購入する！

どこで、どんな服を買えば良いのかわからない。そもそも服なんて寒さをしのげれば何でも良い。このようにオシャレには無頓着な男性はかなりの多いのではないかと思います。我らが隆太もそんな男性の一人でした。しかし、2015年冬、隆太は、オシャレ男子の仲間入りを果たすべく、青のニットを購入しました。そして、その青のニットの中に青の



小野ゼミの忘年会@つるのや
青のニットを着てご機嫌な隆太さん（中央）

シャツを合わせるというハイセンスなコーディネートで、三田の街を闊歩しているとのこと。余談ですが、私は、白、グレー、および黒といったモノトーンカラーを好んで着ています。

以上のように、隆太および私は、日々楽しく大学院生活を送っております。こんな陽気な私達に会いに、是非皆さん、三田に遊びに来ててください。最後に、隆太にも彼女ができました。



隆太さんと先輩の第7期菊盛真衣氏
(撮影は著者。写真の選択には隆太さんの紹介以外の他意はないという)

27 時間かけて広島に行き、もみじまんじゅうを2万円買った話

第10期 OG 野澤 磨友子

インベスターZ という漫画をご存知だろうか。ドラゴン桜で有名な作家が「投資」をメインテーマに描いた作品のため、知っている人も多いかもしれない。それを昨年の夏に読んだわけだが、作中にホリエモンをモデルにした起業家が登場し、起業を志す青年に向かって「そりゃあ…ヒッチハイクをしないやつはダメだよ」とドヤ顔で言うコマがある。ものすごいドヤ顔なので興味がある人は読んでほしい（顔の右半分にスクリーントーンが貼られるくらいのドヤ顔だった）。それはともかく、そのドヤ顔に魅せられて、私はその夏「ヒッチハイクをしてみたい」という妙な焦燥感に駆り立てられたのである。

そこで、夏季休暇中に4日間「ヒッチハイク休暇」を設定してみた。行先は、もみじまんじゅうが好きだったので漠然と広島に決めた（ちなみに漫画では東京から北海道を移動している）。まったくのヒッチハイク初心者だったのでグーグル先生に色々尋ねたところ、東京都渋谷区用賀にヒッチハイクの聖地があり、そこから始めれば問題なくスタートができると教えてくれた。そして、ヒッチハイクの7つ道具「スケッチボード」と「極太サインペン」も購入し、残念ながらそんな奇行に付き合ってくれる友人もいなかったもので、1人でいよいよ決行の日を迎えた。しかし、当初予定していたヒッチハイク休暇1日目、勇気が出ず、終日布団から出られずに終わる。情けない私だった。

ヒッチハイク休暇2日目、その日も相変わらず勇気が出ず、布団から出られなかった。もうヒッチハイクを1人で決行するなんか無理だ、と諦めかけた昼過ぎ、ふと「このままでは4日間、布団の中で何もせず終わるのではないかと愕然とする。これでは、ヒッチハイクができないどころか、貴重な夏休みを布団で過ごしただけのダメなやつになってしまう。こうして、またもや意味不明な焦りから、なんとか田園都市線に乗って、用賀へ足を踏み出したのであった。

用賀には首都高速に乗るためのインターチェンジがあり、そのほんの手前に車が停めやすそうな駐車場を備えたマクドナルドがあり、かつてヒッチハイクをするテレビ番組で取り上げられたことから、いつの間にかヒッチハイカーの聖地になっていたらしい。とりあえず行けばなんとかなるだろうと向かったわけだが、到着するや否や、そこになにやら四角いボードを持った人影が見える。

なんと、そこにはすでにヒッチハイクボードを掲げ、1人立っている白シャツに麦わら帽子のさわやか好青年がいた。このチャンスを逃してはならないとすかさず声をかける私。話してみると、とある大学の学生で帰省も兼ねて初ヒッチハイクに挑戦中という。しかも、福岡県を目指しているとか。あれ？福岡県？広島、通り道じゃない？と気づいた瞬間、「これも何かの縁だと思うのでご一緒しませんか？」という言葉が口をついて出ていた。こうして謎の2人旅が始まった。なお、好青年（以下、F田君・21歳）は2つ

返事で快諾してくれたことを付け加えておく。

◆ヒッチハイク 1 台目：工務店のお兄さん 2 人組（東京・用賀～箱根・足柄）

記念すべき 1 台目は、ものの 10 分ほどでつかまる。さすが聖地。見た目はサングラスをかけていて怖そうだけれど実は優しい工務店のお兄さん 2 人組だった。当然だがお兄さんたちには、こちらが友人同士でヒッチハイクをしているだろうと思われていたため、まさかの 10 分前に知り合ったばかりの初対面同士ということに驚かれ、車中で自己紹介タイムになってしまった。盛り上がったのでよし。

◆ヒッチハイク 2 台目：子供 2 人の 4 人家族（箱根・足柄～岐阜県・養老）

ヒッチハイクの道中で 2 回ほど大きな絶望感に襲われたが、そのうちの 1 回が足柄サービスエリアでのヒッチハイク活動だった。1 回目は聖地だったので比較的車も停まりやすかったが、初めてのサービスエリアは勝手がわからない、ノウハウもない。どこでボードを掲げるか、どのように車に向かってアピールするのか、ポジショニングやターゲティングが大切になってくる、まさにマーケティングの世界である。幸い、15 分ほどで 4 人家族の中型バンに乗せていただき、事なきを得た。ご家族の方々は、以前に外国人のヒッチハイカーに乗せたことがあるそうで、ヒッチハイクに抵抗がないようだった。

◆ヒッチハイク 3 台目：スパ帰りの美人お姉さん 2 人組（岐阜県・養老～福井県・敦賀）

養老についたとき、時刻は 21 時をまわっていた。ずいぶん長距離を進んでもらったものである。ところが、ここで 1 つ誤算があった。もともとは名古屋市あたりでネットカフェかなにかで夜を過ごす予定だったのであるが、欲張って養老サービスエリアまで来てしまったため、何もない。このままでは野宿になってしまうということで、京都を目指すことにした私たちは再びヒッチハイク活動を続けていた。ところが、自動車は停まってくれるものの、全員が「敦賀までなら」という。敦賀は、北陸道の先にあるので京都とは方面が違う。しかし、疲労と眠気が判断を鈍らせたのだろうか。これだけみんなが敦賀、敦賀、というのだから敦賀には安住の地があるに違いない！ と勝手に確信をして、京都を通らずに北陸道から兵庫へ抜けるルートへ変更することに決め、誘われるまま美女 2 人の車に乗ったのであった。

◆ヒッチハイク 4 台目：甲子園マニアなヤンキー 4 人組（福井県・敦賀～大阪府・吹田）

そして、この選択により今回の旅至上、最大の絶望感を味わうことになる。結論から言うと、敦賀にはなにもなかった。深夜 0 時を過ぎ、コンビニもネットカフェも居酒屋もなく、唯一灯りがついていた鉄道の駅からは時間なのでと締め出され、いかがわしいホテルは満室だった。まさに絶望の敦賀である。仕方なく、倉庫の裏のコンクリート上で明け方まで過ごすことになった。唯一の救いは、F 田君がとても親切で紳士的だったことである。彼と私の名誉のためにも、2 人の間には旅中芽生えた友情しかなかったことを付記しておきたい。

ところで、敦賀のもう1つ大きな問題は、高速道路を降りてしまったことであった。ヒッチハイクはSAからSAであれば、その間を移動する車をつかまえば済むが、1度市街地に降りてしまうと、今度は自分たちが行きたい方面の高速道路に向かう車をつかまなければならない、格段に難易度が上がる。しかも、車通りも少ない敦賀である。もはや、ずるをして、いったん電車で彦根まで出ようかと考えるほどだった。

とはいえ、せつかくここまで来たのだから最後まで自動車だけで移動したい。結局、朝5時から、敦賀のETC前でヒッチハイク活動を再開した。幸運なことに夏の甲子園まっさかりで、30分ほどで球場へ向かう若いお兄さんグループに拾っていただいた。こうして敦賀の絶望の夜が明けたのだった。

◆ヒッチハイク5台目：眠眠打破を愛用中のお兄さん2人組（大阪府・吹田～岡山県・吉備）

吹田の交通量は多かったが、停まってくれる車は残念ながらなかったため、車のナンバーを確認して先に当たりをつけて声を掛ける作戦に切り替えた。ヒッチハイクは本当に戦略が大事である。乗せてくれたお兄さん方には申し訳ないが前日からの疲労で車中半分寝ていた気がする。おかげで無事に岡山県までたどりつくことができた。

◆ヒッチハイク6台目：広島県呉海軍兵の奥様2人組（岡山県・吉備～広島県・呉）

最後の自動車は、広島県の呉市に住む海軍兵の奥様だった。福岡県を目指すF田君とは途中のSAで残念ながら、お別れ。その奥様は、海軍の旦那様を迎えに行くということで、なぜかそのまま海軍基地の中を見学させてもらえることに。一般人は紹介がないと入れないので、貴重な経験をさせてもらった。こうして27時間（野宿含む）6台かけて広島にたどりついたのであった。



F田君と著者

長くなってしまったけれど、たった1日ちょっとの間で、ここには書ききれないほど多くの出会いがあり、少なからずヒッチハイクのコツも知ることができた。実際にやってみて、ヒッチハイクをしないやつはダメだとは全く思わない。運が良かっただけで危険もあるし世間的な批判もあるから、そこは自己責任だ。それでも、たしかに感謝することの大切さにはあらためて気づかされたし、人生でやっておきたかったことの後悔のうちの1つは消せたと思う。とりわけ、ここまで導いてくれたF田君には感謝してもきれない。旅の記念に、浮いた交通費分だけでもみじまんじゅうを買って帰って普段お世話になっている人に配った。余談だけれど、広島でしか買えないにしき堂の「あたらしもみじ」というみじまんじゅうは絶品なので、機会があったら是非食べてほしい。

思い出の椿屋

第10期OB 仙田 晃史

2016年が始まって早くも1ヶ月が経過しようとしている。この1ヶ月は、公私ともに様々なことが起こった非常に密度の濃い月であった。経済においては、日経平均株価が年初より下がり続け、一時1万6000円を割り込むかというところまで下落したため、銀行員としては非常に悩ましい状態となった。スポーツにおいては、大相撲の大関・琴奨菊が日本出身力士として10年ぶりの優勝を成し遂げた。また、芸能においては、SMAPの解散騒動があったり、某女性芸能人の不倫スキャンダルがあったりした。そして、私生活においては、5年付き合った彼女から「卒論」を提出されてしまった。エッセイ執筆が遅くなったのは、単にそのダメージが大きかったからであって、私が無精であるためではないことをここに記しておく。

本エッセイにおいては、この「卒論」提出にまつわるエピソードについて執筆したい。というのも、今回の卒論提出は、ある事件に端を発しており、その事件には小野ゼミ生が深く関与しているからである。

その事件は、平成26年3月25日に発生した。同期の方々は気付いていると思われるが、この日は、第10期生の卒業式の日である。日吉記念館にて行われた卒業式の後、苦楽を共にした同期の皆、大変お世話になった小野先生、そして優しく指導してくださった大学院生の方々と記念撮影をすべく、私は三田キャン



当時の第10期生卒業式（著者は最後列左端）

パスに向かった。この時私は、大学1年時からお付き合いをしていた彼女と5時に渋谷で会う約束をしていた。写真撮影を終えたのが3時頃。彼女との約束まで時間があつた上、学生として同期と飲むのも最後ということで第10期生数人と「つるのや」へ行くこととなった。しかし、これが過ちであった。その飲み会が最高に盛り上がり、私は文字通り、我を忘れてしまった。そう、卒業式の日彼女を渋谷に待たせ、挙句の果てにすっぽかすという暴挙、いや、人として最低の行為をしてしまったのだ。結果として、翌日に彼女から別れを告げられたことは言うまでもない。しかし、私は必死に謝罪をし、その時はなんとか破局という事態を避けることができた。



放心状態の著者（写真左）と第11期生住田君 @渋谷の椿屋珈琲
Photo by 第11期生蓮岡さん

あれから、2年。冬になると辛かったことを思い出すということで再度別れを告げられた。2年前の集合場所であった椿屋珈琲にて。今回ばかりは、彼女の意思は固くどうすることもできなかった。椿屋珈琲で私は、人目をはばからず涙を流した。彼女が席を立った後も、1人呆然と席に座っていた。1時間程経過し意識を取り戻すと、私は、せっかく東京に来たのだから誰かと遊んでから帰

ろうという考えに至った。少し考えると、第10期の小笠原君のことが頭に浮かんだ。彼に電話をすると、彼はすぐに電話に出てくれた。私は彼にことの顛末を話し、暇だったら遊ぼうと伝えた。彼は快諾してくれた。せっかくなので、他のゼミ生にも会いたいと思い、学生時代のインゼミグループラインでメンバーを募ったところ、福室君、笹本さん、野澤さん、第11期の蓮岡さん、住田君が来てくれることになった。茫然自失の私を慰めてくれた彼らには本当に感謝している。彼らがいたからこそ、私はあの1日乗り越えることができ、こうして前を向いて歩いているのである。

ここまで読んでくださったゼミ生、OB・OGの方ならば、ある思いを抱いておられるであろう。「フラれたのはお前のせいで、ゼミ関係にはないじゃないか。」と。そうである。そうであるが、開き直っていわせて頂きたい。「全部自分のせいであると認めると、病んでしまうのだ！」本来ならば、「卒論を提出されたゲスの極み俺」というタイトルがあっているかもしれないが、悲しくなってくるのでこのタイトルとさせていただきます。

過去に戻れるならば、私は平成26年3月25日に戻りたい。そして、笑顔で彼女にお待たせと言いたい。しかし、人間である以上、過去に戻ることは決してできない。後悔先に立たずとは、よく言ったものである。「あの時」ああしておけば良かったと思うけれども、その「あの時」に、ああできなかったという過去はもう変えることできない。だからこそ、後悔しないように日々を送ることは非常に重要である。未来の自分が今の自分を振り返った時に、「よくやった！」と褒められるような人間になりたいものだ。

今年も、仕事においても、私生活においても激動の年となる予感がする…どんな一年になったかは、また来年のエッセイに記させて頂きたいが、この1年がより良いものとなるよう、毎日を精一杯生きたい。

新たなる挑戦

第10期OB 渡邊 高平

「管理本部に異動を命ずる」。

2015年1月5日、私は本社にいました。正直、辞令を受け取ったときは驚きを隠せませんでしたが、自分の配属された部署でその責務を果たそうと、その日、心に決めました。その責務は、自分の想像を越えるものであることに、その日の私は知るよしもありませんでした。

2014年はSEとして入社し、現場でプログラムを打ったり、ドキュメントを作成したりしていましたが、管理本部となると違う業務になります。全社員向けに新しい制度を導入するための準備や導入後の窓口対応が最初に任せられた仕事でした。新制度は今年の4月1日から導入ということもあり、下準備が大変でしたが、無事に乗りきることができました。一番印象に残っているのは、新入社員50名の前でのプレゼンでした。初々しい50名の新入社員の前で、マイクを片手に2時間説明を行いました。緊張のためか、手に汗をかいていましたが、無事に終わることができました。私にとってこの経験は大きな糧となりました。

これ以外にも、会社が大きくなるためのいくつかのプロジェクトの一員として参加させていただきました。現在も違うプロジェクトに参加し活動しています。日々会社が大きくなるその裏側を目の当たりにしていますが、必ずそこには大きな壁が立ちはだかります。その壁を乗り越えるために、日々議論を重ね、試行錯誤しています。

そんな日々の業務とうってかわって、休日はゆっくり映画を見たり、ときには旅行に出掛けたり、読書をしたりとゆったり過ごしています。写真は西伊豆を旅行した際に撮った写真です。1泊2日の旅でしたが、海の幸を堪能したり、自然の雄大さに感動したりと、心も体も満喫できたよい旅でした。オンとオフを切り替えつつも、コツコツ地道にですが、資格も取得しました。今年、「基本情報技術者試験」を受験し、無事に合格しました。資格取得で自信に繋がったことは確かです。今後も引き続き挑戦していきます。

大きくなろうとしている最前線を肌で感じている日々を過ごしていますが、そこで思い浮かんだのは、大学時代に受講した「中小企業論」でした。中小企業は大企業とは違い、社員数も少なく、資金も限られ、事業を行うにしても数は制限されるでしょう。よい例が「下町ロケット」の佃製作所と帝国重工です。しかし、中小だからこそできることは何かを考えると、何でもできるということです。佃製作所のように夢に向かって失敗を恐れずに、社員一丸になって行う姿は感動しました。当社もまだまだ小さいながらも、日々改善を重ねています。その一員としてプロジェクトに加えていただいたことに感謝するとともに、戦力としてプロジェクトを無事に完成させることに尽力したいと思っています。ロケットエンジンのバルブ

はロケットを飛ばす上で、重要な役割を果たすそうです。私も「プロジェクト」というロケットのバルブとして、無事に目標地点まで飛ばせるよう、邁進致します。その進捗にご期待ください。



西伊豆にて（著者は左端，隣は著者の弟様）



2014年度三田祭の小野ゼミブースにて（著者は左側，隣は著者の弟様）

諦めと絶望

第 11 期 OG 蓮岡 聡美

2015 年、私の中でいろいろと心境の変化があった。いろいろを書き始めるとあまりにも長くなりそうなのでここでは割愛するが、結論だけを述べると、2015 年、私は、大学院への進学を止め 2 度目の 4 年生活



6 月に開催された第 11 期会@二子玉川（著者は中央）

をまっとうな文学部生として過ごした。この 1 年にタイトルをつけるなら「諦めと絶望」というタイトルが一番しっくりくる。こんなことをいうと、この 1 年、蓮岡はさぞ辛かったのだろう、と思われるかもしれない。しかし、「諦めと絶望」と表したわりには、辛いことばかりではなかった。確かに、就職活動期には、一部の同期を除きみんな卒業してしまっていたため、就職活動に関する情報を収集することに苦労した。

試験期間には、4 年の文学部生に友達がい

ないため、シケタイを集めることにも苦労した。なんでこんなことしているのだろう、と幾度となく思った。1 度決めた大学院への進学を諦め、自分の人生をどのように紡いでいけばいいのか、と絶望の中で 1 から考え直し、就職活動をしてきたわけであるが、喉もと過ぎれば熱さ忘れる、とでもいうのか、不思議とそんなに辛いことばかりでは

なかったと思える。それはやはり、私が行き詰ったり悩んだりしたとき、同期、とりわけマケ論のメンバーが傍に居てくれたからであると思う。

結局今年もマケ論のことを書くのかよ、とつつこみを受けそうだけれども、やっぱり私が書くことはマケ論のメンバーのことである。小野ゼミ



11 月、ICAMA での発表当日、第 11 期内藤さんとともに



ICAMA でいただいた学会賞の盾を、同期住田さんに贈呈
(撮影：佐藤和也さん)

卒業後も、留年仲間の伊礼や内藤とは、よくご飯に行った。住田は社会人になったけれども、お腹がすいたり、お金がなかったり、Web テ受けて欲しかったり、ES 添削して欲しかったり、悩んで行き詰ったりした時は、彼の仕事の都合はお構いなしに三田に召集した。はるぼんが長野から戻ってきたときには、マケ論メンバーみんなでピザパをした。小野ゼミを卒業してからも、こうして昔と変わらず

みんなとわいわいできるからこそ、「やっぱり私は小野ゼミに入ってよかったなあ」と思える。

戻ってこられる場所があるから、「諦めと絶望」の1年もこうして乗り越えられたのだと思う。小野ゼミでがんばったことを言い続けた就職活動。内定先の最終面接で、「マケ論メンバーみんなの短所と長所を教えてください」なんて言われたけれども、窮することなく答えられた。みんなの良いところも悪いところも、なんだって言えるから、みんなも弱ったときは蓮岡のところに戻ってきて欲しい。三田には帰ってこられる場所を用意できなかったけど、笑って許してね。



春学期の納会にて、論文代表としての悩みを打ち明けた
第13期生の相談に親身につけてくださった著者

ぶたかし

第 11 期 OB 伊礼 大夏志

恥ずかしながら私，小野ゼミを卒業後，就活を経て，めちやくちや太りました。



少し前の著者

現在の著者

しかも「小野ゼミを卒業後，就活を経て」とありますね。そうなんです，恥ずかしながら私，OB でありながら学部生でもあります。今年こそ必ず卒業します。

でもでも，そんなどうしようもない私ですが，最近素晴らしく嬉しいことがありました。まずは，ゼミ卒業後の簡単な年表をご覧ください。

2015 年 2 月：家にスリランカ人が転がり込んでくる

3 月：同居人のスリランカ人が警察のお世話になる

4 月：4 年生（2 回目）

7 月：就活名目で人事と飲み歩き，運良く某企業に拾われる。

9 月：同居人のスリランカ人が警察のお世話になる（2 回目）

10 月 31 日：三田論のチームで国際学会に参加する。その 12 時間後，凍死しかける。

11 月 1 日：学会の授賞式にて学部生チームで唯一奨励賞を頂く。

※下線の部分が特に伝えたい部分です。その他，気になる部分は個人的に聞いてください。

去る 2015 年 10 月 31 日、小野先生のご助力と後押しのお蔭で、我々 11 期マケ論チームの一部が国際学会 ICAMA に参加することが出来ました。アジアを初めとする世界中の修士・博士・教授の方々がいる中、ちんちくりんの私たちは緊張してまい…かと思いきや、何度も練り直し、先生に添削して頂いた論文ですので、割とすんなりと、むしろ自信を持

って発表することが出来ました。そして、発表後「明日の授賞式楽しみだね～」と別れ、その場を後にしました。

「10 月 31 日」何かひっかかりませんか？ そう、ハロウィンです。会場を出たその足で、私は「原始人」の格好をして夜の渋谷に繰り出しました。先ほどの写真の輝かしい私はどこにやら、写真下のゴミが私です。ギリシャ人風の友人に踏まれ、シブヤ中の笑いものでした（中央で優雅に酒を飲んでいるゼウスは他人です）。

ここで友人とはぐれたのですが、なんと！ 明日の授賞式のスーツは友人宅に！ ということで、彼と行き違いにならないよう、半裸で友人宅のドアの前で寝ながら 11 月を迎えました。

あの世のお迎え前が来る前に友人に会うことができ、急いでメイクを落として会場へ！ 11 月 1 日、ICAMA の授賞式に参加しました。そこでなんと！



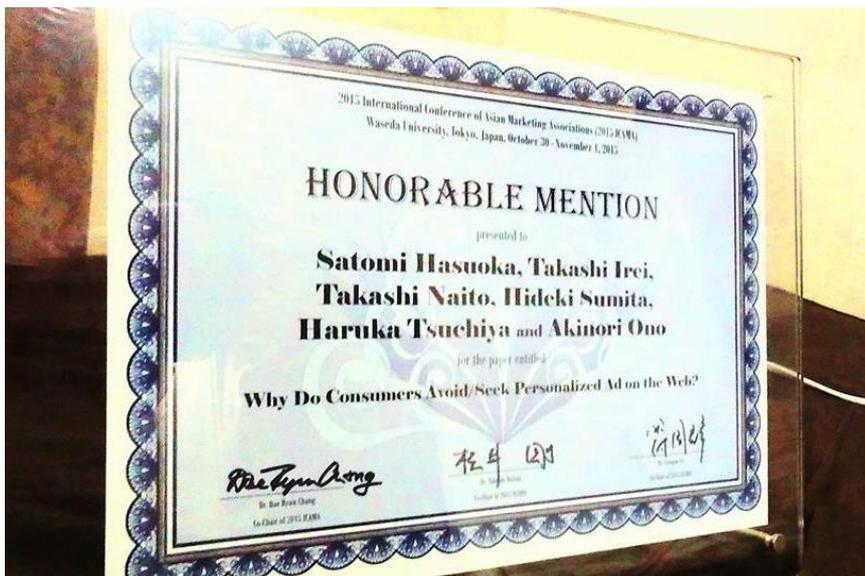
国際学会での発表後の記念撮影（著者は左端）



学会発表を終えて数時間後の著者（写真下部）

学部生で唯一奨励賞を
いただくことができました。

社会人になってから
ではこのような経験は
できなかったでしょう。
遊びと学びを極限まで
追求する小野ゼミフイ
ロソフィー。大学5年
生にしてその充実度合
いを改めて噛みしめま
した。何事も本気って
やっぱり楽しいですね。



世界の教授陣を差し置いて著者が獲得した国際学会奨励賞の賞状



第11期マケ論メンバーと先生と共に、ニューオリンズにて（著者は写真中央）

前へ！

第 11 期 OB 久米 敬太郎

ご無沙汰しております。小野ゼミ第 11 期 OB の久米敬太郎でございます。入社後の 3 カ月の研修を経て、配属先が名古屋に決まりました。会社の名古屋配属の新人は私 1 人だけなので、周りは上司ばかりの環境です。上司に囲まれながら、上司に追いつこうと日々ひいひい言いながら名古屋で働いております。

「前へ！」

題名にもあるこの言葉は、会社の私の所属する課の今年のスローガンになります。元明治大学ラグビー部監督、北島忠治氏の言葉で、「どんな状況でも、諦めず、前に向かって進んでいこう」という気持ちを意味するそうです。(なんだか胡散臭いですね。)

ところで先日、大阪出張のついでに、小野ゼミ同期の佐藤和也君の寮に遊びに行き



会社の同じ課の先輩方と（著者は後列中央）

ました。彼の部屋で久しぶりに昨年の OB 会誌を読んでみると、私の卒業エッセイの題名で、「諦めず『前進』することの大切さを学びました」という胡散臭いような言葉が書かれていました。それを見た時、偶然にも今年の課のスローガンと似ていたもので、何か運命的なものを少し感じました。それと同時に、「小野ゼミでせっかく学んだスピリッツだし、今年の仕事でしっかりと発揮してやろう。」という気持ちも湧き起こりました。胡散臭い言葉が偶然にも重なった今年は、折角なので小野ゼミ OB としてのプライドを持って、モチベーション高く、仕事の方は常に「前へ！」の気持ちで精一杯頑張っていきたいと思っております！

仕事以外のプライベートの方はというと、社会人になってから学生時代よりもつまらなくなると思いきや、それなりに今のところ充実できているのかなと思います。会社の先輩とゴルフをしに行ったり、カメラを持って色々な場所に行き、撮った写真を写真コンテストに応募したりするなど、学生時代とはまた違った楽しみ方を覚えました。社会人になって始めたゴルフもカメラもまだまだ素人ですが、今年はこれらもまた、仕事と同様「前へ！」の気持ちで、腕前を上げたいと思っております！

指針

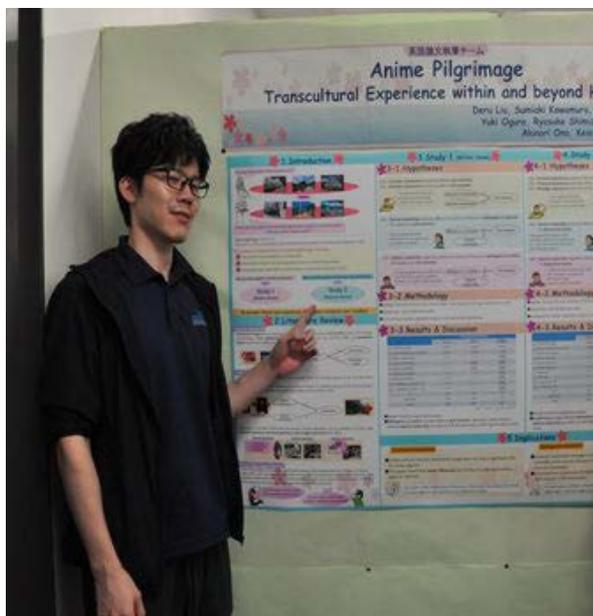
第 11 期 OB 内藤 節

エッセイを書こう。私がそう思い立ったのは、第 13 期の OB・OG 会誌担当者に指定された〆切日の当日である。1 度身に付いてしまった癖はなかなか治るものではないとよく言われるが、尻に火がつかないと物事に取り組まないという私の悪い癖も例にもれず、治そうと意識しているにもかかわらずなかなか治らない。全くだらしのない人間である。それはさておき、早くエッセイを書かなければならない。どうせ書くなら、現役生に対して何らかの指針を与えられるようなエッセイが書きたいものである。しかし、悲しいかな、良いアイデアが全く思い浮かばない。深刻なクリエイティビティ不足である。そんな自分に絶望して天を仰いだとき、本棚の 1 番上段に置かれている過去の OB・OG 会誌が視界に入った。そうだ、先人たちの知恵をお借りしよう。そう思って、私は、過去の OB・OG 会誌を手に取り読んでみた。OB・OG 会誌に載っているエッセイはどれも、OB・OG の方々の個性が光っており、読み物としてかなり面白い。少しだけ読むつもりが、気がついたら夢中になって読み耽ってしまっていた（現役生諸君！過去の会誌をぜひ読んでみよう！）。なるほど、社会人 1 年目の OB・OG の方々は、社会に出て働いている中で、小野ゼミで学んだことがいかに役に立っているかということについて書くことによって、現役生にはまだ理解できないゼミ活動の価値を伝えているようである。私も、このネタでエッセイを書くことによって、私のエッセイを読んだ現役生に対して、残されたゼミ生活をどのように過ごすべきであるかということについての指針を与えようではないか。そう思って、1 度大きく伸びをした後、仰々しく首と指の骨をポキポキと鳴らし、「よしっ」と一言漏らして指をキーボードに置いてしばらくした後、私は重大な事実を思い出した。私は留年していたのだ。社会に出て働くどころか、何の目的もなく延長されたモラトリアムというぬるま湯にどっぷりと浸かっている私が、このネタでエッセイが欠けるはずもない。ましてや、現役生に対して、偉そうに高説を垂れるなんてできやしない。なぜなら、同じ学生なのだから。早くも計画が頓挫してしまったところで、不本意ではあるが、現役生に対して何らかの指針を与えるというような高尚なエッセイを書くことは諦めよう。誠に遺憾である。

そういえば、冒頭にて私の悪い癖について触れたが、私が来春入社する会社の役員の方が、入社までにたくさんの良い癖を身に付けるように心掛けなさいというお話をしてくださったことを思い出した（決して今まで忘れていたわけではない）。悪い癖がなかなか治らないのと同様に、1 度身に付いた良い癖もなかなか消え去ることがなく、これからの君の人生に良い影響を与え続けてくれるはずであると。そして、良い癖とは、そんなに大した癖でなくとも、例えば、知り合いと出会ったら自分から挨拶をする癖や毎日靴を磨く癖といった、社会人として当たり前のことを当たり前にする癖で良いのだと。そういえば、就職活

動を通して出会う学生の中には、惚れ惚れしてしまうくらいに素晴らしい学生もいたのだが、当たり前のことが当たり前でできない学生の方が圧倒的に多かった。例えば、社員の方に挨拶をしなかったり、面接の集合時間に遅刻したり、しわだらけのジャケットを着てきたりと、様々である。もちろん、私は完璧かと言われたら完璧ではなく、むしろまだまだ至らない点の方が多いけれども、その私から見ても常識がなっていない学生が多かったのである。だからこそ、当たり前のことを当たり前でできるということは、社会人として働いていく上で、十分強みとなりうるはずである。よしっ、残されたモラトリアムの間に、できる限り多くの良い癖をつけて、社会という荒波に挑もうではないか。もちろん、悪い癖は排除して。

結局、このエッセイは、残されたモラトリアムを私がどのように過ごすかについての意思表示になってしまったが、結果とし、現役生に対して何らかの指針を与えられたのではないだろうか。自意識過剰である。



今年度、三田祭ブースに1番乗りしてドヤ顔する著者



11月に行われたICAMAにて、発表を終えた第12期生と先生と共に（著者は写真中央）

謝罪力

第 11 期 OB 佐藤 和也

今年度、三井住友信託銀行株式会社に入社した第 11 期佐藤和也と申します。社会人 1 年目です。社会人 1 年目という、変わったと感じるものは各々それぞれであります。何か劇的に変化した年となるはずで、小野ゼミ OBOG の皆様にも経験があることでしょう。私にとって 1 番劇的に変化したのは、圧倒的に、謝罪した回数です。社会人成り立ての私は、例えば、業務知識が曖昧であるがゆえに、即答できずその場でお客様に謝ったり、あるいは、自分の力不足で発生させたトラブルに上司を巻き込んでしまった際に、上司に謝ったりもしました。むろん、プライベートにおいても、仕事に忙殺され、デートの約束を忘れ、彼女を怒らせて謝るなんてことは日常茶飯事です。



会社の新人芸（著者は左端）

ただ、そんなマイナスなイメージがある謝罪という行動に対して、実はピンチをチャンスに変えるツールなのではないかと考え始めています。もっと言うならば、謝罪を楽しめる人ほど、上の立場に就いてるのではと感じています。残念ながら、私は謝罪を楽しむという聖域の扉をまだ開いてはいませんので、表現するのは難しいですが、少なくとも当社にて活躍している社員には当てはまっていると考えております。管理職として、部下の失敗を部下の失敗のまま

に終わらせるのではなく、部下のチャンスに変えることができる、そんな度量の大きい人物に私もなりたいと思っております。同じ銀行業界なのに半澤直樹とは真逆ですね！

これまで、私は謝罪をなるべく避けるために、ある程度、未来を予測して先回りした行動を選択してきました。もちろん、小野ゼミで活動してきた時もです。確かに、優秀なビジネスマンとして未来を予測する力は必要不可欠です。しかし、私たちが予測していた以上の出来事に巻き込まれたり、遭遇したりすることは今後、当たり前起きるでしょう。その時にマイナスからゼロに戻すだけでなく、プラスに変えて相手と一生の関係性を築けるキッカケとなる謝罪を身につけたい。そんな事を思いながら、大阪にて、公私ともに充実した日々を送っております！小野ゼミ生が各地で活躍して社会を良くしていくことを願っております。



会社の先輩と甲子園にて野球観戦（著者は後列中央）



今年度の三田祭ブースにて。左から、第11期小平さん、著者、小野先生、第11期石塚さん、第12期中原さん

私もルー大柴さんになりたくて

第 11 期 OB 佐藤 優輝

小野晃典研究会第 11 期の佐藤優輝と申します。現役生の時は、OB 会誌編集長を務めておりました久米君と共に、エッセイを皆様から取り纏めておりました。しかし、社会人 1 年目となった今年度は、エッセイを私自ら投稿させて頂けることに、時の流れの速さへの驚きを隠せません。折角エッセイを投稿する機会を頂いたので、卒業後の私の近況を述べさせていただきます。

大学卒業後、ゼミやサークルの同期が社会という荒波にて新人研修にて鍛錬を繰り返し、希望に胸を膨らませている中、会社の都合で 7 月入社であった私は、実家という安住の地にて食っちゃ寝を繰り返し、腹を膨らませておりました。(本当に 4 キロ太りました。妹には「家畜か」とツッコまれておりました。) そんな怠惰に過ごした不毛な日々もあっという間に過ぎ、いつの間にか 7 月 1 日を迎え、私は某コンサルティングファームに入社致しました。

入社後、新人研修が始まると、あの肥えるだけだった不毛な 3 か月が嘘のように、毎日が有意義で、刺激に満ち溢れていました。ここでいう刺激とは、自分の力不足に対する焦りに因るものです。というのも同期の多くは、何か自分で誇れる強みを既に持っておりました。Java 言語なら誰にも負けないと豪語する情報系の大学院を卒業した同期、金融業界に精通しているという某銀行から転職してきた同期、私は薬剤師の免許を取得していると自慢げに話す同期。彼らに対抗できる自分の強みとは何か、研修中何度も考えたものです。帰国子女であった私の強みは、英会話能力なのではないか、という結論に至ったのですが、それはどうやら誤解であったようです。アジアの各支社から新人をマレーシアに集めて実施された新人合同研修にて、自分の英会話能力の低さを痛感しました。確実に私よりも TOEIC の点数では劣っているにもかかわらず、英語を母国語とする同期に対し、ジェスチャーや表情を使うことで私よりも円滑にコミュニケーションを図れる日本人の同期が何人もいたのです。研修を経て、私は「今後、この会社で何か自分の大きな強みを作ろう」と決意しました。

10 月に研修を終えた私は、焦りを抱えたまま某企業の企画管理部に配属されました。このプロジェクトのクライアントに対するご支援内容は、次年度のビジネスプラン策定支援です。私はこのプロジェクトで、上司及びクライアントが必要としているスキルを見極め、それを強みとすることを目的として設定しました。しかし、まず上司やクライアントがカタカナの社内用語を多用するので、彼らが何を議論しているかわかりません。研修の際、講師の方が、社会人にはカタカナばかり使うルー大柴さんみたいな人がいるから少しずつ慣れてね、とアドバイスくださったことを思い出しました。(カタカナ用語を多用するのは何故なのでしょうね…仕事仲間内の結束を深め、かつ素早く意志疎通をとるためなのではないか、と私は思い

ました。ヒョウラ、ギンタマのような慶應大学生用語が存在する理由も同じな気がしますね。)当初、カタカナを多用する「ルー大柴さん」達に違和感覚えました。しかし、1か月もすると、「ルー語」でテキパキと意思疎通を図り、作業に打ち込み、時に熱く議論される「ルー大柴さん」に憧れを抱くのと同時に、この方達と一緒に働いてみたいという想いが生まれました。そして、必死に「ルー語」を覚え、上司と意志疎通をなんとか取れる段階になった現在、私はあるサービスを部内に導入すべく、そのサービスの有効性を説明する PowerPoint 資料を作成しております。ここで、小野ゼミにて養った情報収集能力、論理的思考力、及び資料作成能力が本当に役立っております。また、そのドラフト版を上司に発表する機会があったのですが、「佐藤君のプレゼン、とっても抑揚があってミュージカルみたい」というお褒め(?)のお言葉を頂きました。これらすべての社会人として土台となるスキルを小野ゼミで培うことが出来たので、あとはこの能力をブラッシュアップしていくのみです。それこそが私の強みになると確信しております。今後は、心をデビルにして、日々マイセルフを磨き上げ、部内の皆様とトゥギャザーしていきたいと思ひます。



マレーシアの研修にて、同期との集合写真（著者は、前から2列目、左から3番目）

近況報告：妖精と呼ばれなくなってから

第 11 期 OB 住田 英紀

第 11 期 OB の妖精こと住田英紀と申します。慶應義塾大学を卒業してから、早いものでもう 10 ヶ月。気が付けば、今年度の三田祭も終わり、いつの間にか第 12 期生の卒論の星の数もあと 1 つを残すだけという子ばかりになっていました。第 13 期生が三田論を執筆している間、第 12 期生が卒論を執筆している間、大学院生の先輩方が、修士・博士論文を書き進めている間、私は何をやっていたかと言いますと、当然ですが、仕事をしていました。

現在、第一生命保険株式会社の契約サービス部、契約サービス企画課という部署にて私は働いております。パッと見、どのような業務を行っているかがよく分からない部署名だなと感じると思います。社長からの辞令を受け取った際、私も真っ先にそう思いました。当課の業務は、生命保険会社のアンダーライティング業務の内の中間にあたる業務だとよく説明されます。生命保険会社のアンダーライティング業務は、「入口・中間・出口」から構成されており、「入口」の業務は、お客さまが保険に加入したいと申し出なされたときに、このお客さまを本当に加入させて良いのかを判断する業務、「出口」の業務は、お客さまがお



妖精さんスマイル

亡くなりになった、あるいは高度障害状態になった場合に、保険金支払いを行う業務です。そして、お客さまが保険に加入してから、保険金の支払いを行うまでの間に、お客さまが結婚して名義が変わるかもしれませんし、急にお金が必要になって契約者貸付を行いたいかもしれないですし、一生涯保障の一部を、年金として受け取りたいかもしれません、これらのお客さまの希望に応えるための業務を「中間」の業務と呼びます。この「中間」の業務をスムーズに行うことができるように、事務内容の企画・開発を行っているのが、当課なのです。

長々と書きましたが、簡単に言うと、当課の業務はお客さまにとって当たり前のことを当たり前に行うために必要な業務のことなのだと思います。たとえば、申し出た結果、支払われた年金額や保険金額が間違っているかもしれないなんて誰も思わないでしょう。このようにお客さまにとっては、正しく為されていなくてはならない、当たり前を日々実現させつづけているのです。

そのような業務の中で、小野晃典研究会で学んだことが活かしているか振り返って考えてみると、多分に活かされているのかなと思います。なぜなぜと物事を分析する思考方法やロジカルシンキングが活かされるのは勿論ですが、特にお客さまあてに送付する通知やお詫び状を作成する際に、レポートや卒論で養われた細かさが活かされているように感じます。細かさ故に、1つの通知の確認に過剰な時間を費やし、他の業務に割く時間を失ってしまうこともしばしばあり、両業務のバランスを考えた上で業務を行う必要があると指摘をいただくことも多々あるのですが、なかなか養うことができない細かさを習得できて良かったなと思います。遅延してしまったことも、SASの再レポランキング2位という不名誉な称号をいただいたこともありましたが、最後まで取り組み続けて良かったです。細かさ以外も含め、小野晃典研究会で学んだことを忘れないようにして、今後も業務を頑張って続けていければなと思います。



現役時代の著者。先生と11期マケ論メンバーと共に、ニューオリンズにて（著者は左から2番目）

考えを変えねば

第 11 期 OB 立松 宗磨

初めに私の近況を報告しておくとして、4 月 1 日付で三菱商事に入社し、商材は自動車を、国はベトナムを担当しております。三菱自動車から自動車を買ひ、それをベトナムの販社（ディストリビューター）に売るトレーディングと、そのディストリビューター（ベトナムの国営企業・三菱自動車・三菱商事の 3 社出資の合弁会社）を管理する事業投資先管理という、まさに就活で耳にした業務に取り組んでおります（自分が日々行っている業務はそのごく一部ですが）。今まで自動車とは縁もゆかりもない生活を送ってきた自分にとっては（もちろん就活では自動車メーカーは 1 社も受けておりません）意外でしかない配属でしたが、配属面談での私の発言を振り返ると、よく考えられた配属であったと納得しております。

日々の生活はというと、良くも悪くも学生時代と変わっておりません。新人ゆえに様々な社内・社外との飲み会はすべて幹事となり、店探し・司会・精算等すべて行います。1 つ 1 つの飲み会に対する細かさ（詳細省略）には驚きます。幹事ばかりやっているおかげで、海外旅行に行けるぐらいのマイルが貯まりま



クリスマスパーティーでの一場面（著者は左から 3 人目）

した。笑 また、最近は約 200 人が参加したクリスマスパーティーでの新人芸の練習をしていました。30分が新人芸として与えられ、10月からコンテンツ決め・台本作成・練習と準備しました。直前期には、平日は毎朝 7:30 から練習、土日はスタジオを借りて練習と学生以上？ に熱心に取り組みました。ちなみに、本番ではハモネプ、ダンス、劇をやりました。学芸会ですね（笑）。

一方業務はというと、今のところなんとかやっております。しかしながら、3年後、5年後…にどこで何をしたいのか、その実現の為に日々の業務以外でしなければならないことは何か、といった将来に就いて具体的に考えられておらず焦ります。今までは、目の前のことに全力で取り組んでいれば自ずと道が開けると思い行動してきましたが、会社に入ってみると、それだけでは足りないと気づかされました。目の前のことに全力で取り組むことは当たり前であり、その上で将来の目標に向かって行動しなければ、会社にとって都合の良い人材になるのでは？ と感じております。

結論としては、2016年は日々の業務量・範囲を拡大すべく精進するとともに、もう少し視野を広げ、本当に自分がしたいことは何かを考えながら行動していこうと思います。小野ゼミにも顔を出せたらと思っていますので、今後も何卒宜しくお願い申し上げます。



今年度春学期の納会に来てくださった著者（右端）

Let's Learn English!

第11期 OG 土屋 晴香

今さらこいつ何を言ってるんだとお思いでしょう。ですが、今のところ、私にとって社会人になって学んだ一番大きなことが、英語なのです。9月末から12月末まで約3か月、フィリピンのセブ島にて語学研修に参加していました。ちなみに9月末まで新人研修に参加していたので、今のところ、配属先の業務はほとんど行ったことがありません。ローカルな企業ですが、海外への事業拡大を視野に入れての研修です。思えば、大学に入学した当初の私の目標は、留学することでした。意識の強さや行動力が伴わず断念した目標でしたが、社会人になってこのような機会をいただくことになり、本当に幸せでした。実際に3か月をフィリピンで過ごし、想像以上に楽しく充実した時間を送ることができたと感じています。同時に、学生時代に留学に行かなかったこと、小野ゼミでも中途半端にしか英語論文に取り組んでこなかったことを後悔しました。

具体的には、平日のカリキュラムは、朝7時の単語テストから始まり、50分の授業を7コマ受け、夜10時まで義務自習というものでした（土日は完全フリー）。毎日英語漬けでヒーヒー言っていたと言いたいところですが、残念ながら、生徒全員が日本人だったため授業の時間以外は基本的に日本語を使って生活し



先生を交えて食事に行った際の写真（著者は、一番奥）



語学学校の卒業式での写真（著者は、左側から2番目）

ていました。最も悔やまれる点ですが、そのおかげで気楽に生活を送ることができました。

成果として、英語がどれくらい話せるようになったのか、という問題ですが、私の感触としては、「英語を話すことに慣れた、抵抗感がなくなった」という程度です。当然ですがまだまだ、流暢に話せる、ビジネスで使える、というレベルではありません。ですが、「英語を話すのに慣れた」というのは、単純なことですが大きな進歩だと感じています。今後も、「英語話せます」「仕事で使ってます」と自信を持って言える



フィリピンでも登山を楽しんだ、山ガールの著者

るようになるように、自分を信じて英語学習を続けます。加えて、あくまでも英語はコミュニケーションの手段だということを忘れず、業務に励み、一刻も早く一人前の社会人になれるよう精進いたします。

結婚特集

結婚のご報告

第3期 OB 高木 研太郎

こんにちは、第3期の高木です。05年に卒業してアクセンチュア株式会社に入社してから、当初は数年で転職すると思っていたものの気づけば10年半あまり、未だに同社にて仕事をしています。今回は私事ではありますが、昨年に結婚しましたのでエッセイを書かせて頂くことにしました。

とはいえ、確かに結婚は節目のイベントではあるものの、日々の生活がその前後で大きく変化したわけでもないで、特別なことをお伝えできるわけでもなく…この1年、婚約してから入籍、挙式、披露宴と進めて行くに当たって感じたこととしては、

- ・良く聞いてはいたものの、挙式や披露宴の事前準備は結構大変（特に私は海外で挙式を行い、国内で披露宴を行ったので、準備が単純に2倍近く必要だった。とはいえ海外挙式はいい思い出を残すことが出来るのでおススメです。私はイタリアのフィレンツェで挙式を行ったのですが、家族との初海外旅行にもなり、感慨深いものでした）

- ・でもその大変な時間を共に過ごすことでお互いの絆を深めていくことが出来る

- ・記念日が急激に増えて今後の管理・対応が大変そう

と言ったところでしょうか。特にオチもなくすみません。

ただ、あえて言うのであれば今まで色々な人に助けられてきたことを強く感じられるようになることが大きいかもしれません。結婚というイベントを進めて行く中で、両親を初めとする家族はもちろん、親戚・従兄弟の人たち、小中高大と続く学校での先輩・友人、会社の上司・同僚など、多くの人たちとの出会いが自分の今を形成させてくれたと感じさせてくれました。そしてその皆さんが挙式や披露宴の場で祝福の言葉をかけてくれるのは思っていたよ



イタリア・フィレンツェにて

りも余程うれしいことだと感じました。

そして、今はそんな気持ちが続いているので、今までお世話になった皆さんとはより密接に関わっていききたいなと思っていますので、同期を始め先輩後輩の皆さん、ぜひ近い内に会って近況を交換できればと思います。今回は割愛していますが、仕事の話も色々交換していきたいなと思います。

ちなみに新居（特に引っ越したわけではないですが）は最寄りが池尻大橋駅です。特別なものはありませんが、ワインは常備していますので、どなたでも遊びに来てください。お待ちしております。



フィレンツェにて、ゼミ第4期小合さんと共に（著者は左端）



披露宴にて、ゼミ第3期と共に（著者は前列左側）

結婚のご報告

第5期OB 細川 晋吾

小野ゼミ OBOG 会誌への寄稿は本稿で7度目となりますが、ついに結婚のご報告をすることになりました。とても嬉しく思っています。平成27年10月31日に晴れて結婚式を挙げ、新生活がスタートしたわけですが、その前年の12月から今に至るまで、小野ゼミの関係者の方をはじめ、多くの方からご祝福の言葉を頂戴し、ますます、明るい幸せな家庭を築いていきたいという使命感を感じる今日この頃です。改めて、この場を借りて皆様には御礼申し上げます。

結婚のお相手は、大学や職場とは全く関係のない方で、私が加入している生命保険のセールス担当である女の子の紹介で付き合い始めた人です。目立ちのはっきりした私好みの感じです。これまであまり恋愛とは縁がなかった私ですが、付き合い始めた当初から、何となく「この人と結婚するかもしれないな」という（勝手な）予感をしておりました。それから3年が経ち本当に結婚することになり、こういったプライベートな出会いに限らず、仕事上でも、良い出会いはいつ訪れるかわからないなと改めて思います。



著者、披露宴にて5期沖永さん（旧姓伊佐次さん）と一緒に、景品を当てたため撮影



著者の挙式の様子（ザ・プリンス・パークタワー東京にて）

結婚式には小野ゼミ同期に来てもらいました。この場を借りて御礼します。本当にありがとうございます。平成27年には、私だけでなく他にも結婚した同期がいて、結婚式で皆に会えることをとても嬉しく思っています。こうして思うことは、小野ゼミに在籍していた間、頑張ってきて良かったということです。楽しいことばかりではないのが小野ゼミです。ただ、そのような日々を共有してきたからこそ、嬉しいことは皆で心の底から喜びを共感しあえるのだと思います。言葉よりも写真のほうが伝わりやすいと思いますので、この後は写真に本報告の役目を譲りたいと思います。結びにはなりますが、これからも皆様にはご指導とご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。



著者、新婚旅行（ニュージーランドのテカポ湖にて）

それからどした

第7期 OB 岸本 啓太郎

みなもすなる結婚といふものを私もしてみむとするなり

——というわけで、私事で大変恐縮ではございますが、昨年の11月22日の良い夫婦の日に入籍いたしました。相手は大学時代からかれこれ7年半お付き合いしていた女性です。同期が次々と結婚していく中、私も彼女（現妻）と結婚することはどうの昔に決めてはおり、妻とも将来のことをあれこれ話し合ってはありましたものの、はてさて私はいつ結婚を切り出そうかと常日頃（ぼんやりと）考えておりました。

が、そんな（ぼんやりとした）日々はある日を境に変わりました。妻は大学卒業後に、今や小野ゼミ生御用達の慶應のロースクールで勉学に励み、一昨年司法試験に合格したのですが、私は妻が就職したら一緒に暮らして、それから結婚を考えようと（ぼんやりぼやぼや）考えておりました。そんなある日、本当に突然に妻にこう言われました。「私、修習が終わったら中国行くから」、と。ほうほうなるほど。

よくよく話を聞いてみると、どうやら妻の事務所は海外案件がメインのようで、入所したらまずは中国に語学留学に行くことが義務付けられているとのことでした。とはいえ、3ヶ月程度帰ってくるのだろうと高をくくっていたら、期間は半年から1年とのことでした。太っ腹な事務所というか、畜生、うらやましいぜというか何というか。そんな報告を受けたのが確か9月くらいでした。そして、会社の人（既婚女性の先輩）に相談した際に、「双方の家に挨拶とか両家顔合わせとか結納とか、いろいろ調整してたら2~3ヶ月はかかるよ！何してるの、マジで！」とお叱りを受け、そこでようやくぼんやりした気分から覚め、急いで妻の実家に挨拶に行きました。もともとよく妻の実家にも遊びに行っており、妻の家族もそうなるだろうと思っていたためか、その場で結納とか入籍いつにする？という話になりました。そこで、たまたま両家族の都合がぴったり合った11月22日に結納をし、その足で入籍に行き、新婚気分もへったくれもないまま妻は中国に行く準備を慌ただしく済ませ、年明け早々中国に行き、そして今に至ります。



法隆寺ではしゃぐ著者の奥様

何が言いたいかと言いますと、つまりはこういうことです。昨年の三田祭で同期の菊盛やその場にいた後輩に入籍した旨を伝えた後、案の定結婚枠でエッセイの執筆依頼が来たのですが、結婚しても何も変わらない自分は何を報告すれば良いのだろうかと途方に暮れ、何とかかんとか文をひねりだし、あとちょっとで終わる！とホッとしている次第でございます。おそらく来年ならばもう少しマシなご報告ができるかと存じますので、今回はこの辺でご勘弁ください。それではみなさまのご健康と小野ゼミのますますの発展を祈りつつ。

福岡での新生活

第8期 OG 中尾 優美

(旧姓：樋口)

平成27年は、転勤、部署変更、結婚と公私ともにこれまでの人生で一番思い出深く、特別な1年になりましたので、ご報告いたします。

まず結婚についてですが、平成27年4月に入籍しました。お相手は、大学3年生の頃に知り合った慶應義塾大学工学部出身の方で、九州の企業で働いています。大学卒業後は東京と九州の遠距離でしたが、擦れ違いながらも何とか約3年の遠距離に終止符を打ち、結婚に至りました。当時は、友人たちに会うたびに「よく続いているね」と驚かれたものでした。私は銀行で働いているので土日休み、主人は不規則勤務のためなかなか休みも合わず、2か月に1回程度のペースで会っていましたが、結婚に至ったのは、休みが合えば飛行機で東京まで会いに来てくれた主人の真面目な性格が大きいと感じています。九州男児なのに家事全般に協力的な主人には、本当に感謝しています。同期第8期女子からのお祝い（ルクルーゼ）を有効活用し、福岡の新居が温かく居心地の良い居場所となるように、今後も二人で協力しながら頑張ります。

結婚式は、11月に2人の地元長崎で開催しました。大学時代を東京で過ごしており、遠方からの出席者も多かったので、「長崎らしさを楽しんでもらえる結婚式」となるように準備を進めてきましたが、皆様のおかげで、笑あり涙ありのまさに一生忘れられない1日を過ごすことができました。当日は、同期第8期女子がはるばる長崎まで駆け付けてくれ、小野先生や菊盛さん、第8期、第9期、現役小野ゼミ生まで出演の素敵な余興ムービーを上映させていただきました。改めて、本当にありがとう。これまでお世話になった大切な方々に祝福され、地元長崎で同じ時間を共有するという感動は、これまで味わったことのない特別なものでした。花嫁の手紙の終盤で笑いが起こるといふハプニングは、「樋口らしくてほっとした！」と結婚式後、皆さんに何度も声をかけてもらいました。

最後に、仕事についてです。主人が九州勤務ということで、ぼんやりと結婚を考え始めた頃から、「いずれは福岡支店に異動したい」という希望を当時の支店長に話していたのですが、予想よりも早く異動希望を叶えていただき、平成27年1月に東京の調布支店から福岡支店へ転勤となりました。

大好きな調布支店を離れ、転勤と同時に融資・外為課から法人渉外へと部署も変わり、慣れない渉外活動に精神的に追い込まれる日々が続いていました。最近になりようやく笑い話として話せるようになりましたが、幸せいっぱいの新婚生活とは程遠い、泣いてばかりの毎日を過ごしていました。現在は、住宅ローンの部署に配属されており、窓口に来店されるお客様の相談やローン契約、大手の不動産会社から住宅

ローン案件を紹介してもらえるよう日々推進に励んでいます。

楽しいこと、つらいこと、幸せなこと。たくさんの経験に恵まれたこの1年の経験をバネに、今後も自分らしく仕事と家庭をうまく両立し、人生の目標を持って充実した毎日を過ごしていきたいと思います。

福岡といえば世界の住みやすい都市ランキングでも上位に入っており、もつ鍋やラーメン等、おいしい食べ物がたくさんあることは皆さんご存知かと思います。新居は博多駅付近なので、福岡にお越しの際は是非ご連絡いただきたいとともに、九州新幹線のチケット手配等は是非主人にお任せください！



著者結婚式にて



同期第8期に囲まれて、世界新三大夜景を眺めながら（著者は中央左寄り）

秋山、結婚したってよ

第9期OB 秋山 賢輔

秋山、結婚しました。2015年4月4日、満開の桜並木をくぐり抜け、東京都は北区の役所に婚姻届を提出しました。特に思い入れのある日というわけではなかったのですが、大安、4月4日で4合わせ（幸せ）、 $4+4=8$ （八は末広がり）という理由を勝手にこじつけてこの日にしました。おかげさまで、縁起が良いと祖父母には大好評でした。



著者故郷の香川県での結婚式にて

妻とは中学時代に出会い（地区のイベントでお互い顔だけ知っていた程度）、たまたま同じ高校に進学したことから改めて友好を深めました。高校3年の春から交際をスタートし、妻も関東の大学に進学したため、遠距離恋愛になることもなく、交際を継続させることができました。もちろん、交際スタートから結婚までずっと順調だったわけではなかった（小野先生や同期はご存知かと）ですが、合計すると約7年間の交際期間を経て、無事結婚することができました。

「結婚して何か変わった？」とよく聞かれますが、妻と生活する上で変わったことは特にありません。元々、結婚の1年前から同棲していたというのもあるし、何より付き合いが長いのでお互いの性格もよく分かっています。結婚したことで変わったことはありません。強いて言うなら、飲み会があってもほとんどの場合終電で帰るようになったことぐらいでしょうか（笑）。あと、女性と飲む回数も減りました（悲）。

それにしても、最近本当に同年代の結婚が多いですね。自分もやりましたが、会社の同期や中高の友人の結婚式・2次会によく招待されます。小野ゼミ同期でも自分以外に数名いるようですし、いわゆる「結婚ブーム」を実感しています。これから結婚式を控えている同期、準備やら出費やら大変でしょうが頑張ってください。たいてい男がリードしがちですが、片方に任せきらないで下さい。本当に大変なので2人でとことん話し合いながら準備を進めて下さい。

最後に、話は変わりますが、結婚して少し広いマンションに引っ越し、ずっとやりたかったホームシアターを作りました。普通のリビングに作ったので防音設備は整っておらず、音量は控えめにするしかありませんが、100インチのスクリーンはなかなか迫力があります。皆さん、いつでも遊びに来て下さい。



著者宅のホームシアター（著者作）

婚姻届受理証明書

第9期OB 勿本 慎弥

私は舞浜という場所にこだわりを持っている。それは、20歳になって初めてディズニーという世界観を味わい、その感動を忘れることができなかったからである。私はこの5年で24回も舞浜に足を運んでいる。思い返してみれば、現役ゼミ生であり論文代表であった頃のこと。共著論文の巻頭言を「2011年11月吉日。夢と希望の街、舞浜より。」と書きたいと考えた。そこで、論文メンバーと共に舞浜に足を運びディズニーを楽しみ、巻頭言を書ききった。

◆2015年9月4日 ～プロポーズ～

こだわりの強さは、舞浜を私の人生の重要な場所に変えた。20歳の頃から、プロポーズをするのはディズニー公式ホテル以外にないと考えていた。予定どおり、決行日の半年前から計画を始め、ディズニーランドホテルの部屋を予約することができた。9月4日は彼女の誕生日であったため、当日までにホテルスタッフの方々と打ち合わせを幾度となく行った。計画の主な流れとしては、ディナーをルームサービスで済ませた後に、プロポーズをすることになっていた。しかし、事件は発生した。ディナーを済ませた直後、予定になかったホテルスタッフの方が私たちの部屋を訪れ、手には「プロポーズ記念おめでとうございます！」と書かれたシールを持っていた。私が彼女にサプライズを計画したつもりであったが、ディズニーランドホテルからサプライズを先にくらってしまった。今となっては笑い話であるが、その時にはものすごく汗をかいた記憶がある。



写真は、ディズニーランドホテルにて、まだサプライズをくらっていない段階（著者は左側）

◆2015年11月22日 ～婚姻届の提出～

日曜日になったばかりの夜中0時、私たちは私の社宅近くの区役所に婚姻届の提出に行った。本当に人が中にいるのか不安になるほどの静けさであった。役所の端にあるインターホンを押して1分、時間外受付の方が「今日は夜中に何組か覚悟していましたよ」という言葉と共にドアを開けてくれた。後ろを見ると同じようなことを考えた人たちが1組いた。提出した婚姻届に0時5分という印をつけてもらい、注意事項の説明を受けた。写真を撮ってほしい旨を伝えると、「テレビでやっているような記念にのこるような場所はここにはないけど、こんなところで良ければ」とスマートフォンを受け取ってくれた。慣れない手つきでカメラを長押し連写してくれた。夜の散歩の帰り道、隣に流れるうれし涙をふいた。

土日や祝日、夜間といった区役所の開庁時間外に婚姻届を提出した場合、不備ありのため受理不可という結果になり、希望日に入籍できない方々がかなりいると聞いた。確認のため数日経った後、婚姻届受理証明書を発行してもらうことを区役所の方におすすめされていた。このエッセイを書いているのは、その婚姻届受理証明書を横浜市南区役所から発行してもらった日である。私たちは希望どおり、「いい夫婦の日」に入籍できた。その証明書が手元にあるため、タイトルにしてみた。さて、婚姻届提出後、一緒に住むための新居を契約してきた。横浜市南区からさいたま市大宮区へ引越する日が近づいているのである。その準備に追われている中、会誌掲載のエッセイの執筆依頼がやってきたのである。日常のドタバタしているこの勢いを使ってエッセイを書き上げようと思い、引越用段ボールの上にパソコンを置いた。



写真は横浜市南区役所にて、三田にて小野先生に報告してから9時間後のこと（著者は右側）

近況&結婚報告

第9期 OG 松本 実希子
(旧姓：川崎)

小野ゼミの皆さま，ご無沙汰しております。卒業して早3年が経ちました。現在は静岡県の西部，浜松市というところに住んでいます。ご存知の方も多いと思いますが，静岡県は東西に長く，県内でも東部・中部・西部で異なる地域色となっています。女性の性格で言うと，東部の女性は比較のおっとりタイプ，中部の女性は県庁所在地ということもあり都会人としてのプライド意識が高いタイプ，西部の女性は関西の商買気質を受け継ぐ負けん気が強いタイプと言われていました。入行当初はどこの地域出身者であるのかによって「ああ，あなたって〇〇だね」とよく言われていました。男性の方，パートナーが静岡県出身の方ならぜひご参考に！！ちなみに私は沼津出身であり，現在は浜松で仕事をしているので東部と西部のハイブリッドになりつつあります。

社会人としては3年目となり，周囲からの期待にプレッシャーを感じつつも，新たな仕事を任されることで悩みながらも一歩ずつ進んでいくことができている喜びを噛みしめて仕事をしています。入行当初は，個人資産の運用や相続対策を提案する支店担当者でしたが，現在は，個人・法人問わず資産運用・資産承継を専門とする浜松地区を管轄するエリア担当を任されています。浜松という地区は，日本を代表する企業が集まっており，多数の金融機関がせめぎ合っている状態です。そのため，顧客自身の金融知識もレベルが高く，自分の提案を選択してもらうためには，自分自身の提案能力を高める必要があり，資格取得や自己啓発に勤しむ毎日です。ただ，どんなに勉強しようとも，どれだけ資格を取得しようとも，お客様の意向を汲みとれていない提案は無意味であることを学んできました。また，1つの案件についても，チームで成約することの意義や快感を味わっています。小野ゼミで培ってきた課題発掘能力・課題解決能力の重要性を改めて実感するとともに，組織としての苦しみや喜びを日々感じています。



さて，プライベートについてですが，

ご主人と先輩のご子息と（著者は左側）



同期の朴さん（左端）宅にて女子会（著者は中央）

昨年秋に会社の同期の方と入籍しまして、今年の6月に挙式を迎える予定です。現在主人は、神奈川県藤沢市に住んでいるため、新婚早々別居しています。会社の制度で、ゆくゆくは主人と住めるように異動が発令される予定なのですが、いつになることやら…今流行り(?)の週末婚です。少しでも奥さん気分を味わうために、最近は仕事帰りにスーパーへ寄って野菜を買って帰るようにしています。今年の目標は、食材は買うだけでなく、しっかりと料理をして使い切るようにしていくことです。

小野ゼミ9期へ結婚報告を行った際は、皆からの祝福が嬉しかったです。卒業しても連絡を取り合える仲間がいることは、私の財産だと思います。ゼミの同期も結婚報告がちらほら始まったようなので、同期会が今後頻繁に開催されることを楽しみにしています。



第9期久々の集合（著者は中央）

第 12 期生 卒業エッセイ

“小野ゼミ生” になるために

第 12 期 荒井 礼

卒業エッセイを書こうとパソコンに向かうといつも、ワードファイルを閉じ、過去の会誌を何冊分も読み漁ってしまう。先輩方のエッセイは、時間を忘れて読むことに没頭させ、感動させる。そして、必ず自分にこう考えさせる。「自分は、偉大な先輩方のような、“小野ゼミ生” になれたのだろうか」。

思えば、自分が小野ゼミで頑張る原動力は、常にこの問いから生まれていた。2 年生のとき、何気なく立ち寄ったオープンゼミで繰り広げられる先輩方のディベートを見て、鳥肌を立てて感動した記憶は今でも忘れない。そのときから、“小野ゼミ生” になりたいという気持ちは始まっていた。

入ゼミ試験で、「君を小野ゼミに入れるメリットが分からない」。こう先生に言われつつも、なんとか形だけ“オノゼミ生” になった私だが、入会して早々に大きな失敗をした。周りに認められようと立候補した KUBIC で、良い案が思いつかないばかりか、ハウレンソウもろくに出来ず、先生をはじめ、多くの人に迷惑をかけたのである。自分なりに心身を削って努力したにもかかわらず、結果に結びつかなかったことが、悔しくてたまらなかった。

私が 2 年生の頃から抱いている“小野ゼミ生” のイメージは、堂々としていて、頭がキレッキレで、どんな困難にも果敢に挑戦する、一言で言えば、カッコいい存在である。少しでも“小野ゼミ生” に近づけるようにと、KUBIC 後は、目の前のことを一つひとつ頑張った。海外の学会で発表する先輩たちをカッコいいと思えば、英論チームを希望し、海外で発表した。ディベートのまとめがカッコいいと思えば、オープンゼミのディベートにてまとめに挑んだ。卒論で商学会賞を取ることがカッコいいと思えば、商学会賞の投稿にこぎつけた。

しかし、まだまだ自分は、“オノゼミ生” である。なぜなら、英論、ディベート、商学会賞、どの活動においても多くの先輩方や同期、そしてなにより小野先生の御助力に依存しているからである。それに加えて、未だ、13 期生や、オープンゼミにきた 2 年生に、私が先輩から受けたような、心を動かす何かをきつと見せてあげられていないからである。たぶん、小野ゼミに所属している間は、“小野ゼミ生” のようなカッコいい存在にはなれないかもしれない。けれども、この 2 年間で、「こういう人でありたい」という理想像は、私の中で明確にすることができた。来年からは、小野ゼミが与えてくれた理想像に一步でも近づけるように邁進し、いつしか OBOG 会や OBOG 会誌で、「この先輩、さすが“小野ゼミ生” だわ。」と思ってもらえるような社会人になりたい。いや、ならなければならない。未来の小野ゼミを担う後輩のためにも。

失敗なくして成長なし！

第12期 芦澤 友也

「商学部で一番成長できるゼミ」。いかにも宗教じみたこのキャッチフレーズを、当時2年生だった私は、小野ゼミだけでなく、他の商学部ゼミからも幾度となく耳にした。はじめは、敬遠していたが、「人間的に成長したい。絶対的な自信をつけたい」という、今思うとかなり浅はかな志望理由で、小野ゼミの門戸を叩いた。結果的に、小野先生や大学院生の方々、第11期の先輩方のご厚意によって、入会を果たせたことに対しては、今でも感謝してもしきれない。

活動量が多く、求められる水準が高いのが小野ゼミである。当時入会したての私は、諸々の活動を通じて、自然と成長するだろう、そして成長した先に、成功体験があり、それを積み重ねることによって自信がつくのだ。そう思っていた。しかし、小野ゼミでの活動を2年間経験したからこそ、分かることがある。それは、失敗を経験し、失敗から教訓を学ばなければ、大きな成長は果たせないということである。

私が小野ゼミで最も失敗し、最も成長を実感した経験は、卒業論文の執筆活動である。卒論は、孤独の戦いである。つい最近まではそう思っていた。私は最初にテーマを発表する機会において、たまたま仮説の好感触を得た。しかしながら、論文の方向性は発表当初のものとはしだいに異なっていき、読んだ既存研究はいずれも難解、やっとの思いで読み進めても論理的な穴が見つからず、私は長い間途方に暮れた。そうして気がつくと、すでに卒論の締切間際。私は泣きながら先生に相談し、無理を言って、期限を延期して頂いた。それからは、先生や大学院生の方々、同期に並々ならぬご助力を賜り、論文の方向性から見つめ直し、かなりのペースで書き進め、今では卒論を完成に近い水準にまで持ってくる事ができた。私は、この卒論の執筆活動における諸々の失敗を通じて、大別して2つの教訓を学んだ。1つは、偶然うまくいったとしても、常に先を見据え、場合によっては、柔軟に方向を転換する必要があるという教訓、もう1つは、板挟みで身動きが取れなくなったときには、周りの人を積極的に頼る必要があるという教訓である。

最後に、私が大好きなアニメ作品である『Steins; Gate』の最終話で、主人公である岡部倫太郎が言ったセリフを一部改変して、2年前の自分にこう言いたい。

「がんばれよ。これから始まるのは人生で一番長く、一番大切な2年間だ。」



全員揃って卒論提出遅滞を先生に謝罪する
第12期広報チーム（著者は左から2番目）

2年間で振り返って／後輩たちへ

第12期 羽佐田 智也

◆2年間で振り返って

4年生になってから、サークルのある後輩をメディアでしばしば見かける。彼は、1人黙々と勉強しており、いつまで経っても帰らない。聞くところによると、統計の知識を身につけたいとのことであった。ゼミに所属せず、たった1人で遅くまで統計のテキストに向き合う彼を見ると再認識する。私が、途轍もなく恵まれた環境にいるということ。小野ゼミには、アドバイスをくださる先輩・大学院生がみえる。くだらない話から、真剣な話、勉強の話など様々な側面から高めあえる同期がいる。挑戦心に溢れた後輩たちがいる。そして、指導熱心で、人間的にも本当に尊敬できる小野先生がいらっしゃる。そんな素晴らしい環境に2年間所属できたという幸せを噛みしめつつ、ゼミ生、小野先生、小野先生やゼミ生からなる小野ゼミという環境そのものに、この場を借りて感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

その反面、自分には、その素晴らしい環境を生かしきれなかったという後悔がある。小野ゼミには、挑戦の機会が無数に存在する。小野ゼミに過去の実績、小野先生のご活躍がなければ、機会すら得られないであろうことも多く、そんな機会を得ることは、小野ゼミ生ならではの特権であると言える。しかし、小野ゼミに在って挑戦に尻込みすることの愚かさに気付けたのは4年生になってからであった。秋学期になってから、KSMSや商学会賞に挑戦したが、今振り返ってみれば、もっと色々挑戦すればよかったという後悔が拭えない。余談だが、挑戦することの重要性に気付けたのは13期諸君のおかげである。ありがとう。

◆後輩たちへ

私は後輩である13期から多くのことを教わった。卒業するにあたり、そんな13期にメッセージを残したいと思う。一言でいうと、「みんなが最高のパフォーマンスをするためにはどうしたらいいか？」を常に考えてほしいということである。チームで活動することが多い小野ゼミでは、チームの活動が捗らず、イライラすることがあるだろう。そんな時、自分たち（あるいはチームの誰か）の能力が低いのだと考えるのではなく、何らかの理由で、自分たち本来の力が発揮できていないのではないかと是非考えてみてほしい。チーム内の人間関係が悪いのかもしれない。グル学という環境が悪いのかもしれない。息抜きが足りないのかもしれない。つまり、チームメンバーのパフォーマンスを低下させている何らかの条件があるのではないかとこの視点を持ってほしいのである。そして、それらの条件を改善するように周囲に働きかけ、行動してほしい。何かを変えることはできるだろう。これは、チームのリーダーのみならず、全員が意識してほしい。14期を迎えた来期の小野ゼミが、今以上に素晴らしいゼミになることを願ってやまない。

変わらない癖

第12期 林 英里香

私には、昔から変わらないある癖がある。それは、なにかと自ら大変な道を選んでしまうことである。周りの友達が遊んでいる中、ピアノに打ち込み、中学受験を選択した幼少期。また、大学受験のために8割の部員が部活をやめていく中、疲れ切った練習後に毎日塾に直行して11時頃まで勉強した高校時代。そろそろ懲りるかと思いきや、なんと、ゼミ選びの際にもその癖が発揮されてしまったのである。

しかし、私はこの厄介な癖が嫌いになれない。それは、現在に至るまでに、この癖が、私にどんなに多くの学びを提供してくれて、私の人生を豊かにしてくれたのかを知っているからである。そして、この癖が発揮されて入会した小野ゼミも、また、私に教えきれないほどの学びをもたらしてくれた。思い返せば、小野ゼミで過ごしたこの2年の間には、とび上がりそうなほど嬉しいことも、消えてなくなりたいほど辛いこともあった。特に、四分野インゼミ論文活動は思い出深い。何夜にもわたって作業をし続け、ゼミで発表するたびに落ち込む日々。そして、挙句の果てには先生をはじめとして院生の方々や先輩、同期という多くの人々に多大な迷惑をかけてしまった。人生において、こんなにも自分の能力不足を痛感させられ、本当にいたたまれない日々を過ごしたことはなかった。しかし、この経験を通して、自分はまだまだ成長することができるし、しなければならぬと考えることができるようになった。

そして、この険しい道に彩を与えてくれた同期と正しい道を指南して下さった先生の存在が、ゼミでの2年間を私の人生においてかけがえのないものにしてくれた。2年間、嬉しいことも辛いことも一緒に経験した同期は、個性豊かで、癖があって、みんなで語りだすと一人ひとりに面白いエピソードが付きにくい。みんなで議論と練習を重ねて勝利したディベート、力をふりしぼって何十回もの発表練習を重ねて成功することができた四分野インゼミ研究報告会、OBさんと先輩、外務3人組で力を合わせて企画したOBOG会等、一つひとつの出来事に詰まった同期との思い出は、私の宝物である。そして、こんな私を入会させて下さった小野先生には、感謝してもしきれない。どうしようもない論文チームに対しても見捨てず、真夜中にも関わらず一緒に奮闘して下さい、私が緊張しながら先生相談に行き、未熟な説明をしてしまうのにも関わらず、優しく見守り、正しい道を指南して下さい、生徒想いで温かい先生に出会うことができ、沢山の成長をさせていただいた。そんな先生の元で学べたことが、私にとって、本当に幸せだった。

最後に、いよいよ4月からは、新しい生活が始まるが、多分また、懲りずに忙しい日々を送ることになるだろうという予感しかしていない。しかし、不安より期待が大きいのは、間違いなく小野ゼミで培った様々な経験が私の血肉となっているからであろう。小野ゼミという選択によって、より好きになってしまったこの癖と、しばらくの間は、また、付き合っていこうと思う。

主体性

第12期 平嶋 健也

私が小野ゼミに入ったのは、論理的思考力やプレゼン力といった『伝える力』を磨くためでした。実際に、数多くのレポート執筆や論文執筆、KSMSやSMAなどの海外学会でのプレゼンテーションを通じて、『伝える力』を磨くという私の目的は達成されたと思っています。ただ、小野ゼミでの活動は、その他にも様々な面で私を成長させてくれました。その内の最たる1つが、自ら物事を考えて動く『主体性』です。

小野ゼミに入った当初の私は、いわゆる環境依存型の人間でした。「エグゼミと言われる小野ゼミでの厳しい活動をこなせば成長できるだろう」と、もっと明け透けな言い方をすれば、「上から課されるタスクに耐えてさえいれば（敷かれたレールに乗ってさえいれば）大丈夫だろう」と考えていたのです。このような受動的な考え方の背景には、学校や塾で与えられた教科書や問題集を言われたとおりにやっていたらよかった、受験生時代の経験があったのだと思います。

そんな指示待ち人間の私にとって、3年生の6月末から始まった英語論文執筆活動は、大変厳しいものでした。研究テーマはもちろんのこと、いつ、何を、どのようにして研究を進めるかという具体的な作業プロセスを、自分たちで能動的に考え、実行しなければならなかったからです。英論チームのリーダーだった私は、その厳しさにきっちり向き合い、メンバーに対してチームの指針を示さなければなりません。しかし、それを面倒に思ってしまった指示待ち人間の私は、とりあえず研究に使える論文を集め、メンバー全員で分担して読ませる（難しい論文は自分が担当する）というリーダーっぽい振る舞いをしつつも、心の何処かで「誰かが何とかくれるだろう」という人任せな考えを持ちながら作業してしまっていました。英論チームの進捗が全体的に芳しくなかったのは、私が自ら物事を考えることから逃げ、自分自身でレールを作ろうとしていなかったからだ、と思い至ったのは、3年生の終わり頃でした。

4年生になってからは、明確な指針のない問題からも逃げずに、自分自身で考えて取り組もうと意識するようになりました。最終的な目標は何なのか、その目標を達成するためにはどのような作業をすればいいのか、その作業をする上で問題となること・なりそうなことは何か…。これらのことをしっかり意識するようにした結果、SMAへ参加するための英論チームでの諸々の作業は、先を見据えた作業計画と効率的な役割分担の下、3年生の頃よりもずっとスムーズに進み、満足のいく成果を出すことができました。

漠然とした問題や課題に対して取り組むのは、難しく面倒なことです。しかし、そこから逃げずに立ち向かっていけば、自分にとって良い結果を生み出せるということを、小野ゼミで学ぶことができました。これから社会人になって、多くの問題に直面していくと思いますが、自ら物事を考えて行動する『主体性』を持って、邁進して行こうと思います。小野先生、ゼミの皆さん、2年間ありがとうございました！

感謝

第12期 伊藤 大貴

小野ゼミで過ごした三田での2年間は、ものすごく濃く、充実した日々であった。コトラーの書籍を要約した3年生前半。ケーススタディーやディベートを始め、三田祭論文(英語論文)をこなして行った3年生後半。卒業論文に取り組んでいた4年生。これらの行事をこなすことができたのは、自分1人の力ではなく、小野先生を始め、多くの同期から協力を得ることができたおかげだと思う。多くの人に、たくさん迷惑をかけてしまったが、ここで得た経験は、かけがえのない財産になった。

自分は、慶應義塾NY高校を卒業した身であり、大学へエスカレーター式で入れるので、受験をしたことがなく、入学するまでは、サッカーしかしておらず、全くと言っていいくらい勉強をしておかなかった。自分以外の同期は、受験戦争を勝ち進んできたつわものばかりで、当初は勉強内容についていくことが難しく、戸惑う時もあった。しかし、こんな私でも、この小野ゼミは受け入れてくれて、勉強面などでついていけなかった時も親切にご指導してくださった小野先生や同期のみんなには本当に感謝している。小野ゼミに入れたことを誇りに思い、さらに、小野先生のような生徒思いの先生の下で勉強できたことを誇りに思っている。

それでは、この場をお借りして、同期の中でも特にお世話になった英論メンバーにコメントを残したいと思う。【平嶋】英論代表お疲れさま！ 帰省とかで、何度か集まりに参加できなくてごめんね。いつもクールな平嶋だけど、時に可愛い一面を見せてくれるね。三田祭パネルがなかなか完成しなくて、梶田の家でオールしたね。その時、みんな疲労がたまって、雰囲気が悪かったけど、平嶋が、お風呂場で歌を歌っていて、平嶋の意外な一面を見ることができて、みんな笑顔になったよ。また、アメリカ行きの入国審査でこずって、少しでも強く見せるようになってサングラス買ったね。かわいかったよ！ 【荒井】荒井は、英論やKUBICの時に同じ時間を過ごしたね。3年生の時、自分の家に何度も泊まりに来て、サッカーの試合見たね。論文が進んで行くにつれ、内容が難しくなって、チーム内でなかなか発言できなかった自分に優しく声を掛けてくれて、本当にありがとう！ 荒井がいたから、英論チームで、楽しい時間を過ごせたと思う！ 【梶田】梶田は、自分が今まで出会ってきた中で1番熱い男！ **Change the world** というメールアドレスから、梶田の人柄を知らない人は、“こいつ何言ってるの？”と思う人もいるだろうけど、梶田は、彼自身が掲げている夢を有言実行するため、本気で頑張っている。その姿を見ると、本当に尊敬するよ！

改めて、小野ゼミでの2年間は、とても充実していた。色々な価値観を持っている個性的な同期と過ごすことによって視野が広くなり、2年間で大きく成長できたように思う。小野先生をはじめ、ゼミ生みんなに、心の底から感謝しています。

泣き虫ゼミ長

第12期 梶田 伸吾

正直に言おう。僕は泣き虫だ。小野ゼミでの活動の中で、僕は3度も泣いた。1回目。所属していた英論チームの論文が三田祭までに完成せず、その直後には韓国での学会発表が迫る中で、論文執筆を断念し、発表準備だけに集中せざるを得なかった時。チーム内での自分の無力さが、どうしようもなく悔しかった。2回目。後輩が出場するインカレディベート大会前日の本ゼミで、先生とゼミ生の間で意見の相違が生じる中で、ゼミ長として何もできなかった時。「繋ぐ」という、ゼミ長として最重要の仕事を全うできない自分に腹立たしさを感じ、帰り道で1人、道端に座り込み悔し涙を流した。そして、3回目。就職活動中、総合商社勤務の先輩社員の方へのOB訪問で大きな失敗を犯した僕のために、小野先生がその方へ送って下さった手紙を拝読した時。手紙には、僕が自己分析をする上で忘れていた数々のエピソードが、心のこもった温かい言葉で綴られていた。三田キャンパス前のラーメン屋で先生と2人、味噌ラーメンをすすりながら、バレないように必死に隠しながらも、僕の目は涙で一杯だった。一ゼミ生である僕のことを、これほどまでに温かく見守って下さる先生の優しさに心から感銘を受けた。

同期の皆へ。何もできない僕のことを、ゼミ長と呼んでくれて、そして支えてくれてありがとう。「幸福が現実となるのは、それを誰かと分かち合った時」。これは、映画「Into the Wild」の主人公 Christopher McCandless が、アラスカの広大な荒野をたった1人で旅し、自然の厳しさと想像を絶する孤独感に襲われながら死にゆく時に残した言葉である。僕は、この言葉に初めて出会った時、真っ先に第12期の皆のことを思い浮かべた。これまで、本当に色々なことがあった。嬉しいことも楽しいことも、苦しいこと悲しいことも。それにしても、本当に不思議だ。あんなに苦しかった思い出すら、今となってはまるで宝石みたいに輝いているのだから。

小野先生へ。先生は、「海外渡航のため入ゼミ試験を受けられない、でも小野ゼミには絶対に入りたい」と主張する、わがままでどうしようもなかった僕を、特別に拾って下さりました。そして、そんな落ちこぼれの僕に、ゼミ長という役職を与えて下さり、先生の一番近くで多くのことを学ばせて下さいました。先生、どうか約束させて下さい。何度もお話した「途上国の未来を変える」という夢を必ずや実現してみせます。先生に教えて頂いた「人の心を動かす誠意」という僕の強みを存分に発揮しながら、絶対に。これから、どんな国でどんなビジネスをするか、僕自身も全く見当が付きません。しかし、先生から教わったことは絶対に忘れません。

と、書きながらもまた泣いてしまった。小野ゼミの泣き虫ゼミ長とは、そう、僕のことだ。

自分を肯定すること

第12期 上谷 崇人

小野ゼミに入って一番変わったことは、自分のことを嫌いになったことだ。小野ゼミに入ってから、何度も同期や先輩方に迷惑をかけた。その度に自分のことを嫌いになったし、正直今でも嫌いだ。大嫌いだ。嫌いなところを挙げようとすればキリがない。

その一方で、小野ゼミに入らなかつたら気がつかなくったことにたくさん気がつくことができたと思っている。自分の嫌いなところにたくさん気がつくことができた。なにより、ただ日常をだらだら過ごすだけであった日吉時代には出会えなかつたような、尊敬できる同期、先輩、後輩、そして先生に出会うことができた。何事にも全力で取り組む姿勢をみて何度も本気で尊敬の念を抱いた。私はかけがいのないものをたしかにこのゼミで得たのだ。

昔、人は1秒後、3か月後、5年後に変わることができるとだれかが言っていた。小野ゼミに入って私は、変わることができたのだろうか。変わろうと試みたことは何度もあったが実際に変わることができたのか。それは定かではない。

小野ゼミにおいて、何度も失敗してきたけれども、少なくとも後退したことはなかつた。入ゼミ試験を受け、散々であったものなんとかひろってもらい、小野ゼミという機会に飛び込んで、そこでの私の活動は他の人から見ればたいしたことではないかもしれない。はたから見れば私の選択は失敗だったのではないかとされるかもしれない。

でも、それを決めるのは他人ではない。今の自分とこれからの自分だ。これからの自分だけが過去の自分の選択や行動が本当に正しいことであつたと証明し、肯定することができるのだ。それは1秒後かもしれないし、3か月後かもしれないし、5年後かもしれないし、もっとずっとずっと先かもしれない。とにかく、今この瞬間ごとに変わり続けることで、今は大嫌いな自分を肯定してあげられるようになりたい。小野ゼミで経験したすべてのことは、当然入らなかつたら経験できなかつたことだし、経験できてよかったと思っている。

このエッセイを書いている今は、小野ゼミに入ってよかったと思っている。小野ゼミに入る前の自分とは違う自分であるという実感はある。到底満足はしていないが、その意味では小野ゼミに入るという選択をした過去の自分は肯定できているのではないだろうか。

末筆になつたが、小野ゼミに関わるすべてのみなさんに心から感謝の意を示したい。先生も同期も、後輩も先輩も、私がどんなに迷惑をかけても、私のことを最後まで見捨てなかつた。本当にお世話になりました。これからもどうかよろしく願いいたします。

泣くこと

第12期 岸部 海人

自分にしてはよく泣いたなー、なんてことを最近ではよく思う。自慢ではないが、私は中高6年間において、1度たりとも泣いたことがなかった。特に部活の引退公演では、同期で自分だけ泣かず、空気が読めなくて申し訳ありません的な感じになっていたほど、泣くこととは縁がない人間であった。そんな自分が、この2年にも満たないゼミ生活において3回も涙を流すことになるとは夢にも思わなかった。案外泣くのも悪くないものだ。なんとなく脱皮して一回り大きくなったような気分になれる。

調べてみると、涙とは感情が高まった時に流れるものであるらしい。何事にも全力で取り組む小野ゼミは、嬉しさや悲しさ、その他もろもろの感情もまた格別であるため、もしかしたら泣くこととは割かし縁のあるゼミなのかもしれない。例えば、三田論を執筆するにあたっては、チーム一同非常に辛い日々を過ごしてきたし、そんな日々を乗り越えて書き上げた論文が市場創造研究に掲載されているのを見た時には、みんなで心から喜んだものだ。また、自分は卒論が終わらず多大な迷惑をかけてしまう中で、思わず号泣してしまうほどの惨めさや情けなさを味わったが、その分合格を頂けた際には途方もない達成感を味わえることであろう。



祝！市場創造研究掲載（著者は左端）

そんな小野ゼミを私が志望したのは、特に秀でた才能があるわけでもなく、かといって、特になにか努力しているわけでもない自分に対する漠然とした危機感を紛れさせなかったからであった。とりあえずエグゼミ入ってエグっておくか、そんな軽い気持ちで入ったので、まさか20歳を超えた成人が時に涙を流すほどの濃密な時間が待ち受けているとは正直思っていなかった。辛かったり悲しかったり情けなかったりと毎回異なる理由で涙を流してきて、その都度泣いている自分がかっこ悪いなんてことも考えたが、そんなことよりも、これまでの一步引いたスタンスに身をおいて、泣けるほどなにかを頑張っただけでこなかったこれまでの自分の方がよっぽどかっこ悪い、そう考えられるようになった。自分にとっては大きな変化である。

今年の4月から私は晴れて社会人になる。世の中のことをもっと知りたいような気がするという軽い気持ちで受けて内定を頂いた証券会社では、おそらく自分が小野ゼミでそうであったように、多く想定外のことが待ち受けていることであろう。しかし、やることは小野ゼミと変わらない。悔し泣きでも嬉し泣きでもいい。中途半端な気持ちではなく、泣けるほど一生懸命になってやっていくことが当面の目標である。そして、気づいたら立派な社会人になっていたら幸いだし、それこそが、これまでお世話になった小野先生や大学院生などにできる最大の恩返しであり、散々お世話になった自分に課せられた義務なのであろう。

無力な私からの次回予告！？

第12期 北島 大輝

小野晃典研究会に入るまで、私は、慶應義塾大学の多くの学生が少なくとも思っているであろうとおり、自分は有能な人間であると思っていました。それなりに勉強は出来ていましたし、ダメ出しというものをあまりされてこなかった人生を送っていました。

このように、自分に対する自信のせいか、入る研究会はエグイところと決めていました。自分であれば、どの環境下でもうまくやれるという確信に基づいた上での判断です。そういうわけで、小野晃典研究会が必然的に考慮集合に入り、小野晃典研究会の門を叩きました。

しかし、小野晃典研究会での1年目は、私の想像とは異なるものでした。エグイの度合いは想定していたとおりですが、どの環境下でもうまくやれるという確信が全くの過信であったというぐらいに、己の無力を痛感させられる日々でした。その最たる出来事として、初めて取り組んだケースの発表と三田祭論文での執筆活動が挙げられます。前者では、緊張のせいか手が震えてしまい、めちゃくちゃな日本語を話していました。発表に対するフィードバックは、資料に対するダメ出しや論理性の無さに対するダメ出しが主でした。そして、後者では、執筆した論文に対する先生からの赤字による指摘が物凄く、先生から「君は日本人なのか？」と言われるほどでした。執筆に際して、小野晃典先生をはじめ、大学院生および11期の先輩らには多大なる迷惑をかけてしまいました。

しかし、このような出来事があったからこそ、自身を変えなければならぬと奮闘し、成長を実感できるようになったのは間違いありません。その最たる出来事として、慶應義塾大学商学部4分野インゼミでの発表と卒業論文の執筆が挙げられます。前者では、動画で自身の発表を撮影したりするなどして練習をしました。その結果、本番では、緊張は少なからずしていたものの、原稿を見ずに整った日本語で発表できるようになりました。そして、後者では、主語と述語の一致、接続詞の用い方をはじめとする様々なことを考慮して、読み手を意識した文章を書こうと努めるようにしました。その結果、本文それ自体の執筆において特段困ったことはありませんでした。

最たる出来事をはじめとする小野晃典研究会での2年間は、私を大きく変化させてくれました。お分りのとおり、その変化とは、冒頭で述べたような勘違い甚だしい人間から、己の無力を痛感するが故に成長に対して意欲的である人間への変化です。今やっと、社会に出る下地が整ったと確信しています。この春から、私は某総合電機メーカーへ入社しますが、そこでも、多くの無力をきっと痛感することでしょう。しかし、その都度、成長に対して意欲的でありたいと強く思っています。次回お会いする時（少なくとも来年のOB・OG会までには！なお、配属される地域によっては、つるのやなどの居酒屋で開かれるゼミの飲み会に襲撃するつもりなので悪しからず！）には、小野晃典先生や大学院生、OB・OGをはじめとする先輩ら、同期である12期の皆、後輩である13期の皆に少しでも成長した姿を見せることを約束します。「うう、ご期待！」ということで、卒業セッセイを締めさせていただきます。

ジェットコースターの楽しみ方

第12期 松山 峻典

私は多くの人から「お前は自由な時間がない」という趣旨の言葉を頂きました。ゼミでの私の、入ゼミ後はじめての集まりの後に同期の談笑の輪に混ざらず別室で小野先生に電話を掛ける姿（第11期ゼミ長の内藤さんが傍にいてくださり心強かったです）、法科大学院棟の外で警備員の目を盗みつつ他の三田論チームの謝罪メールを寒空の下独りで代筆する姿（日付が変わる直前に見つかって酷くお叱りを受けました）、同期の卒論を徹夜で執筆し早朝東京駅に提出に行く姿（厳密な徹夜はこれが初めてでした）など、他にも思い当たる節はありますが、このような姿を見て、みなさんそう感じたのではないのでしょうか。確かに、私は人一倍時間も精神もゼミに賭し、三大欲求に勝るとも劣らない水準でゼミを優先しておりましたが、自由でなかったかというところというわけではありませんでした。なぜなら、私の考える自由とは、「自分の考えに基づいて行動を自主的に選択すること」だからです。ともすれば自由がないように映り誤解されるかもしれないゼミでの姿は、すべて私が望んだものでした。それゆえゼミでの私は、誰よりも自由でした。

さて、詭弁すれすれの私の独白を読みおわり、そろそろ「タイトルのジェットコースターと何の関係あるんだ？」という疑問を抱かれている頃ではないでしょうか。何の捻りもありませんが、ジェットコースターは小野ゼミのことを指しております。小野ゼミでの密度の濃い時間があつという間に過ぎ去ってしまう点に加え、ゼミに入る前に抱いていた高揚感が厳しい体験によって頭から消え去り、早く終わってほしいと願ったり、入ってしまったことを後悔したり、辛いことに目を瞑ったりする点も、ジェットコースターと似ているのではないかと思います。そんな2年間乗りっぱなしの小野ゼミジェットコースターですが、体験している際に、たとえ某ネズミ帝国に遊びに来た女子高生よろしく、何も考えずに起伏に一喜一憂して奇声をあげているような状態であったとしても、最後まで体験しきりさえすれば、必ず他では得難い何かを体験者にもたらしめます。もちろん、それだけでも十分貴重な体験といって差し支えないのですが、今後体験する誰かのために、この体験をより良い物にする方法を書き残したいと思います。それは、ジェットコースターが駆け抜けていく際に、瞑っていた目を開く勇気を持つこと、すなわち、辛く忙しいゼミ生活の中であって、主体性を失わずにいつまでも自由でいることです。なぜなら、自由でなくなり、ゼミをやらされていると認識すると、楽しいはずのジェットコースターが途端に苦行へと転じてしまうからです。そのため、小野ゼミジェットコースターを誰よりも自由に、そして誰よりも楽しむことができた私は、きっと誰よりも少ない辛さで、誰よりも多くの他では得難い何かを得ることができたと確信しております。

最後に、このような一生に一度しか乗れない素敵な小野ゼミジェットコースターに携わってくださったすべての皆様に、ここで感謝を表し、まとまりのないエッセイの結びに変えさせて頂きたいと思います。

春

第12期 中原 裕人

春。私が一番大好きな季節。暖かな陽気と和やかな風に包まれながら、私たち人間は今までの環境に別れを告げ、新たな世界へと一步を踏み出していく。この名状しがたいワクワク感とか、ドキドキ感とか、湧き出る熱量とか、そういうもの全てを引くくめて、私は春という季節が大好きだし、この季節の虜になった。

2年前、20度目の春。期待に胸を躍らせ、私は小野晃典研究会に入会した。この春からの1年は、というと、とにかくハードであった。まず、入会当初から迫り来る課題の山、山、山。山を越えたと思いきや、次に立ちほだかるのは、終わりの見えないグループワーク。さらに、一息つく間も与えないと言わんばかりに襲いかかってくる入ゼミ活動。この文章だけ読むと、「なんだ、君は小野ゼミが嫌だったのか？」なんて聞かれてしまいそうだが、実はそんなことは全くない。むしろ心地よさすら感じていた。「たくさんエグって、大きく成長したい！」という確固たる意志（世間ではドMとも言う）を心に宿して入会した中原少年にとって、積み重なるタスクはむしろ熱い思いを加速させるための燃料みたいなものであったからだ。そして、自分で言うのはおこがましいところもあるが、現に成長することもできた。今2年前の自分に一言述べることができるならば、小野ゼミに入会するという英断を下した自分をひたすら褒めるであろう。

1年前、21度目の春。頼りにしていた先輩たちと別れ、そして、目を輝かせた可愛い後輩たちに出会う。この春は、いつもとは少し違う春になった。例年通りならば、私はすかさず「自分が期待に胸が躍るかどうか」という主観的な考えばかりをしていたことであろう。しかし、この春、「他人が期待に胸が躍るかどうか」という客観的な考えを初めて持った。具体的に述べると、自分が小野ゼミに入会したいと思うきっかけになったかっこいい先輩像に、自分も近づくことができたのか、ということである。今まで考えることのなかった新しい観点から物事を考えるようになった自分にふと気づき、スキルや知識面以外にも私を成長させてくれた小野ゼミには本当に頭が上がらないな、とそんなことを思ったのであった。

そして、ついに22度目の春がやってくる。2年間という短い時間であったはずなのに、今までのどんな経験より濃度の高すぎた小野ゼミ、そして、学生生活と別れを告げるときだ。もしかすると、社会人というマンネリ化した環境の中で長年を過ごしていくと、小野ゼミに入会したときのような熱い思いを持つような春や、新しい発見をするような春は少なくなるのかもしれない。しかし、私が大好きな春を無為に過ごしてしまいそうになっているときは、高い目標を掲げた20度目の春や、新たな気づきを得た21度目の春のような最高の春について綴った、このエッセイが私をあるべき方向に導いてくれるであろう、とそんな希望的観測をしながら、筆を置くことにしよう。

仲間

第12期 中野 真衣

「ゼミの皆が好きだから、本当はゼミを辞めたくないです…。でも、どうしても卒論を書きたくないの
ゼミを辞めます…。」2015年6月、12期の前で泣きながらこう告白した私が、今、同期の中で最も早く完
成した卒論の横で卒業エッセイを書いているなんて、本当に信じられない。冒頭の言葉を同期に伝えた当
時、私は、小野ゼミに入る際に掲げた「学問において、何か1つのことに全力を尽くし、誇れるものをつ
くりたい」という目標を、関マケをやり遂げたことで達成した気になっていたため、卒論を執筆する理由
を見失っていたのであった。しかし小野ゼミの皆は、小野ゼミを去ろうとする私を文字通り、必死に引き
止めてくれた。特に、12期ゼミ長の梶田君、大学院生の菊盛さん、そして小野先生から、有り難いお言葉
を頂いた。この場をお借りして、それらのエピソードを紹介し、感謝の意を表したいと思う。

梶田君は、日吉駅の改札前で、「俺は中野さんのことを、12期の大事な仲間だと思っている。だから一緒
に卒論を書いて、最後まで仲間だと思わせてほしい。」と粘り強く私を説得してくれた。この言葉を聞いた
当初、正直に言うと、「仲間」という陳腐な表現に辟易とした（梶田君ごめんね（笑））。しかし、なんとなく
梶田君の言葉が心にひっかかったまま、数日後、授業を受けに三田キャンパスに向かうと、猛烈に12期
に会いたい、と感じている自分がいた。その時、仲間というのは、こんな風に理由もなく会いたいと思え
る人たちのことで、自分にとっての仲間は、確実に小野ゼミ12期である、と気が付いたのであった。

また、菊盛さんは、つるのやのトイレの前で、「真衣ちゃんのためなら卒論の1本でも2本でも手伝うか
ら、ゼミを辞めないでよ！一緒に頑張ろうよ！」と抱きしめながら一喝して下さった。この言葉を聞いて、
去年、先輩方が、どれだけ多くの犠牲を払って関マケをご助力して下さいたのかを思い出した。達成した
と思っていた先述した小野ゼミでの目標は、実際は多くのご助力の上に成り立っている虚像のようなもの
で、このままではお世話になった先輩方に合わせる顔がない、と我に返った。

そして、小野先生は、私が無礼にも卒論を書きたくないという旨を打ち明けたとき、笑顔で、「それで君
が後悔しないなら、いいんじゃない？」と仰って下さいました。予想外の優しいお言葉に、私は涙が止ま
りませんでした。私はこの言葉のおかげで、強制的に卒論を書くのではなく、卒論を書く意味を探し直し
て、自分の意志で卒論を書き進めることができました。本当にありがとうございました。

12期は何をやっても上手くいかない代で、先輩には怒られてばかりいて、後輩の13期の方がよっぽど
優秀だった。しかし、いざというときに一丸となって困難に立ち向かうことのできる団結力の強さは、ど
の代にも負けないであろう。そんな素晴らしい仲間に出会えて、共に小野ゼミを卒業できたということこ
そが、今となっては私の誇りである。みんな、今まで本当にありがとう。楽しかったよ。また会おうね！

小野ゼミという虎の穴

第 12 期 小野寺 隆志

小野ゼミでの 2 年間は、自分なりに覚悟を持って入会したが、まさに猛虎が控える「虎の穴」に裸一貫で放り込まれたようなものであった。それは、コトラーや SAS のレポートばかり、タスクの多さばかりでいえるであろう。しかし、この「虎の穴」にただ私 1 人だけで放り込まれたわけではなかった。例えば三田祭論文の執筆にあたって、論文代表であった平塚君、林さん、北島君、そして上谷君を含む同期が、特に直前期、それこそトラウマになるほど学校前のガストに籠って苦学を共にしてくれたからこそ、初めての論文をなんとか完成させることができたように思う。また、卒業論文では、恥ずかしながら荒井君や平嶋君、そして羽佐田君は自分の卒業論文が完成していたにもかかわらず、とても温かく手伝ってくれたからこそ本当に感謝に堪えない。



インゼミ後の懇親会にて（著者は前列右）

このような活動を振り返ると他のゼミでは到底手に入ってはいなかったであろう「猛虎の対処方法」が自然と身についていた。加えて、このような厳しい活動を共に重ねてきたからこそ、一生付き合っていきたいと思える温かい同期というかけがえのない「虎子」を手に入れることができたように思う。そしてこの 2 年間でなんとか乗り越えることができたのは、様々な方のご尽力を頂いたからに他ならない。第 11 期生の先輩方には、礼儀作法すらあまり弁えていなかった私たちを、とても熱く、時には寝る間を惜しんでご指導頂きました。誠にありがとうございました。大学院生の方々には、最後の最後まで未熟な私を見捨てずにご指導して下さいましたこと、本当に感謝しています。そして特に小野先生には、いつも「虎の穴」の暗闇にいて行先も覚束なかった私に常に手取り足取り教えて下さり、私を正しい道へと導いて下さったこと、本当に感謝しています。

また、後輩である第 13 期生と出会えたことも私にとって、本当に貴重な出会いだったように思う。それは、第 11 期生の方々から私が頂いた熱烈なご指導・アドバイスには及ばないものの、1 人の先輩として後輩に何ができるのかを必死で考え抜き、その考えをどう伝えれば良いのかという経験をくれたことに尽きると言えるであろう。

これからは、小野ゼミで得た「虎子」と過ごした日々を忘れずに、また小野ゼミで得た経験を活かしながら小野ゼミ以上に厳しいと思われる「虎の穴」である社会人生活を歩んでいきたいと思う。

「変心」と「成長」

第12期 佐野 諒平

2015年度の入ゼミ試験後の懇親会で、大学院生の白石さんの近くに座った時、フィードバックの話題が挙がった。「どうして、フィードバックがいい効果をもたらすのか。どういったフィードバックが『良い』フィードバックなのか」といったことへの意見を聞くことができた貴重な機会だった。振り返ってみると、そこでの白石さんの一言が、私の小野ゼミでの生活を変えていったと感じる。白石さんは、「どんなフィードバックでもいいから、フィードバックはするべきだと思う。良いフィードバックなら素晴らしい。けれど、フィードバックに失敗しても、それを反省して、次のフィードバックでは良いフィードバックをするように努力するから、最終的にはプラスになる。」という意見を私に話してくれた。この言葉は、停滞していた私を少しずつ変えていき、成長させてくれた魔法のような言葉である。

3年生の頃、私は失敗してばかりだった。しかも、それを糧に成長することができなかった。インカレディベートの渉外係・三田祭論文の執筆・市場創造研究への投稿など、成長のための舞台はたくさんあった。たくさん失敗したし、自分なりに努力して挽回しようとした。しかし、そんな困難を乗り越えても成長を実感することが出来なかった。「前進なきは後退」といった言葉もあるように、まさに3年生の時の私は、前進していく周りの同期に取り残され、相対的に後退していった。

私は、授業で疑問に思ったことに対して、手を挙げて質問するようなタイプではない。そんな私が、心を入れ替えて、第13期生のプレゼンや同期の卒業論文に対して質問したり、フィードバックをしたりする。その姿勢そのものが、今考えれば、成長の兆しだったのかもしれない。サブゼミ・本ゼミ問わず、毎回発言するようにしていた。発言できなかったときは陰ながら落ち込んだりもした。努力の甲斐あって、後輩の第13期生から、「佐野さん、今日は質問してくれませんでしたね。」と言われるようになり、成長を少しずつ実感していくことができた。また、忘れもしない12月22日、卒論の完成の目途が立ち、そのことをお世話になっていた石井さんに話した時、石井さんから「佐野っちは、今年のMVPだと思うよ。すごく成長した。」という言葉をかけて頂き、内心天にも昇る気持ちになったのを覚えている。自分自身の成長を肯定できず小野ゼミにいていいのかと疑問に感じる時もあった。その疑問は、卒業間近になってようやく「小野ゼミ生」としての自分を認めることができ、周囲にも認めてもらえたと実感することで、解消されたのである。

きっと、私は、これから先も幾度となく停滞するだろう。そんな時、停滞していた1年間と、前進し始めたこの1年間を思い出せば、新たに成長を重ねていくことができるという確信を得ることができる。小野ゼミでの生活は、そんな得難い確信を私にくれた気がする。

大学院生 卒業エッセイ

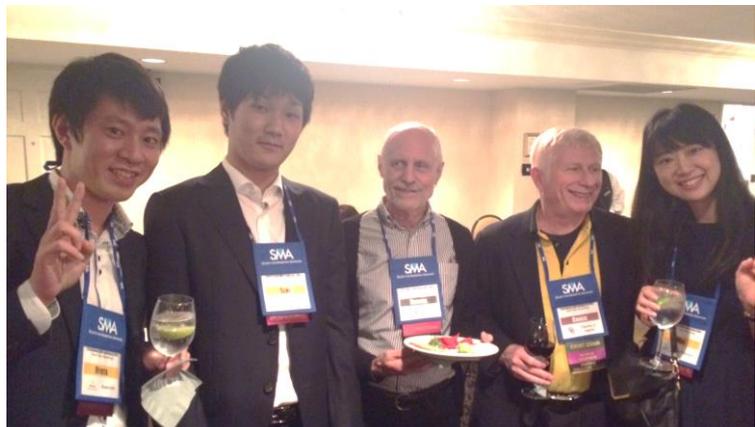
このたびは

第9期大学院生 菊盛 真衣
(第7期OG)

大学院に入学した当時驚いたことの1つに、「師弟関係」があります。学会等で初めてご挨拶をさせていただき先生から「師匠はどなたですか?」とか「誰先生のお弟子さんですか?」と質問されたとき、あるいは、小野先生から「〇〇先生は、△△先生の門下だよ」と聞いたとき、軽い衝撃を受けたのを今でも覚えています。指導教授を師匠、その指導下の学生を弟子、同じ指導教授を持つ弟子同士を同門と呼称する慣習は、歌舞伎や落語のような芸事の世界を彷彿させ、学問の世界もまた伝統的な世界であるということを感じました。さらに驚いたのは、「師弟の縁は続くよ、どこまでも」です。師弟は三世(師弟の縁は前世・現世・来世の3世につながる深い因縁で結ばれている)という言葉もあるように、弟子である私が大学院を卒業し、大学教員としてやっていくことになっても、師弟の間柄は師匠か弟子のどちらかが先に死ぬまで(いわゆる、死が二人を分かたずまで)続くようです。当時はそこまで考えが至っていなかったもので、そのことに気付いたときには、師弟関係のあまりの深遠さに思わず息を呑みました。当然ながら師匠だけでなく、同門の先輩・同輩・後輩とも同じように長きに亘って縁は続いていきます。大学院に入学したことで、血のつながりのない師匠や同門の人たちと、家族や兄弟と同じあるいはそれ以上の深い間柄になるというのだから、たいそう驚きました。

大学院生活での驚きには、他にもコネクティング・ドッツ経験があります。スティーブ・ジョブズの話を持ってくるなんて、意識高っ!と思われそうで嫌なのですが、仕方ないですね。端的に言うには便利な言葉です(言いやすさ重視で「ザ」

は省きました)。コネクティング・ドッツ経験というのは、読んで字の如く点と点が線になる経験です。過去に打った小さな点や打ったことすら忘れた点が、思いも寄らぬきっかけによって突然繋がる瞬間をこれまで幾度も経験してきました。例えば、数年前にあ



マーケティングのレジェンドこと Belk 先生&Ingene 先生と共に
SMA2015@テキサス (著者は右端)

る国際学会で発表するために短めの英語の論文を投稿しましたが、結果は不合格となり、その論文はお蔵入りしました。それが、最近になって別の国際学会への投稿を決心したときに大いに役立ちました。投稿を決心したのは、締切の数時間前で、投稿論文には、かなり短めのページ制限がありました。どの論文を投稿しようと思案したとき、お蔵入りの論文の存在をはっと思い出し、確認すると分量もピッタリ。何とか締切にも間に合うというビックリ仰天な経験をしました（まだ合否結果は出ていないのですが）。こういった類の経験は、挙げれば枚挙に暇がありません。博士課程に進学し、学年が上がるにつれて、点と点がつながり、そこから新しい研究のアイデアが生まれたり、研究発表や出版物への寄稿に結びついたり、はたまた寄稿した論文が表彰されるという有難いサプライズ経験もありました。

しかしながら、点と点がつながり良い結果がもたらされるということはさほど重要ではありません。重要なのは、結果が良かろうと悪かろうと、とにかく点を打ちまくることだと思っています。結果が悪かったとしても、ひとまず打った点が、その時には予測不可能な「まさか、ここで?!」なタイミングで別の点と結びついたりするわけで、好機は一体いつ、どこで巡ってくるかわかりません。常に準備万端な姿勢でそうした機会を迎えられるとは限りません。それでも、とりあえずやってみましょ！と腰を上げ、頭を使うなり、手を動かすなりしてみるわけです。こうして、大学院時代は、常に挑戦、全てにトライな心構えで、点を打ちまくってきました。当然挑戦すればするほど、失敗してつまづくことも増えますが、心折れずにトライあるのみでしょう。ドツティングし続ければ自然にコネクティッドされると信じているので。

さて、今回のタイトルは、「このたびは ^{ぬさ}幣も取りあへず ^{たむけ}手向山 ^{もみち}紅葉の錦 神のまにまに」という百人一首の和歌から持ってきました。歌ったのは菅家、学問の神様である菅原道真です。「今度の旅は急なことで、旅の安全を願って道の神に捧げるお供え物を用意できておりませんが、この手向山の錦織のように美しい紅葉を捧げ物として、どうか神の御心のままにお受け取りください」といった意味になるそうです。来年度の進路についてまだはっきりと決まったわけではないのですが、大学院およびこのゼミを突然巣立つことになるかもしれません。そうした急な巣立ちになったときには、紅葉の錦と言えるほど華やかで美しいものではけれど、これまでの5年間の挑戦の積み重ねを捧げ物として、学問の世界の神様の御心のままに



著者の挑戦を常に応援してくれる7期澤井さんの結婚式にて（著者は後列左端）

お受け取りください、そして、これからの研究者人生を無事に歩いていけるようお守りくださいという今の気持ちを込めてみました。学問の神様だけではなく、もちろん、師匠や同門の人たちにも同じようなお願いの気持ちを抱きながら、次の挑戦を見据えている次第です。

我が学者人生のモデル

第9期大学院生 白石 秀壽

察しのいい読者は本稿のタイトルがかのハーバート・サイモンの自伝 *Models of My Life* と同じであることに気付いたかもしれない。「盗作だ」などと後ろ指を指されることがないようにタイトルをあえて英訳するならば、本稿は *A Model of My Life* と訳出されよう。その違いは、前者が、偉大なる研究者が自分の学者人生(過去)を振り返っての自伝であるのに対して、後者は、これから学者人生を歩む若き研究者が今後(未来)を見据えての決意表明という点にある。ここで単数形 (*A Model*) / 複数形 (*Models*) と過去 / 未来の関連について、若干の説明を加えておく必要があるだろう。そもそもサイモンは、その著書に *A Theory of My Life* というタイトルを付ける予定であったという。なぜ彼が “Theories” ではなく、“Models” を選択したのか分からない。しかし、そこに踏み込まずとも、“A Model” と “Models” の違いを説明することができる。サイモンは、ノーベル経済学賞の受賞者であり、その輝かしい業績は経営学や経済学のみならず、心理学、コンピューター・サイエンス、哲学などにも及んでいる。そのような多岐にわたる業績を振り返ったとき、彼は “A Model” では自分の学者人生を描くことはできないと考え、“Models” を選択したのであろう。しかし、これから学者人生を歩むわたしにとっては、多様な側面を描いた “Models” ではなく、“A Model”，すなわち今後の行動指針となるような1つのモデルの方が望ましいだろう。したがって、*A Model of My Life* というタイトルの中には、今後の学者人生の決意が込められている。

学問であれ、スポーツであれ、経営であれ、何か事を成そうとするとき、人は、誰かを模倣することから始めたり、何かをベンチマークとしたりする。幸いもわたしには目標とすべき師が2人もいる。小野晃典先生と久保知一先生である。わたしは、2つのゼミを経験し、2人の先生から指導を頂き、2人の研究者の背中を見て育った。その過程の中で、ここでわたしが掲げる学者人生のモデルの土台が形成された。それは研究と教育の融合および共進歩である。それはわたしが5年間の大学院生活で2人の先生から学んだことの1つであった。両先生は研究と教育をどちらも決して妥協しはしないし、そのバランスをうまくとっている。わたしは3月1日より鳥取大学地域学部に講師として着任する。まだゼミを担当するかどうかは定かではないが、ゼミを持つことになった暁には、小野ゼミや久保ゼミのように、いや、小野ゼミや久保ゼミに負けないようなゼミを作りたい。数十年後、自分の学者人生のモデルは “Models” になっているかもしれない。しかし、2人の師から教わったこと・学んだことだけは忘れずに研究と教育に取り組んでいきたい。

最後に、小野先生へ。5年前、わたしを受け入れてくださり誠にありがとうございました。小野先生、久保先生、今後ともご指導の程よろしく申し上げます。

新規ゼミ生（第13期生）のご紹介

第13期ゼミ長 小黒 祐貴

OB・OGの皆様、はじめまして。小野晃典研究会第13期ゼミ長の小黒祐貴と申します。この度は、OB・OG会誌を通して、皆様にご挨拶をさせていただくことができ、大変嬉しく思っております。



私たち第13期生が小野ゼミに入会してから、もうすぐ1年が経とうとしておりますが、この1年間で多くのOB・OGの方々とお会いすることができました。ご多忙の中、ゼミや飲み会に遊びに来てくださるOB・OGの方々も多く、その度に小野ゼミの縦の繋がりの強さを感じております。OB・OGの方々和小野ゼミの今昔についてお話をしていると、同じ小野ゼミでも代によって違う色を持っており、今の小野ゼミとはまた違ったお話に、毎回新鮮さを感じております。しかし、どの代の方とお話ししても、共通していることがあります。それは、小野ゼミにて輝かしい功績を残しており、そのためにゼミ活動に心血を注いで取り組んだということです。現在、小野ゼミは学部内で一番の「エグゼミ」であるといわれております。確かに、他のゼミよりもゼミに費やす時間が多く、困難なことも多いゼミであると思います。しかし、ゼミ生

時代に、心血を注いで、ゼミ活動に懸命に取り組んだからこそ、その分、卒業した後もゼミへの愛が深く、同じ苦難を乗り越えた同期との友情も深くなるのだらうと感じております。

皆様のゼミへの深い愛情に報いるためにも、小野ゼミを皆様にとってより一層誇り高きゼミにすることが、私たちの使命であると考えております。皆様が築き上げてこられた小野ゼミの伝統を受け継ぎながら、より一層誇り高きゼミにするため、現役生一同、一層精進して参ります。皆様も昔と変わらぬ伝統を保ちながらも、また違った色を持った今の小野ゼミをご覧になり、気軽に遊びにいらしてください。先輩方とお話しできることを現役生一同、心より楽しみにしております。

さて、ここからは、簡単にではありますが、ともにゼミ活動に励む第13期生を皆様にご紹介させて頂きたいと思っております。第13期生は、男



本年度の入ゼミ説明会配布用の冊子『Onumber』の表紙を第12期ゼミ長・梶田伸吾さんと飾った著者

9名、女2名の計11名で構成されています。例年に比べると、人数の少ない方ではありますが、その分蜜の濃い関係を築いております。時には真っ向からぶつかり合うこともありますがお互いを励まし、鼓舞し合いながら活動しております。そんな私たち第13期生の共通の強みは、決して途中であきらめない「忍耐力」と、さらなる高みを目指す「向上心」であると思います。私は、小野ゼミ第13期生のゼミ長を務めるにあたって、前期と後期に1度ずつ口上を述べさせていただきました。前期には、「同期が1人も辞めないゼミにする」という目標、そして小野ゼミの代表としての橋渡しを受けた後期には、新たに「1人1人が高い志を持ったゼミにする」という目標を述べました。小野ゼミでの活動には、インカレディベートや、三田祭論文など辞める人が出てもおかしくない苦しい局面が多々ありました。しかし、私たち第13期生は、現時点まで1人も欠けることなくゼミ活動を続けております。苦しい局面でも笑顔を絶やさない同期の姿を見て、本当に強い「忍耐力」を持った同期であると感心しております。また、私たち第13期生は、「KUBIC」、「読売新聞大学生マーケティングコンペティション」、そして「神戸外大マーケティングコンペティション」といった有志の企画に、全員が進んで取り組みました。論文執筆など通常のゼミ活動で忙しい中、有志の企画であるにもかかわらず、同期全員が参加に名乗りを上げ、懸命に取り組む「向上心」は、私たち第13期生の強みであると感じております。このような強みを持った同期であったからこそ、私の掲げていた2つの目標を実現することができたのだと思います。決して途中であきらめない「忍耐力」と、さらなる高みを目指す「向上心」を備えた同期とともに、第13期生一同、今後も小野ゼミのさらなる発展のため、ゼミ活動に精進してまいりたいと思います。



小野先生と第13期生
(三田祭ポスターの元となった1枚)

このページからは、私たち第13期生の簡単なプロフィールを、私からの一言を添えつつ紹介させていただきます。OB・OGの皆様と現役生の間での交流の一助となれば幸いです。



井上 雄哉（入ゼミ副代表）

◆出身高校 世田谷学園高校（東京都）

◆趣味・特技 カラオケ、音楽や動画を聴きながら勉強できる

13期の誇る優秀なデザイナー。彼の作るPower Pointと云ったら、まさに職人芸。入ゼミ副代表として、入ゼミをサポートしてくれています。



小黒 祐貴（ゼミ長）

◆出身高校 鎌倉学園高校（神奈川県）

◆趣味・特技 テニス、野球観戦

大学に入ってつけたあだ名は「残念イケメン」。こんな私ですが、周りの頼れる同期に助けられながら、ゼミ長職を全うしております。



川村 澄明（本務代表）

◆出身高校 高輪高校（東京都）

◆趣味・特技 買い物、卓球

いつも隣で支えてくれる頼れる本務代表。飛び級制度を使って、来年から院生さんになるという、規格外の男です。



木田 有亮（広報代表）

◆出身高校 時習館高校（愛知県）

◆趣味・特技 散策

同期内でもとびぬけ成績優秀で、どんなタスクも瞬時に終わらせます。さらに、書道サークルに所属しているだけあって、字も美しい。



清水 亮輔（外務代表）

◆出身高校 桐蔭学園高校（神奈川県）

◆趣味・特技 読書，テニス，麻雀，ボルダリング

13期の間人チャッカマン。彼の恐れ知らずの発言にはヒヤヒヤすることもあります。実は同期の事を一番思っている、頼れる外務代表です。



平久 千紘（商ゼミ委・常任委員・総務）

◆出身高校 江戸川学園取手高校（茨城県）

◆趣味・特技 ピアノ，似顔絵

辺境の地、茨城国から来たお嬢様。彼女の絶えない笑顔には癒されます。商学部生はみんな友達なのでは、と疑う程の人脈の持ち主です。



長妻 泰成（入ゼミ代表）

◆出身高校 成城高校（東京都）

◆趣味・特技 サッカー，Mr.children

13期のベストプレゼンターといえば、この男！常に女の子のことばかり考えているけど、やる時はやる、頼れる入ゼミ代表です。



西森 康斗（入ゼミアドバイザー・外務副代表）

◆出身高校 郁文館高校（東京都）

◆趣味・特技 読書，散歩，カラオケ

13期の愛されキャラ「やっさん」。どんな苦境でも、常にポジティブな彼の原動力は、大好きなアニメ鑑賞です。



福嶋 啓悟（広報副代表）

◆出身高校 木更津高校（千葉県）

◆趣味・特技 麻雀，食事

13期のムードメーカー「Goikei」。彼の行動や一言が，ゼミを笑いに包ませてくれます。お酒の飲ませすぎには注意です。



矢野 瑞喜（本務企画・本務会計・日本語論文代表）

◆出身高校 海城高校（東京都）

◆趣味・特技 サッカー，旅行，映画鑑賞

3つの役職を掛け持つ，マルチタスク人材。誰とでも仲良くなるモテ男だけど，B専なので，彼と女の子の趣味が被ることは滅多にありません。



山本 彩理（三田論冊子／OB・OG 会誌編集長）

◆出身高校 International School Bangkok（タイ）

◆趣味・特技 ハイキング，旅行

「姉御」という愛称を持つ通り，男勝りのしっかり者。でも，たまに女の子らしい一面も見せるツンデレ系女子。この会誌の編集長です。

どうか末永いご厚誼のほど，よろしくお願ひ申し上げます。

大学院生のご紹介

第11期大学院生 竹内 亮介
(第9期OB)

OB・OGの皆様、こんにちは。小野晃典研究会第9期OBで、現在、博士課程1年の竹内亮介です。2015年度は、2名の修士課程1年生を迎え、小野ゼミ大学院生は全体で7名となりました。本稿では、現在の小野ゼミの7名の大学院生の簡単なプロフィールと研究活動をOB・OGの皆様にご紹介申し上げます。

菊盛 真衣 (きくもり まい, 第7期OG・第9期大学院生)

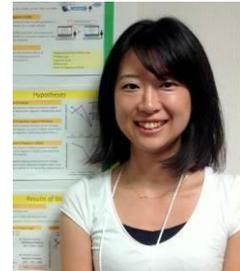
現在の学年：博士課程3年

研究テーマ：「eクチコミが消費者行動に与える影響」

インターネット上のクチコミが消費者心理・行動にいかなる影響を与えるのかを探究しています。

今年の成果：2015 ICAMA Best Doctoral Consortium Award (“How Do Consumers Evaluate Familiar versus Unfamiliar Brands with negative eWOM?”に対して)、他。

最後に一言：今年は博士課程の集大成として学位論文の執筆に励んできました。それでもまだまだ半人前！これからも一層精進していきますので、皆様叱咤激励のほど宜しくお願いいたします！



白石 秀壽 (しろいし ひでとし, 第9期大学院生)

現在の学年：博士課程3年

研究テーマ：「フランチャイズ・システムの制度的補完性と多様性」

現在、組織の経済学の観点から、フランチャイズ・システムにおける店舗展開や契約設計の問題に取り組んでいます。

今年の成果：「フランチャイズ・チェーンのチャネル選択問題：フランチャイズ店/直営店比率のパネルデータ分析」、『流通研究』、近刊、他。

最後に一言：企業を対象として実証研究を行っています。是非OBの皆様から、実務に関するナマの声をお聞きしたいです！



竹内 亮介 (たけうち りょうすけ, 第9期OB・第11期大学院生)

現在の学年：博士課程1年

研究テーマ：「広告研究における消費者情報処理アプローチ」

消費者の広告情報処理について研究を進めています。

今年の成果：“Advertising Distinctiveness and Consumer Memory in Competitive Ad Environments,” *Asia Marketing Journal*, Vol.17, No.2, pp.1-13.

最後に一言：博士論文の完成に向けて、勉学に励んでまいります。



中村 世名 (なかむら せな, 第 10 期 OB・第 12 期大学院生)

現在の学年：修士課程 2 年

研究テーマ：「競争パターンと企業成果の探究」

製品競争における企業間の市場を巡る相互作用に着目し、企業の競争パターンの規定要因とその成果への影響を研究しています。

今年の成果：Sena Nakamura, “Threat or Opportunity? Incumbents’ Competitive Response to New Products,” *Proceedings of the 2015 Annual Conference of Society for Marketing Advances*, pp.314-315, 他.

最後に一言：企業の戦略を研究しているので、実務家の皆様のお話を伺わせていただけましたら幸いです。



王 皓瑩 (おう こうえい, 第 12 期大学院生)

現在の学年：修士課程 2 年

研究テーマ：「消費者の独自性が自分のクチコミ発信意図へ与える影響」

今年の成果：“Are High-Need for Uniqueness Consumers Willing to or not to Recommend Products? Considering Type of Products and Receivers” presented at 15th International Marketing Trends Conference (Venice, Italy).

最後に一言：諦めずに、修士論文が完成するまで頑張りますよ！！！！！！



石井 隆太 (いしい りゅうた, 第 10 期 OB・第 13 期大学院生)

現在の学年：修士課程 1 年

研究テーマ：「デュアル・チャネルの選択と組織成果」

企業が直接チャネルと間接チャネルの両方を設置するのはなぜか、そうしたチャネル選択が組織成果にどのような影響を及ぼすのかについて研究しています。

今年の成果：2015 ICAMA Honorable Mention (“The Impacts of the Use of Dual Distribution on Interfirm Performance”に対して), 他.

最後に一言：学部同期の中村君に遅れること 1 年、念願叶って大学院進学を果たしました。引き続き、小野ゼミでお世話になりたいと思います。



廖 舒忻 (りょう じょきん, 第 13 期大学院生)

現在の学年：修士課程 1 年

研究テーマ：「同伴者が消費者の意思決定に及ぼす影響：同伴者が消費者との個人関係に注目して」

購買場面に存在する同伴者は、どのように消費者の意思決定に影響を及ぼすか、また、その影響の強さは、同伴者が消費者との具体的な個人関係に左右されるのかについて研究しています。

今年の成果：まだ頑張っています。

最後に一言：留学生として小野ゼミに入らせていただいたこの一年間に、色々ご指導をいただきました。今後とも宜しくお願い致します。



以下では、昨年4月からの1年間における大学院生の主たる学会活動をご紹介します。

2015年4月：日本商業学会関東部会（於早稲田大学）

報告テーマ：石井隆太, 「デュアル・チャネルと組織間成果：関係論によるアプローチ」



2015年5月：日本商業学会全国大会（於香川大学）

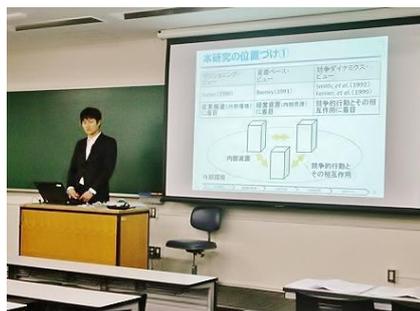
報告テーマ：白石秀壽, 「フランチャイズ契約におけるロイヤルティの2つの効果：小売・サービス業における実証分析」

中村世名, 「新製品に対する既存企業の競争的反応戦略：その意思決定に影響を及ぼす2つの動機に着目して」



2015年7月：日本商業学会関東部会（於専修大学）

報告テーマ：中村世名, 「脅威と機会に対する既存企業の競争的反応：その駆動要因の探究」



2015年10月：2015 International Conference of Asian Marketing Associations (Tokyo, Japan)

報告テーマ：Mai Kikumori, “How Do Consumer Evaluate Familiar versus Unfamiliar Brands with Negative eWOM?” (2015 ICAMA Best Doctoral Consortium Award)

Mai Kikumori, “Different Effects of Simultaneous Expose to Positive and Negative eWOM Messages Between Search and Experience Goods”

Sena Nakamura, “How Do Firms Response to Competitive New Products? Evidence from the Soft Drinks Industry in Japan”

Ryuta Ishii, “The Moderating Role of Dual Distribution: The Impacts of Interfirm Resources on Channel Performance” (2015 ICAMA Honorable Mention)



2015年11月：2015 Annual Conference of Society for Marketing Advances (San Antonio, USA)

報告テーマ：Mai Kikumori and Akinori Ono, “When Do Negative E-WOM Messages Enhance Product Evaluation?”

Sena Nakamura, “Threat or Opportunity? Incumbents’ Competitive Responses to New Products”

Ryuta Ishii, “The Impacts of the Use of Dual Distribution on Interfirm Performance”



2016年1月：International Marketing Trends Conference 2016 (Venice, Italy)

報告テーマ：Haoying Wang, Akinori Ono, and Mai Kikumori, “Are High-Need for Uniqueness Consumers Willing to or Not to Recommend Products? Considering Types of the Products and the Receivers”



来年度は、第13期生の川村澄明さんと留学生の崔新宇くんを迎え、小野ゼミ大学院生は、変わらぬ賑やかさで研究に励めることと思います。毎週金曜日の大学院ゼミ（1～3限）と学部ゼミ（4限～）に、是非ご来訪ください。どうぞ宜しくお願いいたします。



2015 年度ゼミ活動紹介

第 12 期ゼミ長 梶田 伸吾

小野晃典研究会 OB・OG の皆様、こんにちは。第 12 期ゼミ長の梶田伸吾と申します。この度は、OB・OG 会誌を通して、皆様にご挨拶できることを心から嬉しく思っております。これまでのゼミ活動を振り返ってみると、本当に多くの OB・OG の方々にご協力を賜りました。皆様のご協力があったおかげで、私達のゼミ活動は非常に有意義なものになりました。また、小野晃典研究会ならではの「縦の繋がり」を強く実感し、自分達が小野晃典研究会の一員であるということ、何より嬉しく、そして誇らしく思っております。



さて、私からは、2015 年度のゼミ活動について、簡単にではありますが、皆様にお伝えしたいと思います。2015 年度、小野晃典研究会は、第 12 期生 15 人、大学院生 5 人に加えて、第 13 期生 11 人と大学院生 2 人を新たに迎え入れ、総勢 34 名という体制で活動して参りました。

まず初めに、各期の活動を大まかにご紹介したいと思います。3 年生にあたる第 13 期生は、基礎文献レポートや多変量解析技法レポートを通して、マーケティングを学ぶ上で必須の知識を身に付けると共に、ディベートやケース・メソッド、三田祭論文執筆などを通して、それらの知識を実践的に用いることに注力しました。また、第 13 期生自ら手を挙げ、ビジネスプランコンテストなどにも積極的に参加しました。さらに、4 月下旬にはゼミ内における役職も決定し、その後はそれぞれの仕事を全うし、ゼミ運営にも携わりました。4 年生にあたる第 12 期生は、この 1 年間、自身の卒業論文執筆をはじめ、第 13 期生が作成したレポートの添削、各役職の引継ぎなど、後輩指導にも力を入れて参りました。

次に、今年度に行われた主な活動につきまして、時系列に沿って振り返りながらご紹介したいと思います。

2014 年 4 月下旬には、秩父の宮本の湯にて、春合宿を実施いたしました。初日は、第 13 期生の役職決めの話し合いや、体育館を借りてのバレーボール大会、小野先生を囲んでの懇親会が開催されました。翌日は、ライン下りをして、秩父の大自然を堪能しました。この合宿を通じて、新たに加入した第 13 期生もすっかり小野ゼミに馴染み、少しずつではありますが一体感が生まれたことを実感いたしました。

6 月初旬には、関西大学の岩本明憲ゼミナールと共に、第 7 回目にあたるインカレディベート大会を実施いたしました。昨年度は、慶應義塾大学の高田英亮ゼミナールも参加していた当大会ですが、今年度は、高田英亮先生の海外留学のため 3 年生のゼミ生がいないという事情により、2 ゼミでの開催という運びと

なりました。当大会に出場した第13期生は、見事2戦2勝という結果を収めることができました。

10月初旬には、関西大学にて開催された関西大学ビジネスプラン・コンペティションに、第13期生の有志4名が出場し、惜しくも優勝を逃したものの、準優勝という見事な結果を残しました。

同じく10月初旬には、慶應義塾大学の高橋郁夫ゼミナールと高田英亮ゼミナールと共に、第5回目にあたる3ゼミ合同三田祭論文中間発表会を実施いたしました。小野ゼミからは、第13期生の日本語論文チームと英語論文チームの両チームが共に出場しました。なお、それぞれのチームの研究テーマは、日本語論文チームが「企業からの製品推奨を伴うカスタマイズ方式の有効性」、英語論文チームが「Anime Pilgrimage Transcultural Experiences Within and Beyond Virtue World」でした。発表本番では、普段のゼミ活動の3倍以上もの人数の前での発表ということもあって、少々緊張しながらも、これまで一生懸命に取り組んできた成果を堂々と発表しました。その後、高橋郁夫先生、高田英亮先生、大学院生の方々から大変有意義なコメントやアドバイスを頂き、第13期生はこれから一層頑張っていこうと奮起しました。

11月下旬には、三田祭期間中にマーケティングゼミ合同研究報告会が開催されました。小野ゼミからは、第13期生の日本語論文チームが出場しました。発表本番は、トップバッターにも関わらず、大勢の聴衆の前で堂々と発表しました。



関東学生マーケティング大会の集合写真

この日本語論文チームは、同じく11月下旬に、早稲田大学にて開催された関東学生マーケティング大会（旧関東十ゼミ討論会）にも出場しました。同チームは、発表資料やプレゼンに一層磨きをかけ、関東最大級である本大会に挑みました。大会当日は、一生懸

命練習した成果もあり、無事に1次審査と2次審査を通過し、決勝に進むことができました。決勝では、渾身のプレゼンを披露して聴衆を沸かせましたが、結果としては、惜しくも優勝を逃し優秀賞を受賞しました。彼らの悔しそうな顔は、今でもはっきりと覚えています。後輩の発表を見にきた4年生が、そんな彼らを励ましている様子がとても印象的でした。

12月中旬には、四分野インゼミ研究報告会が開催されました。本報告会では、経営、会計、商業、経済・産業の4つの分野から8つのゼミが集まり、それぞれの研究成果を発表しました。小野ゼミからは、英語論文チームが出場しました。英語論文チームのうち半数が神戸で開催のマーケティング大会参加のため不在という状況のなかでも、これまでの研究成果を見事に発表し、圧倒的な存在感を放っておりました。



四分野インゼミ研究報告会の集合写真

そして、今年度も小野ゼミは、国内に留まらず、国外においても積極的に学会発表を行いました。2015

年 11 月上旬には、第 12 期英論チームが、アメリカ合衆国テキサス州のサンアントニオで開催された、Society for Marketing Advances Conference に参加しました。第 12 期英語論文チームは、「Automobiles as Anthropomorphized Products: The Possibilities of Customizing Car's "Faces"」というテーマで発表し、海外のマーケティング研究者からも称賛の声を頂くことができました。

さらに、今年度も小野ゼミの研究は、学内においても高い評価を獲得することができました。12 月下旬には、第 12 期の荒井礼君と羽佐田智也君が、共に慶應義塾大学商学会賞を受賞しました。この受賞により、小野ゼミは、ゼミ再開後、途絶えることなく 8 年連続で受賞者を輩出したこととなります。



夏合宿の集合写真（山梨県吉野荘にて）

このように、今年度も大変有意義なゼミ活動ができたのは、OB・OG の皆様の支えがあったからこそだと思います。そこで、この場をお借りして、今年度お世話になった OB・OG の皆様をご紹介させて頂くと共に、感謝の言葉を述べさせていただきます。

2014 年 3 月 16 日の入ゼミ選考会の後に開催された、第 13 期生にとっての初コンパに、横山 嵩先輩（第 3 期）と刎本慎弥先輩（第 9 期）がご参加くださり、現役ゼミ生と共に、第 13 期生の入会をお祝いしてくださいました。ありがとうございました。

6 月 6 日に開催されたインカレディベート後に行われた懇親会に、長澤由美子先輩（第 11 期）がご参加くださいました。ありがとうございました。

7 月 10 日に開催された春学期納会に、高木研太郎先輩（第 3 期）、横山 嵩先輩（第 3 期）、中村満隆先輩（第 3 期）、岩崎裕士先輩（第 8 期）、全先伸一先輩（第 10 期）、立松宗磨先輩（第 11 期）、住田英紀先輩（第 11 期）、ならびに蓮岡聡美先輩（第 11 期）がご参加くださいました。ありがとうございました。

11 月 20 日～23 日の三田祭期間には、窪田和基先輩（第 6 期）、横内拓幸先輩（第 6 期）、岸本啓太郎先輩（第 7 期）、岩崎裕士先輩（第 8 期）、刎本慎弥先輩（第 9 期）、清水 鈴先輩（第 9 期）、内藤 節先輩（第 11 期）、佐藤和也先輩（第 11 期）、小平紘子先輩（第 11 期）、石塚佑飛先輩（第 11 期）、ならびに久米敬太郎先輩（第 11 期）がブースにご来訪くださいました。また、三田祭初日の夜に開催された三田論打ち上げ

には、高木研太郎先輩（第3期）、横山 嵩先輩（第3期）、小合麻耶先輩（第4期）、千葉貴宏先輩（第5期）、磯邊海舟先輩（第10期）、ならびに朴大晃先輩（第10期）がご参加くださいました。ありがとうございました。

12月4日の第1回オープンゼミにて、池谷真剛先輩（第5期）が、小野ゼミ入会に興味を持つ2年生に向けてご講演してくださいました。特に、「小野ゼミで思考力が鍛えられた」というお言葉が印象的でした。参加した2年生からも、小野ゼミで成長したいとの声が多く出ておりました。お忙しい中、ご講演の依頼を受けてくださり、ありがとうございました。

また、12月22日の第2回オープンゼミにて、黒沢祐介先輩（第8期）が、小野ゼミ入会に興味を持つ2年生に向けてご講演してくださいました。社会人として働く上で大切にしていってほしいことや、小野ゼミでの経験がどのように活かされているかについてお話し頂きました。お忙しい中、ご講演の依頼を受けてくださり、ありがとうございました。

さらに、12月25日に開催された忘年会に、全先伸一先輩（第10期）、佐藤和也先輩（第11期）がご参加くださり、年明けの1月15日に開催された秋学期納会にも、横山 嵩先輩（第3期）がご参加くださいました。ありがとうございました。

今年度も、お忙しいところ、貴重なお時間を割いて小野ゼミの活動にご参加くださった OB・OG の皆様には、改めて、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

最後となりますが、今年度の小野ゼミでの活動を振り返って、強く実感したことがございます。それは、私達ゼミ生がこれまで様々な活動に取り組むことができたのは、OB・OG の皆様が築き上げてこられた伝統や実績があったからこそであるということです。これからも、様々なゼミ活動を通してすっかり遅くなった第13期生や、新たに加入する第14期生が中心となって、そのような伝統や実績を受け継ぎながらも、新たなことに果敢に挑戦し、小野ゼミを一層盛り上げていってくれることを心から願っております。今後とも、OB・OG の皆様には、お力を貸して頂きたい局面が多々あることと存じますが、変わらぬご支援のほど、どうぞよろしく願いいたします。



本年度初コンパの集合写真（小野ゼミ御用達の「つるのや」にて）

月日\内容	文献レポート提出	多変量解析レポート提出	火曜日(サブゼミ)		月日\内容	金曜日(本ゼミ)			
			1限	2限		4限	5限		
3月17日			春期休校		3月20日	春期休校		一次選考(16日・月)	
3月24日			春期休校		3月27日	春期休校		謝恩会(24日・火)	
3月31日			春期休校		4月3日	春期休校			春期休校(2月1日・日～4月6日・月)
4月7日	コトラー&ケラー 『マーケティング・マネジメント』 第1章～第3章		自己紹介企画	マーケティング大賞発表	4月10日	マーケティング大賞発表	第0回卒論中間発表(テーマ、要旨) 岸部・北島		
4月14日	コトラー&ケラー 『マーケティング・マネジメント』 第4章～第7章		サブゼミ協議会		4月17日	KUBICプラン発表 第1回ディベート解題(13期)			
4月21日	コトラー&ケラー 『マーケティング・マネジメント』 第8章～第10章		他己分析会・卒論勉強会(12期) 役職ミーティング(13期)		4月24日	第1回ディベート発表			春合宿(25日・土～26日・日)
4月28日			振替休日		5月1日	休講 第2回ディベート解題(13期)			
5月5日			休講		5月8日	第2回ディベート発表 第3回ディベート解題(岩本ゼミ案)	第1回卒論中間発表(仮説まで)		
5月12日	コトラー&ケラー 『マーケティング・マネジメント』 第11章～第18章		相関分析・回帰分析(中村さん)		5月15日	第3回ディベート発表 APUケースメソッド模擬	第1回卒論中間発表(仮説まで)		
5月19日	コトラー&ケラー 『マーケティング・マネジメント』 第19章～第22章	相関分析・回帰分析レポート	ソフトボール大会		5月22日	インカレディベート模擬 (12期 vs. 13期)			読売新聞ケースコンペエントリーシート提出 (20日・水～6月19日・金) 武田薬品ビジネスゲーム CAT-G(22日・金)
5月26日			カイ2乗検定・t検定(竹内さん)		5月29日	予備日(小野先生ご出張の為)			日本商業学会全国大会(29日・金～31日)
6月2日	田中 洋 『消費者行動論体系』 第1章～第3章		インカレディベート立論発表		6月5日	インカレディベート立論最終発表		懇親会(6日・土)	インカレディベート(6日・土)
6月9日			振替休日		6月12日	第1回卒論中間発表(仮説まで) 第1回ケースメソッド解題(13期)			Audi & Robert Walters Global Business Case Competition (9日・月～14日・日)
6月16日		カイ2乗検定・t検定レポート	分散分析(菊盛さん)		6月19日	第1回ケースメソッド発表			
6月23日		分散分析レポート	主成分分析・因子分析(石井さん)		6月26日	サブゼミ(小野先生ご出張の為) 12期卒論発表・13期三田論テーマ発表			GFMC学会@フリンツェ(24日・水～29日・月) 第12期卒論一斉提出(26日・金) 読売新聞ケースコンペ 事前説明会(27日・土)
6月30日	田中 洋 『消費者行動論体系』 第3章～第8章	主成分分析・因子分析レポート	共分散構造分析(白石さん)		7月3日	広告審査協会講演会			
7月7日	田中 洋 『消費者行動論体系』 第9章～終章		12期三田論発表	13期三田論中間発表	7月10日	13期三田論テーマ発表		春学期納会(10日・日)	
7月14日		共分散構造分析レポート	休講(テスト準備)		7月17日	休講(テスト準備)			
7月21日			休講(テスト準備)		7月24日	休講(テスト期間)			春学期末試験(22日・水～30日・木) 夏季休校(7月31日・木～9月21日・日)
7月28日			休講(テスト期間)		7月31日	夏期休校			

小野晃典研究会 2015年度 秋学期スケジュール

月日\内容	火曜日(サブゼミ)		月日\内容	金曜日(本ゼミ)		
	1限	2限		4限	5限	
9月22日	休講(夏季休校)		9月25日	第2回三田論中間発表	秋学期スケジュール会議 入ゼミ会議	読売マケコン書類締切(9月11日・金) 関マケ中間報告(9月19日・土)
9月29日	入ゼミ会議 KUBIC発表模擬プレゼン	合同中間発表模擬プレゼン KSMS会議	10月2日	春学期会計報告 KUBIC発表模擬プレゼン	合同中間発表模擬プレゼン	KUBIC本選会(3日・土)
10月6日	既存文献フリーディスカッション (松山・松本)		10月9日	3ゼミ合同中間発表		3ゼミ懇親会(9日・金) 第2回入ゼミ説明会(10日・土)
10月13日	個別説明会模擬プレゼン 第3回三田論中間発表	既存文献フリーディスカッション (上谷)	10月16日	第4回三田論中間発表 @日吉 D412	第2-1回卒論中間発表(岸部) 既存文献フリーディスカッション(芦澤) @日吉 D413	KSMS学会キックオフ会議(13日・火) 第1回個別説明会(16日・金)
10月20日	ソフトボール大会		10月23日	第5回三田論中間発表	第2-2回卒論中間発表 (松山・芦澤・上谷)	
10月27日	読売マケコン発表模擬 KSMS発表プレゼン	第6回三田論中間発表	10月30日	2年生向けゼミ見学会 KUBIC発表 SMA発表模擬 読売マケコン発表模擬	第7回三田論中間発表(英語) 第2-3回卒論中間発表 (北島・中野・梶田・伊藤)	第2回個別説明会(28日・月) 三田論提出締切(30日・金) ICAMA学会@早稲田大学(30日・土~11月1日・日) 読売マケコン最終審査(31日・土)
11月3日	三田論相談会 (パネル作成)		11月6日	サブゼミ(小野先生ご出張のため) マケ論発表模擬プレゼン 三田祭パネル発表		SMA学会@サンアントニオ(4日・火~8日・日) 関マケ論文提出締切(3日・火) 商学会賞提出締切(6日・金 15時)
11月10日	マケ論発表模擬プレゼン KSMS発表プレゼン	三田祭パネル発表	11月13日	休講(補講日)		全国大学生マーケティングコンテスト参加締切(11日・木) マケ論論文提出締切(13日・金 22時) 市場創造研究投稿締切(13日・金) KSMS学会@延世大学(14日・土~15日・日)
11月17日	佐藤先生講演会		11月20日	休講(三田祭期間)		マケ論発表資料提出締切(16日・月 22時まで) 三田祭期間(18日・水~24日・火) マーケティングゼミ合同研究報告会(20日・金)
11月24日	休講(三田祭期間)		11月27日	関マケ発表模擬プレゼン	第1回OPゼミ模擬	関東学生マーケティング大会発表(28日・土) 第5回市場創造研究発表会(28日・土) 全国大学生マーケティングコンテスト関東予選(29日・日)
12月1日	四分野インゼミ発表模擬プレゼン	英論相談会	12月4日	第1回OPゼミ		四分野インゼミ資料提出締切(4日・金)
12月8日	四分野インゼミ発表模擬プレゼン 第1回ケース・メソッド課題	全国大学生マケコン発表プレゼン	12月11日	全国大学生マケコン発表プレゼン 四分野インゼミ発表模擬プレゼン	第1回ケース・メソッド発表	全国大学生マーケティングコンテスト資料提出締切(9日・木) 四分野インゼミ発表(12日・土) 全国大学生マーケティングコンテスト決勝(12日・土)
12月15日	第2回OPゼミに向けて		12月18日	第2回OPゼミ模擬		
12月22日	第2回OPゼミ		12月25日	13期卒論テーマ発表 (福岡・木田・矢野・平久・清水)	黒沢さん懇親会(22日・火) 忘年会(25日・金)	卒論提出締切(25日・金)
12月29日	休講(冬季休校)		1月1日	休講(冬季休校)		冬季休校(12月27日・日~1月5日・火)
1月5日	休講(冬季休校)		1月8日	13期卒論テーマ発表 (井上・長妻・西森)	13期卒論テーマ発表(小黒・山本) 12期13期合同ディベート課題	初詣@明治神宮(5日・火)
1月12日	入ゼミ会議 一年の振り返り (14期生育成に向けて)	就活のすすめ・大学院のすすめ	1月15日	修論テーマ発表(川村) 特別聴講生プレゼン(李真暎)	12期13期合同ディベート(中止) 卒論相談会	秋学期納会(15日・金) 第3回入ゼミ説明会(16日・土)
1月19日	休講(テスト準備)		1月22日	休講(テスト期間)		IMTC学会@ヴェネツィア(21日・木~23日・火) 秋学期末試験(22日・金~2月2日・火)
1月26日	休講(テスト期間)		1月29日	休講(テスト期間)		OB・OG会(2月6日・土) 2016 GMC学会提出締切(2月15日・月) 第一次本登録・選考(3月11日・金、15日・火) 商学会賞授賞式(3月22日・火)

三田論締切

卒論締切

第 13 期 共同研究プロジェクト紹介

関

関東学生マーケティング大会

マ

ケ

製品推奨を伴うカスタマイズ方式の有効性

「商品を自分の理想の形に変えたい。」——この願いを叶えてくれるのが、カスタマイゼーションである。近年の研究は、完成品を起点にカスタマイズすることで、消費者により高い満足を与えられると主張している。しかし、この方法には問題がある。本論は、その問題を指摘した上で、それを解決しうるような新たなカスタマイズ方式を提唱する。



抜け感のあるしっかり者
矢野 瑞喜



驚異の遅刻率 0%
福嶋 啓悟



日論のイチロー
井上 雄哉



救世主
木田 有亮



困ったら俺がやる！
長妻 泰成



日論のアイドル
平久 千紘

13期関マケは、英語で論文を書きたくないという消極的な理由で結成したメンバーの集まりでした。しかし、世界最先端のテーマを見つけて論文を書くためには、英語論文を読む必要があり、春学期の間、ずっと英語と苦闘しました。無事テーマが決まった後も、夏休みを仮説構築に捧げ、秋学期は、実験に必要な7,560枚もの画像をスクリーンショットし、執筆に励みました。こうして時間を忘れて完成させた私たちの論文は、関東学生マーケティング大会で優秀賞を頂くことができました。初めは、論文テーマも自分たちでまともに決められなかった私たちですが、助けてくれた同期の13期生、先輩の12期生や大学院生、そしてなにより小野先生の御助力も含め、支えてくださったすべての方々のおかげで、こうして納得のいく論文を書き上げ、賞を受賞することができたと思っております。私たちにお力添えをくださった皆様、誠にありがとうございました。

英

英語論文執筆プロジェクト

論

What Determines the Visit Intentions and Destination Loyalty of Anime Pilgrims?

Anime culture is generating a peculiar phenomenon known as *anime* pilgrimage, which involves traveling to locations that resemble particular scenes in *anime* pieces. However, the previous studies on tourism and film tourism have several problems to fully explain *anime* pilgrims' determinants of visit intention/destination loyalty. In this study, we consider the influence from *anime* nerds ("location seekers" and their followers) community and explore the determinants of visit intention/destination loyalty.



おしゃれ番長
川村 澄明



13期一のオタ
西森 康斗



プロテインマッチョ
小黒 祐貴



チャッカマン
清水 亮輔



山ガール
山本 彩理

13期英論チームは、7月にあまり悩むことなく、「このテーマが面白そう!!」とアニメ聖地巡礼に関するテーマを選びました。それから約半年間、チーム5人が、アニメ聖地巡礼者の訪問意図とロイヤルティの影響を研究し、論文を執筆してきました。研究を始めると、アニメ聖地巡礼に関する既存研究が少ないため、論文の方向性決定が難航し、想像以上に様々な問題に直面しました。しかし、調査に協力していただいた聖地巡礼者の方々、何度も分析や執筆に相談に乗ってくださった12期と大学院生の方々、そして何より休日問わず熱心にご指導くださった小野先生のおかげで、私たちは無事に論文執筆を終え、四分野インゼミ研究報告会でも発表することができました。13期英論チーム一同、ご協力くださり、支えてくださった皆様に、心より感謝を申し上げます。

第 12 期 卒業論文テーマ紹介

荒井 礼 「アクティブサポートが顧客のブランド評価に及ぼす影響

—e クチコミの発信動機とサポート内容に着目して—

近年、企業が顧客との新しいコミュニケーション手法として活用しているアクティブサポートは、顧客のブランド評価を高める場合もあれば、低める場合もある。しかし、どのようなアクティブサポートが顧客の高いブランド評価に帰着するかを議論した研究は、著者の知る限り存在しない。そこで本論は、サポート内容を独自に分類した上で、e クチコミの発信動機に応じていかなる内容のサポートを行うと、顧客の高いブランド評価に帰着するかを吟味する。

芦澤 友也 「ネットオークションにおいて最低入札価格と最低落札価格が落札価格に及ぼす影響」

ネットオークションの売手が抱える、最低入札価格および最低落札価格を設定するべきか否かという課題に対して、これら 2 種類の価格を設定する場合の方が落札価格が高いと主張する研究が存在する一方、これらを設定しない場合の方が落札価格が高いと主張する研究も存在する。そこで、本論は、最低入札価格および最低落札価格が落札価格に及ぼす 2 通りの影響を識別することによって、既存研究の間における見かけ上の矛盾の解消を試みる。

羽佐田 智也 「環境配慮型製品の購買行動を促す訴求方法

—ベネフィットと社会規範に着目して—

消費者に環境配慮行動を促す訴求方法を探究した既存研究は、ベネフィットの訴求と規範の訴求が効果的に機能する条件を識別したものの、それぞれの訴求を行ったメッセージを受信した消費者がメッセージの発信者に対して抱く態度を考慮してこなかった。そこで、本論は、消費者の環境配慮行動の中でも環境配慮型製品の購買行動に着目し、さらに、メッセージの発信者を考慮した上で、実証分析を行い、消費者に環境配慮型製品の購買行動を促す効果的な訴求方法を探究する。

林 英里香 「広告エンドースと製品イメージの一致度が広告態度に及ぼす影響」

既存研究は、広告エンドースと製品イメージの一致度が高水準である場合と中水準である場合において、消費者の「広告態度」の水準が異なると主張したものの、有意な差を見出すことはできなかった。これに対して、本論は、新たに製品精通性および製品関与度という概念を導入し、製品精通性と関与の異なる 4 種類の製品イメージと、有名人エンドースのイメージの一致度が高水準である場合と中水準である場合を比較し、消費者の「広告態度」の水準の差を探究する。

平嶋 健也 「広告掲載価格における丸形価格効果 —制御焦点理論に着目して—」

既存研究によると、消費者は、感情的に購買意思決定を行う場合、200 円のような切りの良い「丸形価格」の製品を好意的に評価する一方、認知的に購買意思決定を行う場合、198 円のような切りの悪い「非丸形価格」の製品を好意的に評価するという。この知見を援用しつつ、本論は、制御焦点理論に基づいて、「丸形価格」／「非丸形価格」が、感情訴求型／認知訴求型という広告メッセージの種類との組み合わせで、消費者の製品評価に与える影響を探究する。

伊藤 大貴 「買物同行者が消費者の衝動購買に及ぼす影響

—消費者と買物同行者の自己観の相互作用に着目して—

買物同行者に目を向け、消費者の自己観が衝動購買に及ぼす影響を吟味した既存研究には、消費者の自己観を分類して実験を行った研究は存在するものの、買物同行者の自己観を分類して実験を行った研究、さらには、消費者と買物同行者の自己観を同時に分類し、双方の自己観の相互作用に着目した研究は、著者の知る限り存在しない。そこで本論は、双方の自己観を分類した上で、どの組み合わせが、最も高い顧客満足に帰着するかを吟味する。

梶田 伸吾 「ブランド間の力関係の強弱が比較広告の効果に及ぼす影響

—消費者のブランド態度に着目して—

比較広告に関する既存研究は、力関係が弱い企業が行う比較広告の有効性を強調している一方、力関係が強い企業が行う比較広告には効果がないと主張している。しかし、弱者に対して同情や応援をする「判官びいき」という消費者の特性を考慮すると、力関係が強い企業が行う比較広告は、「弱者攻撃」と見なされ、消費者のブランド態度に負の影響を及ぼすことが考えられる。そこで本論は、企業間の力関係の強弱が消費者に及ぼす影響に着目して、比較広告の有効性を再検討する。

上谷 崇人 「情報源としてのブランド・アンバサダーの有効性 —情報の有用性に着目して—

近年、消費者がブランド・アンバサダーとして企業から認定され、ブランド関連情報を企業に代わって発信するという事例が増えている。しかし、ブランド・アンバサダーの有効性を吟味した実証研究は、著者の知る限り存在しない。そこで、本論は、情報の受信者である消費者を関与度の高低によって分類した上で、消費者が知覚するブランド・アンバサダーからの情報の有用性を、一般消費者および企業からのそれと比較する。

岸部 海人 「セルフギフトとして贈られる製品・サービスの消費者選好」

セルフギフトとして贈られる製品・サービスの価格および非日常性に対する消費者の選好に焦点を合わせた既存研究は、褒美および癒しという異なる文脈の差異がもたらす影響を考慮するに留まっている。そこで、本論は、同一文脈内における動機の強さの差異がもたらす影響を考慮した上で、セルフギフトとして贈られる製品・サービスの価格および非日常性に対する消費者の選好に関して、いかなる差異が存在するのかということについて探究する。

北島 大輝 「象徴的コ・ブランディング製品の購買意図

—情製品カテゴリー間の移転性に着目して—

近年、セカンダリーブランド (SB) が持つブランド・エクイティをプライマリーブランド (PB) に付与する象徴的コ・ブランディングが注目されている。既存研究は、SB に対する自己適合性に着目して、象徴的コ・ブランディング製品の購買意図を探究してきたが、象徴的コ・ブランディングが SB によるブランド拡張として捉えられることを考慮していない。本論は、ブランド拡張新製品の購買意図を規定する製品カテゴリー間の移転性にも着目して、既存研究の拡張を試みる。

松山 峻典 「擬人化広告の有効性」

近年、企業が行う製品差別化の新たな技法として、擬人化が着目されつつある。しかし、この擬人化に関する既存のマーケティング研究は、擬人化の行われた製品に対する消費者の態度および選好について探究することに終始しており、擬人化の行われた製品が登場する広告に関する研究は、著者が知り得る限り一篇しか存在していない。そこで本論は、擬人化の行われた製品が登場する広告、すなわち擬人化広告の効果を探究する。

中原 裕人 「オンラインショッピングサイトにおける消費者関連型製品推奨の有効性」

近年、オンラインショッピングサイトにおける製品推奨が注目されている。このような製品推奨の方式は、2（消費者への個人化の有無）×2（小売業者主体型推奨・他の消費者のデータに基づく推奨）の4種類に分類することができる。しかし、既存研究は、消費者に個人化し、かつ、他の消費者のデータに基づく製品推奨である「消費者関連型製品推奨」の存在を捨象していた。そこで、本論は、情報源信憑性モデルを援用して、消費者関連型製品推奨の有効性を探究する。

中野 真衣 「カプセル玩具の販売方法の相違が消費者の満足度の差に及ぼす影響」

カプセル玩具の販売方法には、一般的な自動販売機であるガチャポンを介して販売する方法や、コンビニエンスストア内に設置されているガチャボックスを介して販売する方法、さらには玩具専門店などでカプセルから出した状態で販売するオープン販売という方法がある。本論は、これら3種類のカプセル玩具販売方法の違いに起因して生じる、カプセル玩具購買に対する消費者の知覚の差を吟味する。

小野寺 隆志 「値引き SP—おまけ SP 間の消費者評価の比較

—消費者の焦点状態に着目して—

マーケティング学術研究において、セールス・プロモーション（SP）の代表的な手法である値引き SP およびおまけ SP に対する消費者評価を比較する試みが、現在に至るまで盛んに行われてきた。しかし、比較の際に、消費者の焦点状態が SP に対する消費者評価に及ぼす影響を考慮した既存研究は、著者の知る限り存在しない。そこで、本論は、新たに消費者の焦点状態に着目し、値引き SP およびおまけ SP に対する消費者評価の比較を試みる。

佐野 諒平 「コーズ・リレーテッド・マーケティングと

事業領域の適合度が消費者の支払意志に及ぼす影響」

コーズ・リレーテッド・マーケティングとその実施企業の事業領域の適合度が高い場合の方が、企業に対する消費者の態度が好転し、支払意志が促進されると主張する研究がある一方、適合度が低い場合の方が、支払意志が促進されると主張する研究もある。こうした既存研究間における矛盾を解消するために、本論は、事業領域との適合度と消費者の支払意志の関係に影響を及ぼす要因を識別し、その要因の影響を吟味することを目的とする。

AMA 出場報告

第 11 期 蓮岡 聡美

◆AMA とは？

米国マーケティング協会（AMA: American Marketing Association）は、いわずとした世界最高峰のマーケティングの学会です。そんな AMA が 1 年に二度、夏と冬に主催するのが、「学会会議（Educators' Conference）」です。この学会にて研究報告を行うには、匿名審査員による厳しい論文審査に合格しなくてはなりません。合格すれば研究報告権を得るだけでなく、全世界の大学の図書館に納品される『AMA 大会予稿集（AMA Proceedings）』に論文を掲載する権利をも得ることもできます。論文審査は極めて厳しいですが、小野ゼミでは、第 9 期生の三田論プロジェクトチームが初挑戦して以来、3 チームが挑戦し、2 チームが合格してアメリカにて研究報告を行っています。

◆執筆論文の概要

本論文のタイトルは、“Why Is It Still Here? Examining the Determinants of Consumer Avoidance of Personalized Advertising on the Web”です。近年、多くの広告実務家は、有効な SP として Web 上のパーソナライズ広告を活用しています。しかし、消費者は、その広告に対して必ずしも望ましい反応を示すとは限りません。このような事実があるにもかかわらず、Web 上のパーソナライズ広告の忌避規定要因を探究した研究は、著者の知りうる限り存在しません。そこで、本論文は、Web 上のパーソナライズ広告を忌避する消費者の心理メカニズムを描いた概念モデルを構築、実証分析を試みました。

◆AMA 出場権利を獲得して

AMA の出場権利獲得の通知を受け、我々第 11 期英論チームは歓喜しました。第 9 期英論チームに次ぐ AMA での論文発表。しかし喜びも束の間、我々は自らの財布や通帳を眺めて悲しみに暮れるのです…。幸運なことに、我々は 2014 年 11 月に Society for Marketing Advances (SMA) の出場権利を獲得しており、今回で 2 度目のアメリカ渡航となる予定でした。AMA は 2015 年 2 月。そう、我々はアメリカへの渡航費を捻出する余裕がなかったのであります。そこに、是非 AMA に参加したいと申し出てくれたのは、第 12 期中野真衣さんと梶田伸吾君でした。こうして、参加できなかった他のメンバーの思いを乗せて、蓮岡と愉快で頼もしい第 12 期サポーター 2 名とアメリカのサンアントニオへ旅立つことができたのでした。

AMA という大舞台で論文を発表することができ、ゼミ生の皆様には感謝致しております。そして、このような機会を得られたのは、言わずもがな、小野晃典先生のおかげです。本当にありがとうございました。

CAT-G 優勝報告

第 12 期 中原 裕人

◆CAT-G とは？

CAT-G (Career Academy in Takeda Business Game) は、武田薬品工業株式会社が主催する大学生・大学院生を対象としたビジネスゲーム大会です。ゲーム内容は、「架空の製薬企業の経営者となって 35 年間の経営を行い、多くの事業を成功させ、企業価値の最大化を目指す」というものでした。小野ゼミからは有志で集まった第 12 期生の荒井、平嶋、中原が“小野薬品”というチーム名で参戦しました。そして、小野ゼミチームは、慶應義塾大学のほか、東京大学や一橋大学などの有名大学揃いの 19 チームの中で、総合優勝を果たし、さらに、4 部門中 3 部門において個人賞を獲得することもできました。

◆大会の概要

5 年を 1 クールとして、7 クールの企業経営を行い、企業価値の最大化を目指すというのが、このゲームの主題でした。そこで、消費者・競合他社の動向を見つつ、『販売』、『研究開発』、『経営戦略』に関する最適な意思決定を行うことが求められていました。私たちは、マーケティング専攻であったからこそ、「ニーズ予測」を最重要視しつつ、意思決定を行うこ



優勝に向かって意思決定を行う小野ゼミ生

とを心がけました。経済発展に伴う糖尿病患者・がん患者の増加や、発展途上国におけるパンデミックの発生など、35 年の月日の中で生じうるニーズを予測し、そのニーズに応えるべく前もって薬品の研究開発を行いました。また、「CSR」も重要視し、天災被害に対する金銭的支援や、環境に配慮した廃棄物処理など、製薬企業だからこそその高い倫理性に基づいた企業行動も忘れませんでした。

◆総合優勝・個人賞受賞を果たして

小野ゼミに入ってひたすら勉学に打ち込んできた私たちとしては、その 1 年間の成果が存分に発揮できた CAT-G は、本当に素晴らしい経験となりました。「課題設定がチームの中で明確になっており、それに基づいた情報収集を行うことができていたのは、マーケティング力とチームワークを活かした結果だと思えます」という講評を大会主催者から頂くことができたことは、私たちにとって大きな自信になりました。このような貴重な機会を与えてくださった小野先生には心から感謝しております。ありがとうございました。

インカレディベート報告

第13期 井上 雄哉

◆インカレディベートとは…？

2009年より始まったインカレディベートも今年で7回目を迎えました。今年度は、関西大学の岩本ゼミとディベートを2試合行いました。ディベートと採点方式は小野ゼミ方式を採用しておりますが、普段関わる機会の少ない他のゼミのメンバーと議論を行うことによって、立論や資料作成等、お互いに良い刺激を受けることができます。



練習通りの素晴らしい立論を行う福嶋君

◆活動後記

小野ゼミに入った3年生にとっての初めての大きな舞台となるのが、インカレディベート大会です。小野ゼミ生にとって、インカレディベートは負けれない戦いです。先輩たちの輝かしい勝利の歴史に、自分たちも名を残すべく努力を重ねてきました。

1 試合目は、「アパレル企業が新ブランドを展開する際に、ファミリーネームを使用すべきか否か」というテーマでディベートを行いました。このテーマは小野ゼミが事前に希望したものであったため、入念に準備ができた一方、勝利して当然だというプレッシャーも大きかったと思います。小野ゼミの出場者は、福嶋、長妻、平久、矢野、小黒でした。1試合目ということもあり、一同緊張をしているかと思いきや、リラックスした様子も見受けられました。最初のつかみで織田信長の例を用いるなど、聴衆を引きつけようとする福嶋君。ディベートでは絶対的な強さを発揮するエース：長妻君。いつも以上に強気で相手に反駁する平久さん。わかりやすい例えを用いながら、相手をねじ伏せる矢野君。最後のまとめで、前に出て聴衆に目一杯のアピールをする頼れるゼミ長：小黒君。各々が自分の持つ実力をいかんなく発揮した素晴らしい一戦でした。

2 試合目は、「家電市場において先発者と後発者のどちらが競争優位を獲得できるか」というテーマでディベートを行いました。このテーマについては、岩本ゼミ側が希望したテーマであり、かつ直前まで先



ドヤ顔をきめながらまとめを行う小黒君

発者・後発者の定義などが定まっていなかったため、最後まで苦労を強いられたチームでもありました。小野ゼミの出場者は清水、山本、西森、井上、川村、木田でした。その膨れたお腹を震わせるくらいの大声で立論発表をする清水君。堂々とハキハキとした発表で、聴衆を引き込んでいく山本さん。フリーディスカッションで、あたかも講義を行うか如く相手を説得する西森君。穏やか

なトーンながら、論理的な反駁・フリーディスカッションで、相手に発言をさせない川村君。最後はわかりやすいまとめに定評がある木田君が締め、今までで最も相手を圧倒できた一戦でした。

そして、結果は無事小野ゼミが連勝し、1か月以上もの努力が報われた瞬間でした。特に1試合目のチームは集計者のミスで、最初は敗北宣言を言い渡された分、安堵感も大きかったでしょう。

そんな熱戦を繰り広げたインカレディベートの後は、小野ゼミ生御用達の「つるのや」で、懇親会が開かれました。普段交流する機会のない岩本ゼミ生と交流を深めました。

最後になりますが、涉外として至らない私のメールを毎回添削し、夜遅くまで相談に乗ってくださった小野先生。立論に関するアドバイスや、資料の見せ方を時として厳しく、時として優しくご指導していただいた大学院生、12期生の方々、本当にありがとうございました。感謝の意を綴ったところで、活動後記を締めくくらせていただきます。



講義のような物言いで相手を論破する西森君



懇親会で親交を深める両ゼミ生たち



2ゼミ合同写真

KUBIC 準優勝報告

第 13 期 川村 澄明

◆KUBIC とは…？

KUBIC とは、関西大学が主催するビジネスプランコンペティションのことです。「学生の力」をキャッチフレーズに掲げる KUBIC は、2015 年で、なんと 10 年目を迎える、由緒あるコンペティションになります。今年度は、第 13 期生西森・山本・矢野・川村の有志 4 名でチームを結成し、参加しました。この KUBIC には、あらかじめ企業から提示された“お題”に沿ったビジネスプランを応募するテーマ部門と、特段、お題は指定せずにビジネスプランを応募する自由応募部門があります。私たちは、テーマ部門において、ハウス食品から提示された「カレー事業の新提案 ※変化する生活シーンに対応した事業プラン」というお題について考え、「カスタマイズするカレー“カレーキューブ”」というビジネスプランを提案しました。その結果、私たちは、全国から 800 を超える応募の中、1 次審査、2 次審査を勝ち上がり、準優勝を果たすことが出来ました。



◆発表の概要

現在、カレー市場において圧倒的なシェアを誇るハウス食品ですが、お茶の間のをぞいてみると、ハウス食品のカレールウだけでなく、他社のカレールウをブレンドしたり、醤油や蜂蜜などを用いて、家庭独自の味付けをしていたりすることに気づかされます。このことは、消費者が現在販売されているカレールウに満足していないということを示唆しているように思われます。また、個食化が進行している現代において、1 パック 6~8 食分で販売しているのは、消費者が使い切ることが出来ないため、将来カレールウが受け入れられなくなっていくことも容易に想像が付きま

す。こういった現状を踏まえ、私たちは、3 個を組み合わせることで 1 食分のカレーを作ることが出来るカレー調理用キューブ、名付けてカレーキューブを提案しました。こ



発表用資料の 1 ページ

のキューブには、味の種類に幅を持たせ、その多様な組み合わせによって、これまでのカレールウの概念を覆す、幅広い味を提供可能にします。

◆発表後記

KUBIC への参加を通して、「自分たちのアイデアを、ビジネスプランという 1 つの形にしていくことの楽しさ」を一同実感することが出来ました。大会に応募したきっかけは、4 月の本ゼミにて、「KUBIC プラン発表」という企画で、第 13 期生全員が、各々考えてきたプランを発表し、そこで私がカレーキューブの原案を発表したのが始まりでした。その数日後、それを KUBIC に応募することに賛同してくれた同期 3 名と合流し、案を煮詰め始めました。6 月に、1 次審査の締め切りがあるため、ケースやディベートの合間を縫って、それに向けてメンバーで話し合いを進めていきました。メンバーは全員食えることが大好きだったので、アイデアを考えるプロセスをとっても楽しみながら進めることが出来ました。カレーキューブの組み合わせを考えているときには、おいしいそうなタイカレーの話に熱が入り過ぎて、何度も話が脱線しかけたことも良い思い出です。プランを提出する上で一番苦戦したのは、ビジネスプランの採算計画を作ることでした。ネット上でハウス食品の決算報告書を見たり、他社の固定費を探したりしながら、試行錯誤して準備を進めました。大会の応募締切前日の本ゼミ後、ギリギリまで先生に文章などをチェックしていただき、23 時まで開いている目黒の郵便局に応募書類を出しに行ったことは、今でも鮮明に覚えています。

この苦勞が報われることが分かったのは、8 月の半ばでした。私が三田論の話し合いから帰ると、自宅に関西大学から郵便が届いていたのです。はやる気持ちを抑えながら、その封筒を開けると、そこには 1 次審査・2 次審査通過の認定証と、本選出場のお知らせが入っていました。それ以降、論文活動と並行させながら、本選出場に向けて、パワーポイント資料の作成作業を行いました。いかに私たちのビジネスプランを理解してもらえるような資料を作るかを念頭に置き、アニメーションまで細かく先生にアドバイスをいただきながら作りました。

本選前日の本ゼミには、模擬発表を行い、大学院生の方や第 12 期の先輩方、同期から数多くのフィードバックをいただき、最後には小野先生から「楽しんでくるように」とエールを送られました。しかし、その時の自分たちの発表は及第点に達していなかったため、本選当日は、関西大学に早めに到着して練習をしました。初めは、関西大学のキャンパスの広さに圧倒され、どこで練習をすべきか迷いましたが、最終的には、売店近くのベンチに陣取り、本番のフォーメーションを確認しながら、何度も通し練習をしました。4 人が 1 列に並び、同じ方向を向いて語りかけている姿は奇妙だったのか、そばを通る多くの学生から視線を集めてしまいました。それでも気にせず、直前まで練習を重ねました。



発表を間近に控えて、やや緊張気味なメンバー
(左から西森、山本、著者、矢野)

本番直前、応援にいらしてくださった小野先生が「緊張しているの？ 珍しいね。楽しんできて。」と笑顔で声をかけてくださったため、私たちは緊張を和らげてから、壇上に上がることが出来ました。

本選後の懇親会では、“お題”の提供者であるハウス食品の方々こそいらっしゃらなかったものの、多くの協賛企業の社員の方々とお話することが出来、自分たちのプランの評価点や、改良点について教えていただくことが出来ました。実際に企業で働いていらっしゃる方々からのコメントは、学生



緊張しながらも声を張り上げて発表をするメンバー

である私たちにとって、とても新鮮でした。また、KUBIC 運営者の中には、6月のインカレディベートで対戦した岩本ゼミのゼミ生の方もいて、数か月ぶりの交流が出来ました。

ビッグマウスの緊張漢みずき（矢野）、経理担当のやっさん（西森）、まとめアナウンサーSandi（山本）、そして泣きかけのプレゼンター著者、という、なんとも個性（？）豊かなメンバーでしたが、各々がその役回りをうまく果たしたことで、楽しみながら大会出場を果たすことができたと感じています。この経験を踏まえ、今後も楽しみながら物事に取り組むことができるよう、意識してまいります。



表彰式の後の、笑顔の記念撮影（左から山本、西森、小野先生、矢野、著者）

最後になりますが、プランの根幹となるアイデアや、パワーポイント資料などについて、丁寧なご指導をくださった小野先生、よりよい発表のためのアドバイスをくださった大学院生、第12期生、および第13期生には、本当に感謝しております。小野ゼミ初となる、準優勝という荣誉に浴することが出来たのは、皆様のおかげです。本当に、ありがとうございました。

読売新聞大学生マーケティング・コンペ 最優秀賞受賞報告

第13期 小黒 祐貴

◆読売新聞大学生マーケティング・コンペとは…？

読売新聞大学生マーケティング・コンペは、読売新聞が主催する大学生・大学院生を対象としたマーケティング・コンペティションです。今年が第1回目の開催で、「読売新聞の販売促進戦略」が課題でした。小野ゼミからは有志が集まった第13期生の井上、小黒、川村、木田、西森、矢野の6人がチームを結成し、優勝を目指して参加しました。そして、小野ゼミチームは見事、最優秀賞を頂くことができました。

読売新聞 大学生 マーケティング コンペ

◆発表の概要

読売新聞をはじめとして新聞業界は現在斜陽傾向にあり、特に購読者の少ない層である20代から40代の若者の3人に1人が読売新聞を購読するような販売戦略の策定が求められました。私たちは、「Joy to Read Once Again」と題して、若者に新聞を読むことの楽しさを訴求するような提案を行いました。具体的には、大学構内に出店し新聞の価値を知る機会を提供する「Yomiuri Café」、本誌で取り上げられた記事に対して意見の交換ができる本誌連携型アプリ「Yomie!」、そして当社が一括管理をして実施する「読売ポイント」の3つ戦略を提案しました。このコンペには、夏休みが始まったころから取り組み始め、9月に提出した1次審査書類で予選を通過し、本選に進む6チームの中に選ばれることとなりました。本選では、読売新聞本社に赴き、大勢の社員の方々や、演出家のテリー伊藤さんなど著名な審査員の方々に前に、12分間の魂のこもった発表と10分程度の質疑応答を行いました。

◆活動後記

このコンペは、三田祭論文で忙しくしていた時期と被っていたため、両立することがとても大変でしたが、チーム一丸となってこのコンペに取り組めたことは、一生残るであろう良い思い出となりました。

はじめの頃は、居酒屋でお酒を飲みながらアイデアを出し合っていました。1次審査の締め切りが近づくと、学校が閉まるギリギリの時間まで、中庭のベンチでパソコンを打ち続ける日々が続きました。1次審査を通過した後は、発表資料作りに取り組みましたが、私たちのアイデアを12分間という短い時間で伝えることの難しさに苦闘しました。実際大会の前日に本ゼミの時間を使って発表した時には、散々な発表となってしまいました。本ゼミ終了後、再度みんなで発表原稿の見直しを行い、1人1人の発表を客観的に評価し合い、予想される質問への対策も入念に行いました。発表当日、社員の方に案内してもらい会場に到

着すると、会議室の一角で行われるような小さなコンペだと思っていた私たちを圧倒するような立派な会場、そして大勢の社員の方々に前にチームに緊張が走りました。また、コンペの直前までずっと練習をしていましたが、毎回誰かが詰まってしまう、皆が揃ってしっかりと発表できたことは1度もありませんでした。しかし、そんな状況にもかかわらず、私たちの待機室には笑い声が溢れていました。緊張感や不安感を掻き消し、リラックスして発表に臨めたのも、チームメン



読売新聞本社ビルにて発表する小野ゼミ生

バーの仲が良かったこと、そしてメンバー全員がお互いを信じ合っていたことによるものだと思います。

そして迎えた発表本番、私たちの発表は、練習では1度も見られなかったような完璧なものであり、正直発表を終えた瞬間に勝ちを確信しました。コンペの表彰式で最優秀賞をいただいたときは、今までの努力が報われたことに、チーム全員が喜びを共有し、その後の懇親会では、他のチームの方々から小野ゼミの発表に対する賞賛の声をかけていただき、良き思い出となりました。後日、賞金を受け取った私たちは、このコンペへの参加を忘れない思い出として残すため、お世話になった先生も含めて7人お揃いのネクタイを購入しました。

最後になりますが、何度も何度も私たちの資料作りにアドバイスをくださり、一緒にアイデアまで考えてくださった小野先生。発表の仕方や資料内容に関してアドバイスをくださった大学院生、第12期生の方々、本当にありがとうございました。



記念撮影（左から撮影係として駆けつけてくれた福嶋、そしてメンバーの井上、矢野、川村、著者、西森、木田）

KSMS 国際学会報告

第 13 期 西森 康斗

◆KSMS 国際学会とは…？

KSMS 国際学会は、正式名称を“Korean Scholars of Marketing Science International Conference”といい、日本商業学会も加盟する GAMMA という国際学会連合を組織化した KSMS という学会組織が開催する学会の 1 つです。2015 年は、「持続可能な未来に向けたマーケティングおよびマネジメント」をテーマに、韓国の延世大学にて開催されました。慶應義塾大学からは、小野ゼミに加えて高橋郁夫ゼミ、清水聰ゼミ、鄭潤澈ゼミ、および高田英亮ゼミの合計 5 ゼミが参加し、著名な先生方と共に発表を行いました。

◆発表概要

今年度の KSMS 国際学会での発表は、第 12 期の先輩方が昨年度のマーケティングゼミ合同研究報告会において発表した論文、「消費者制作型広告の広告効果」を英訳して行うことになりました。その内容は、「消費者が制作した広告に露出した一般消費者の広告評価およびブランド評価は、企業が制作した通常の広告に比して高いのだろうか？」という疑問に解答するために、広告制作者と一般消費者の関係性に着目しつつ、広告制作者の属する準拠集団および認知リソースの制約という 2 つの観点から、消費者制作型広告の広告効果に関して、実証分析を試みる、というものです。

◆韓国での学会発表

発表には、第 12 期マケ論チームの羽佐田さんと松山さん、第 13 期英論チームの私で計 3 人、第 12 期・第 13 期混成メンバーで臨みました。学会の開催日程が三田祭直前であり、第 13 期はその準備に追われていたため、多くの面で第 12 期の先輩方に助けていただきました。特に英論チームは、切羽詰まった状況が続いたため、先輩方と時間を合わせて、メンバー全員で通し練習を行うこともなかなかできない状態でした。韓国出発直前に行われたサブゼミでも我々の発表の出来は完成に程遠く、発表に不安を抱えたままでの韓国への旅立ちとなりました。



先生の部屋で原稿を確認する発表メンバー
(左から著者、松山さん、羽佐田さん)

私たちは、発表に備えて十分に休めるように、現地には前日入りしました。しかし、夜遅くまで先生に原稿の不安な箇所を相談させていただき、メンバー同士での確認を行った後、さらに個人練習を行ったため、眠りについたらのはかなり遅くなってからでした。

翌朝には、前日遅くまで練習したおかげで、発表できるレベルにはかなり近付いていたものの、メンバー一同眠い様子であり、目を擦りつつ朝食に向かいました。発表当日にもかかわらずシャキッとしないメンバーでしたが、本場キムチの圧倒的な辛さが効いたのか、朝食後にはしっかりと気合が注入されていました。

その後、会場入りをして手続きを済ませた私たちは、発表までの時間を学内のカフェテリアで練習を重ねて過ごすことにしました。さらに、発表直前には、先生に最終チェックをしていただいた上に、激励のお言葉を頂戴し、気合十分で発表を迎えました。その甲斐あって、本番では皆全力を出し切り、聴衆を引き込むような、今までで1番の発表ができました。会場からも一際大きな拍手をもらい、それまでの努力の成果を実感できたように思います。海外での学会発表という貴重な機会を得ることができて、本当に良い経験になりました。夜遅くまで指導してくださった小野先生、サブゼミ等で意見をくださった大学院生の皆様、そして、資料作成など様々な面で大いに助けていただいた第12期の先輩方に心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



延世大学でプレゼンを行う著者



発表後の記念写真（著者は、前から2列目、右端）

2015 ICAMA Honorable Mention Award 受賞報告

第 11 期 OG 蓮岡 聡美

◆ICAMA とは？

ICAMA とは“International Conference of Asian Marketing Association”を正式名称とする国際学会であり、Korea Marketing Association, Chinese Academy of Marketing Science, そして日本商業協会によって、2014 年から開催されています。他の国際学会と同様、匿名審査を経て高い評価を得た論文だけが、その学術的価値を評され、ICAMA にて論文を発表する権利を得ることができます。ICAMA では、アジア諸国における最新のマーケティング動向をテーマに、消費者行動、企業と顧客のコミュニケーション方法、プロダクト・マネジメント、異文化間マーケティング、そして小売・流通チャネルと、5 つのセクションに分かれて展開されています。

今年度は、日本商業協会がホストを務め、早稲田大学で開催されました。これは、日本で開催された初めての国際学会です。小野ゼミからは、第 12 期英論チーム、第 11 期英論チーム、大学院生 3 名が論文を発表する権利を得、そのうち第 11 期英論チーム、および大学院生 2 名が「奨励賞」を受賞しました。

◆執筆論文の概要

第 11 期英論チームの論文のタイトルは、“Why Do People Avoid/Seek Personalized Ad on the Web”です。近年、多くの広告実務家は、有効な SP として Web 上のパーソナライズ広告を活用しています。しかし、消費者は、その広告に対して必ずしも望ましい反応を示すとは限りません。このような事実があるにもかかわらず、Web サイト上のパーソナライズ広告の忌避規定要因を探究した研究は、著者の知りうる限り存在しません。そこで、本論文は、Web サイト上のパーソナライズド広告を忌避する消費者の心理メカニズムを描いた概念モデルを構築、実証分析を試みました。

◆奨励賞を受賞して

第 11 期英論チームとして、国際学会で論文を発表するのは 3 度目でした。そして、この 3 度目の国際学会が学生生活最後に参加する学会だったと思うと、皆様への感謝の思いで胸がいっぱいになります。社会人である土屋さん、住田君は、学会発表に参加することは叶いませんでしたが、伊礼君、内藤君、私の 3 人で、最後の舞台上、堂々とプレゼンが出来たことを喜びと感じます。また、最後の舞台にふさわしく、華々しく奨励賞を受賞することができ、マケ論メンバー一同、改めて皆様に感謝申し上げます。とりわけ、ICAMA への投稿を助言して下さった小野晃典先生には、この場を借りて厚く感謝申し上げます。

2015 ICAMA Honorable Mention Award 受賞報告

第 13 期大学院生 石井 隆太
(第 10 期 OB)

◆報告の概要

報告タイトルは、“The Moderating Role of Dual Distribution: The Impacts of Interfirm Resources on Channel Performance”（デュアル・チャネルの調整効果: 企業間資源がチャネル成果に及ぼす影響）です。製造業者と流通業者は、例えば、両企業を結びつける情報・販売システムや定期的な知識共有など、企業と企業の関係の中で資源を持っています。そして、こうした企業間資源は、製造業者と流通業者が共同で生み出す成果（チャネル成果）を高めると言われています。本報告は、「企業間資源が、チャネル成果を“より”高めるのはどのような時か?」という問いに対して、デュアル・チャネルの使用（直接チャネルと間接チャネルの併用）に着目することによって解答しようと試みました。具体的には、製造業者は、デュアル・チャネルを使用している場合、直接チャネルをとおして、自社製品を流通させるノウハウや顧客の情報を入手することができ、そうした知識によって、流通業者との企業間資源をより効率的に活用することができるのではないかと仮説化し、日本の製造業者からサンプルを収集して、実証分析を行いました。

◆2015 ICAMA Honorable Mention Award を受賞して

初めて参加した国際学会にて、こうした荣誉ある賞をいただけたことは、大変嬉しく思います。発表に向けてご指導くださった小野先生、建設的なアドバイスをくださった大学院生の皆さまに、御礼申し上げます。

さて、今回の受賞は、私にとっては、驚きでした。というのも、この賞を巡って、競合となる研究があったのですが、私から見れば、明らかにそちらの研究の方が、理論も分析も優れていて出来が良いため、私が受賞することはまず無いと思っていたからです。つまり、自信がなかった研究内容が、審査員から高く評価されたわけです。逆に言えば、自分がどれだけ自信がある研究内容であっても、他人から低く評価されるということもあるということです。社会で生きていく中で、自分の人生が、他人の評価に委ねられるということは多くあるかと思います。しかし、他人がどう評価



学会報告中の著者

するのかを予測することは困難ですので、それに依存してしまうのは、非常にキケンです。それよりも、自分で自分をきちんと評価してやらなければなりません。ですので、今回の受賞に甘えたり、驕ったりすることなく、今後も、まずは自分自身が納得のいくような研究を着実に進めていきたいと思っています。

2015 ICAMA Best Doctoral Consortium Paper Award 受賞報告

第9期大学院生 菊盛 真衣
(第7期 OG)

◆執筆論文の概要

“How Do Consumers Evaluate Familiar versus Unfamiliar Brands with Negative eWOM?”

本論は、消費者が1つのウェブページ上に多数の正のクチコミと負のクチコミが掲載されているという現実的な状況を想定した上で、消費者がクチコミ対象製品のブランドをよく知っている場合と、あまり知らない場合といったブランド熟知性の違いに伴って、1つのウェブページ上に掲載されている正のクチコミと負のクチコミの比率が消費者のブランド評価に与える影響はどのように異なるのかを吟味した。実証分析の結果、熟知性の高いブランドに対する負のクチコミの影響の度合いは、1つのウェブページ上の負のクチコミの比率が増えるのに伴って逡増する一方、熟知性の低いブランドに対する負のクチコミの影響の度合いは、1つのウェブページ上の正のクチコミの比率の増減とは無関係に一定であるということが見出された。このことから、熟知性の高いブランドである場合、1つのウェブページ上における負のクチコミの比率が増加しても、消費者のブランド評価は緩やかに低下する一方、熟知性の低いブランドである場合、そのページ上の負のクチコミの比率の増加に比例して、ブランドに対する評価は低下すると結論づけられた。

◆執筆後記

昨年の ICAMA でも受賞を目指して論文を投稿しましたが、残念なことに受賞は出来ず…今度こそ！ という思いで今年も挑戦したところ、大変光栄なことに賞をいただける運びとなりました。リベンジを果たせてほっと一安心です。私以外にも、小野先生を始め、小野ゼミからも多くの受賞者がいます。皆様、この度はおめでとうございます。Best Doctoral



学会報告中の著者

Consortium Paper Award の受賞に際しては、*Asian Marketing Journal* というジャーナルへの投稿義務はなかったため、今回の受賞論文をこれからどこかのジャーナルに掲載させたいと企んでおります。自分の研究を形に残し、eクチコミ研究の大きな潮流に一石を投じることが出来たら…と夢は膨らみます。日頃からご指導くださる小野先生および共に切磋琢磨し合う同門の大学院生には、改めて深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

第 12 期英語論文チーム海外活動報告

第 12 期 平嶋 健也

平嶋, 荒井, 梶田, 伊藤の第 12 期英論チーム 4 名は, 昨年度の KSMS (Korean Scholars of Marketing Science) に引き続き, 本年度は SMA (Society for Marketing Advances) という海外学会に参加しました。その活動を振り返りたいと思います。

◆SMA 本番に至るまで

昨年度に KSMS に参加した私達でしたが, 本年度はより大きな舞台に挑戦しようと思い立って, マーケティング界においても著名な学会である SMA へ (論文のテーマは KSMS から変えずに) 挑戦することにしました。KSMS ではいわゆる「学生の部」に参加したのに対し, SMA では「一般の部」に挑戦するというので, 私達は文章表現や考察内容をより洗練しなければなりません。しかし, SMA への投稿締め切りが 6 月 1 日という就活真っ只中だったこともあって, あまりゆったりとは作業をできず…。小野先生のご協力の下, 小野先生+チーム全員で締め切り前の 3 日間に集中作業をすることに! 4 人でしっかりと役割分担し, テキパキと作業を行った結果, 納得のいく出来のものを作ることができました。そして 2015 年 7 月 5 日, 無事に査読合格の通知をいただきました! その後は, 就活の荒波に揉まれたり, Proceedings 用の原稿を用意したり (小野先生, その節は本当にありがとうございました), 第 0 回オープンゼミで 2 年生に向けて発表をしたりしながら, SMA が開催される 11 月まで, しっかりと準備をしつつ過ごしました。

◆いざアメリカへ!

日本から 14 時間ほど飛行機に乗り, 2015 年 11 月 4 日 (現地時間), 学会開催地であるテキサス州サンアントニオに無事 (私が手荷物検査に引っかかったりしましたが 笑) 到着。今回の遠征は, もちろん学会参加が一番の目的でしたが, せっかくはるばる来たのだから, 観光を楽しまないのはもったいない! そんなわけで,



皆で楽しくサイクリング!

私達は、ホテルにチェックインした後は早速観光へ。リバーウォーク（街中に張り巡らされた水路に沿って、たくさんのレストランやショップが立ち並ぶお洒落なスポット）を巡りながら、メキシカンを食べたり、ショッピングをしたり…。夜には、アメリカのお酒やお菓子を買ってホテルで酒盛りをしました。「荒井君はどうすれば彼女ができるか」等の楽しい議題について、小野先生、およびSMAに参加する大学院生の先輩方を交え、小野ゼミならではの熱いディスカッションを交わしました。

しかし翌日にトラブル発生！ 私たちが参加するセッションの運営の方から、発表時間短縮の知らせが届いたのです。急遽パワーポイントや発表台本を作り変えることになった私達でしたが、もはやトラブルには慣れたと言わんばかりに手際の良さを発揮し、テキパキと作業を終了！ 引き続き、ショッピングモール巡りやサイクリングをして観光を楽しみました。もちろん、発表練習は毎晩しましたよ！

そして11月8日、とうとう私達12期英論チームの発表の時となりました。昨年のKSMSでは緊張でガチガチだった私達でしたが、様々な舞台で発表を繰り返してきた私達にとっては、それは最早過去の話。トップクラスの学会が舞台であろうと、外国の方々の前であろうと、何も問題はないのです。目を引くデザインのパワーポイントに加え、楽しげに説明する私達の発表に、聴衆の方々は釘付けになりました。私自身、荒井君、伊藤君、梶田君の生き活きとしたプレゼンを聞いていて、皆の成長を感じました。足元の覚束なかった入ゼミ当初の皆の姿は、もうどこにもありませんでした。発表後の質問タイムにも、セッションの終了後にも、多くの聴衆の方々から質問や賛辞の御言葉をいただきました。皆の努力の成果が、それだけ多くの方々的心里に届いた、ということなのかもしれません。

2014年6月末から活動を開始して、実に1年5ヶ月。辛くも、充実した英論活動でした。自分たちで独自のアイデアを創出し、それを英語で論文化し、そして発表を行う、というプロセスは、私達英論チームを大きく成長させてくれたと実感しています。ここまで支えて下さった小野ゼミの皆さんに、深い感謝の意を表したいと思います。特に、大学院生である菊盛真衣さん・中村世名さん、そして誰より、小野先生には大変お世話になりました。英論活動で培った経験を活かして、社会に出てからも頑張っていこうと思います。皆さん、本当にありがとうございました！



発表後、SMAの開催されたホテルにて（左から荒井、伊藤、梶田、著者）

全国大学生マーケティング・コンペティション 準優勝報告

第13期 長妻 泰成

◆全国大学生マーケティング・コンペティションとは…？

全国大学生マーケティング・コンペティションは、神戸市外国語大学が主催するビジネスコンテストです。このコンペの特徴としては、プレゼンテーションをすべて英語で行うことが挙げられます。第5回となる今年度は、協賛企業、株式会社 KIRIN の「午後の紅茶おいしい無糖、または、メッツコーラの販売促進戦略」が課題でした。今年度は、小野ゼミ第13期から、Team Men's Onon-no（福嶋、著者、清水）と Team Power Puff Girls（平久、山本）の2チームが優勝を目指して参加しました。そして、小野ゼミ2チームとも決勝大会に進出し、Team Men's Onon-no は、準優勝を果たすことができました。



Team Men's Onon-no（左から福嶋、著者、清水）



Team Power Puff Girls（左から平久、山本）

◆発表の概要

私の参加した Team Men's Onon-no は、メッツコーラの国内売上を1年間で20%増加させられる SNS (social networking service) を用いた販売促進戦略を考えました。私たちは、30~50代の男性と、その家族をターゲットとし、「Changing Fat Dad to Mets Dad」というコンセプトで、メッツコーラを消費することで、家族が一体となって父親のダイエットに取り組むという提案を行いました。

9月から準備をし始めたこの大会は、関東予選を通過したチームが神戸で行われる決勝大会に進めるというものでした。第13期生は、三田論



準優勝を喜ぶ Team Men's Onon-no（著者は左端）

を抱えながら本コンテストに参加しました。関東予選では、提案するビジネスプランの概要を PowerPoint ファイル 10 枚にまとめ上げ、5 分間で発表しました。決勝大会では、予選を突破した 7 チームが一同に介し、売上 20%アップのためのビジネスプランの集大成を、多数の審査員と大勢の聴衆の前で発表しました。

参加した 2 チームともが決勝大会に進むことができ、決勝大会においては、会場を盛り上げるような発表をし、Team Men's Onon-no は、見事、準優勝という結果を残すことができました。

◆発表後記

「とにかく楽しかった」というのが正直な感想です。本コンペティションは、三田祭論文執筆の時期と丸かぶりでしたので、私たちは、時間の合間を縫ってビジネスプラン考案や発表資料作成を行いました。私のチームは、グループワークではプランのアイデア・女性の批評・下ネタなど多彩な話を繰り広げるデブ（清水）と、真面目ではあるがどこかやる気のないけいご（福島）、そして私というイケメン 3 人チームでしたが、英語が得意な人はゼロ。小野ゼミからのもう 1 つの参加チームである女子 2 人組は、普段から英語で会話をするような堪能者ばかりでした。男子チームは、英語で勝負するのは無理だと考え、プランの面白さと、笑いの 2 つで勝負する方針をとりました。プランが完全には出来上がっていないのに、何度も小野先生のところへ行き、アイデア、英語の表現の相談をさせていただきました。関マケの次の日に行われた関東大会を何とか突破しました。その後、ゼミの時間をいただいて、決勝大会の資料とプレゼンを先生や先輩、同期に見ていただき、沢山のアドバイスをいただきました。とうとう待ちに待った、神戸での決勝大会。壇上に上がってすぐ、本ゼミでは不評であった OIZAP のネタを全力で行いました。下記の写真にあるように、大会後に女子と触れ合える懇談会を忘れて、デブは全力でした。デブを初めてかっこいいと思いました。私たちのプレゼンは、発表チームの中で 1 番の笑いを取り、大成功に終わりました。結果は、準優勝だったものの、全力を出したので、あまり後悔はありません。

このような結果を出すことができたのは、ゼミのみなさんのサポートがあったからです。恵比寿のご自宅に行ったり、中央大学に行ったりして、何度も私たちの英語を修正してくださった小野先生、本当にありがとうございました。小野先生には優勝という結果を報告したかったのが本音です。サブゼミや本ゼミでアドバイスをくださった先輩の方々、そして迷惑をかけてしまった論文チームのみんな、本当にありがとうございました。最後に、3 ヶ月ほど一緒に優勝を目指して頑張った、デブ（清水）、けいご（福島）、本当にありがとう。2 人と一緒にチームだからこそ出せた結果だと思っているぞ。



OIZAP のネタで爆笑を取る清水くんと著者（左）

商学会賞受賞報告

第12期 荒井 礼

◆商学会賞とは？

商学会賞とは、「慶應義塾商学会賞」を正式名称とし、慶應義塾大学商学会が年1回発行する『三田商学研究学生論文集』に掲載を許可された論文に与えられる称号のことです。商学部に所属する学部生なら誰でも投稿することができますが、すべての投稿論文が掲載されるわけではなく、商学部教授陣の審査を経て高い評価を得た論文だけが、その学術的価値を評され、「慶應義塾商学会賞」受賞論文として称えられつつ、掲載許可を得ることができます。

◆投稿論文の概要

投稿論文のタイトルは、「アクティブサポートが顧客のブランド評価に及ぼす影響——eクチコミの発信動機とサポート内容に着目して——」です。近年、企業が顧客との新しいコミュニケーション手法として活用しているアクティブサポートは、顧客のブランド評価を高める場合もあれば、低める場合もありますが、どのようなアクティブサポートが顧客の高いブランド評価に帰着するかということを議論した研究は、存在しませんでした。そこで本論文は、サポートの内容を独自に分類した上で、新たにeクチコミの発信動機の知見を援用することによって、eクチコミの発信動機に応じていかなる内容のサポートを行うと、顧客の高いブランド評価に帰着するか、ということ初めて吟味しました。

◆皆様への感謝

私が商学会に論文を投稿し、商学会賞を受賞することができたのは、小野ゼミの、何事にも挑戦する伝統、何事にも妥協を許さない伝統、そして、挑戦する人を応援する伝統があったからに他なりません。こうした小野ゼミの素晴らしい伝統を作り、継承してくださった OBOGの皆様、そしてなにより小野先生には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。小野ゼミに入れて頂き、育てて頂き、ありがとうございました。小野ゼミの素晴らしき伝統は、きっと13期の可愛い後輩達が受け継いでくれることでしょう。来年の受賞報告を楽しみにしています！（笑）



小野先生と（ソウルにて）

商学会賞受賞報告

第 12 期 羽佐田 智也

◆投稿論文の概要

投稿論文のタイトルは、「環境配慮型製品の購買行動を促す訴求方法——ベネフィットと社会規範に着目して——」です。近年、人々の環境意識の高まる中、薄型ペットボトルを用いた「い・ろ・は・す」に代表されるように、環境に配慮しているという点に特徴を持つ製品（環境配慮型製品）が見られます。「い・ろ・は・す」は、薄型ペットボトルを大きな特長として訴求し、大ヒットしました。本論文では、「い・ろ・は・す」の例のように、「消費者に対して、環境配慮型製品の購買行動を促すには、どのような訴求方法が効果的なのだろうか？」という問いを立て、それに解答すべく、人々に環境配慮行動を促す効果的な訴求方法およびそれらの訴求方法が効果的に機能する条件を探究した既存研究の知見を援用すると同時に、消費者に環境配慮型製品の購買促す訴求の場合にのみ存在し得る、商業的動機をもつメッセージ発信者（売手である企業）の存在を考慮することで、消費者に環境配慮型製品の購買行動を促す効果的な訴求方法およびそれらの訴求方法が効果的に機能する条件を探究しました。

◆商学会賞を受賞して

この度、私の投稿論文が、審査を無事に通過し、商学会賞を受賞すると共に、『三田商学研究学生論文集 2015 年度号』に掲載されることになりました。小野先生はもちろんのこと、先輩・同期・後輩、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私は、春先から商学会賞投稿を見据えて卒業論文の執筆を始め、今年度の商学会賞に投稿しました。昨年度の三田祭論文では惜しくも審査を通過できず、非常に悔しい思いをしたので、今回、商学会賞受賞・掲載の榮譽に浴することができたことを大変に嬉しく思います。卒業論文は、1 年間かけて執筆しますし、無計画にのんびりとしてしまいがちですが、商学会賞を目標に据えたことで計画的に取り組むことができました。卒論のペースメーカーの意味もあったのではないかと考えています。

13 期は、小野ゼミに入会するに際し、「学生時代にこんな勉強を頑張った！と言えるものがほしい」という志望動機を挙げてくれた人が多かったように記憶しています。そんな 13 期の皆さん、商学会賞に挑戦すると、商学会賞受賞という榮譽や副賞である賞金を得られるチャンスがあります。卒論のモチベーション管理をしやすくなります。メリットはまだまだたくさん浮かびますが、デメリットは特に思い浮かびません。学生時代の勉強の集大成に、是非とも商学会賞に挑戦してみたいかがでしょうか。来年度の商学会賞受賞報告を楽しみにしています。

OB・OG 総会賞品提供者一覧

第1期 OB 辻 要さん	○ キッコーマン アップルパイ風トーストソース 10個
ご提供ありがとうございました！	○ キッコーマン 鶏肉のトマト煮込みソース 10個
第2期 OB 中島 崇浩さん	○ コーセー ヘアカラー直後用のシャンプー&コンディショナー (3日間分) 3セット
ご提供ありがとうございました！	
第3期 OB 熊谷 元さん	○ 東海旅客鉄道 ボールペンシャーペンセット 1個
ご提供ありがとうございました！	○ 東海旅客鉄道 定規 1個 ○ 東海旅客鉄道 メモ帳 1冊 ○ 東海旅客鉄道 鉄道小冊子 1冊 ○ 東海旅客鉄道 クリアファイル 5個 ○ 東海旅客鉄道 クリップボード 1個
第3期 OG 酒巻 恵子さん	○ 宝ホールディングス スパークリング清酒『澁』(150ml) 20本
ご提供ありがとうございました！	
第5期 OG 古橋 絵里菜さん	○ 味の素 クノールカップスープ 11個 クノールカップスープ DELI 3個
ご提供ありがとうございました！	

第8期OB 石田 陽一朗さん

ご提供ありがとうございました！

○ イオンリテール PARKER ペン 1本

第8期OB 荻野 真央さん

ご提供ありがとうございました！

○ ロッテ グリーンガム (3パック) 10個

○ ロッテ アーモンドチョコレート 10個

○ ロッテ パイの実 10個

○ ロッテ ガーナミルクチョコレート 10個

○ ロッテ トップオ 10個

○ ロッテ 乳酸菌ショコラ 10個

○ ロッテ ショコランタン 10個

○ ロッテ クランキー 10個

○ ロッテ コアラのマーチ 10個

第9期OB 秋山 賢輔さん

ご提供ありがとうございました！

○ サントリー食品インターナショナル
メーカーズマーク (750ml) 1本



【編集委員紹介】

第9期OB	竹内 亮介
第10期OB	石井 隆太・中村 世名
第12期生	荒井 礼
第13期生	山本 彩理・西森 康斗・清水 亮輔・矢野 瑞喜・川村 澄明・木田 有亮・ 小黑 裕貴・井上 雄哉・長妻 泰成・福嶋 啓悟・平久 千紘

【編集後記】

こんな大雑把でテキトーな私に、会誌編集長は向いてない——4月にはそう思いました…そして、今でもそう思っています。このような場では通常、「役職を通して苦手なことが克服できた」というようなことを書きますが、「役職を通して苦手なことが克服できた」というようなことを書きますが、お恥ずかしいことに私は最後までダメダメでしたので、この役職を通して細かい作業が得意になったとは口が裂けても言えません。昨年の編集長である第12期荒井さんは、今年商学会賞を受賞されるような優秀な先輩です。かくいう私は、SASの課題レポートで毎度再レポを命じられる（しかも書式ミス）ようなへなちょこです。会誌編集長、というかっこいい響きからは程遠く、記事の最終チェックをしてくださる小野先生にご迷惑をおかけてしまいました。編集締切3日前、何度提出してもミスが見つかり、差し戻されるOBOG会名簿を前に、自分の不甲斐なさから涙が止まりませんでした。そんなときに、先生からいただいた激励のお言葉は今でも忘れません。「この仕事は、やりがいのある仕事です。寄稿者の書くエッセイには魂がこもっていて、そんなエッセイを読むのを、皆が読むのを心待ちにしているからです。辛いです、終わらせましょう。」このお言葉をいただいた時、私は目の前の作業にとらわれ、自分の役職がいかに素敵であるかを忘れていたことに気づきました。

今こうして冊子編集作業が終わろうとしています。締切前日まで手伝ってくれた同期。私のことを心配して一緒に作業をしてくださった荒井さん。お忙しい中、「手伝うよ」と電話をくださった大学院生の石井さんと竹内さん。そして何より、最後まで私のミスを根気強く指摘してくださった小野先生。皆さまの支えがあり、本日ここに編集作業を終えることができました。誠にありがとうございます。この仕事を通して、細かい作業に対する忍耐をつけ、自分が少しでも「小野ゼミ生」らしくなれたことを願ってやみません。

第13期外務編集長 山本 彩理

外務の仕事では、OB・OGの皆様とやり取りをさせていただく場面が多くあり、始めたばかりの頃の私は、電話やメールを1つするにも、どんな対応をされるのだろうかと緊張気味でした。しかし、対応してくださったOB・OGの方々は皆さん親切で、エッセイの依頼などに対しても丁寧に対応してくださいました。時には励ましや労いの言葉をいただくうちに、段々と連絡を取ることが楽しみになっていきました。ご寄稿いただいたエッセイは、どれを読んでも眩しく感じられ、自分も卒業後には後輩からそんな風を感じてもらえるような存在になりたいと思えました。ご多忙中にもかかわらず、エッセイを寄稿してくださったOB・OGの皆様、本当にありがとうございました。また、OB・OG会誌編集にあたって大変なご助力をいただいた、大学院生の皆様、先輩方、同期、そして何より、昼夜問わず添削をしてくださった小野先生に、心から感謝したいと思います。本当にありがとうございます。

第13期外務副代表 西森 康斗

この1年間、外務の仕事を行うにあたって、様々な方にご助力を頂きました。まず、第8期OBの岩崎さんと黒沢さんには、OB・OG会についてだけでなく、名簿更新や三田祭などにおいてもアドバイスをいただきました。私にとって、岩崎さんと黒沢さんと一緒にOB・OG会等を行うことができたのは、かけがいのない経験となりました。本当にありがとうございました。12期の羽佐田さん、林さん、荒井さんは、私にとって心の支えでした。日ごろから、アドバイスや励ましのお言葉を頂き、安心して、様々な仕事を行うことが出来ました。来年、私が4年生になったときには、御三方のような立派な先輩になれるよう努めてまいります。そして、最後になりますが、小野先生には、三田祭ブース、会誌、名簿など、アドバイスや添削をしていただき、本当にありがとうございました。小野先生のおかげで、三田祭ブースが大盛況になったり、より完成度の高い会誌が完成できたと思います。私は、外務代表という役職に就くことができ本当に良かったと思っています。小野ゼミのOBOGの方々の皆さまから学んだことを胸に止め、私が社会人になったときには後輩に「小野ゼミでよかったな」と思っていたような先輩になりたいと思います。

第12期外務代表 清水 亮輔

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会 OB・OG 会誌 Vol.IX

2016年2月6日 発行	著者	小野晃典研究会 OB・OG・現役生一同
2016年3月31日改訂版発行	編者	小野晃典研究会 OB・OG・現役生有志 (編集責任者 山本 彩理)
発行元	慶應義塾大学商学部小野晃典研究会	

ONO
SEMI
NAR
SINCE
2001
2001